

トレント議
會の決議し
たる禮典の
數

第一、禮典一般の說、

トレント議會の禮典に關する説明の大切なる者は大略左の如し、(一)禮典の數は七あり、(二)禮典は義と稱せらるるに必要なり、故に必ず之を受けざる可らず、少くも之を受くるを望まざる可らず、(三)禮典は必ず恩寵を有すれば之を行ふことに依り、妨礙を置かざる人心に之を與ふるなり、(四)僧官は眞實に之を行ふの意志なければ其禮典ハ無効あり、(五)洗禮、堅信禮、及び聖職禮は之を受くる者の上に消へざる標徴を與ふる者あり、以上の第四の點に關する語は左の如し、曰く「若し人あり僧官は禮典を行ふに當て教會の欲するが如き意志を有するに及ばずと云は、其人は呪はる可し、痛悔禮に關しても殆ど同様の記録を附加せり曰く「痛悔者は單に自身一箇の信仰をのみ信任し痛悔なくも又は僧官の謹嚴に禮典を行ひ眞實に罪を赦さんとするの意志なきも尙己の信仰により神の前に眞實に罪を赦さるべしと思惟す可らず、何とあれば痛悔なきの信仰ハ罪の赦しを能ふる者に非ず又僧官が戯れに禮典を行ひたるを知りて尙他に眞實に

禮典の働きの法

行ふ所の者を求めざる人は己れの教に關して尤も不注意なる人と言ひざる可らざればあり」と、爰に「謹嚴に行ひ眞實に行ふ」と云へるは即ち僧官の意志の正當なるべきを記述したる者あり、ベラーミンは禮典は之を行ふことにより有效的とあるの說を敷衍して云けるは此句は必ずしも心内の或狀態は禮典を行ふに於て必須的に非ずと教ゆる者にあらず、只禮典の有效的となるは必ずしも此等心内の狀態による者にあらざるを示し又心内の狀態は妨礙を置かざると云ふ事實に依て顯はると、氏の論は左の如し曰く「意志信仰及び痛悔等は禮典を受くる成人には欲く可らざる者なり左れと心内の性質として欲く可らざるも其働きの原因としてにはあらず蓋し信仰及び痛悔は禮典の恩寵に影響する者にあらず又は禮典として有効とならしむる者にもあらず只妨礙を除て禮典の有効を來らしむる者なり」(De Sacramentis, Lib. II, Cap. 1.)、又曰く「心内必須の性質を具へずして禮典を來る者は妨礙を置かざる者と云ふを得ず然らざれば罪を惡むことなきのみならず信仰なき者も尙洗禮によつて義と

せらるべきなり」(De Poenitentia, Lib. II, Cap. 9.) 是は實に天主教會中の學者の中にも尤も溫和の説を持つる者ありとす。ツヤンセニスト派は實際上に於ても理屈上に於ても他の天主教者よりは一層心内の状態を重じて禮典の有効を來すに必須なる者となせり

禮典の有効
的となるは
執行者の意
向に關係あ
る事

禮典を行ふ僧官の意向は必須欲く可らずといへハ、ハローミンの明かに教ゆる所なり、又意向の種類中には、*intentio virtutis* (徳の意向)は必要あり、*intentio actus* (實際の意向)は必ずしも必要にあらず、*intentio habitualis* (習慣の意向)は充分あらず、「徳の意向」は實際の意向即ち一時顯はれて忽ち絶ゆる所の意向の徳に於て繼續する者なり、氏は又カルビンが僧官の意向に依屬するは禮典の確實を減する者なりと云へる反對論に對して曰く「余は答へて云ふんとす人間は此世界に於ては己れの救及び稱義に關して無謬の確證を得んと思ふ可らず、然れども道德上の確證ある者は他人の意向に依屬する時と雖ども禮典より得られざるに非ず人は此確證の上に安んずるを得べきあり、何となれば意向を有するとは尤も容易なる事あれば僧官が

或る外部の表徴を以て其意向なきを示す時に非ざる以上は其意向を有するや否やを疑ふに及ばざるあり」(De Sacramentis, Lib. I, Cap. 27, 28.) 左れハハローミンは單に外部の禮式に従て往くを以て正當意向の緊要なる者となすにあらざることは以上の答辭を見て知るべきあり。トレントの告文の此問題を解釋して従前の説に反したり、曰く僧官は禮典の式文に従て式を行ふも尙戯れに行ふを得べし即ち教會の要求に従へば謹嚴に禮典を以て恩寵の方法を欲せざる可らざる場合にも尙戯れに之を行ふを得べし、トレント議會の謹嚴に眞實に行ふべしと云へる語は之より少き意味に取る可らずと、天主教者は此説に従ふこと能はざりしかども又之を制すること能はざりき、之は従ふ時は人の靈魂をして單に變易さ人心に依屬せしむるに至り又聖職の確實をも無にする者なればなり、是を以てトレントの教父等は之を看過する能はず或る監督は心内の意向は必要にあらずと唱へ例へば僧は偽善の僧にして實際不信者なる場合には全會衆をして禮典の思に與るを得ざらしむるの不都合を來すべ

ルuteran派の恩寵説と天主敎の説との比較

の效きなきも(Hist. IV, 14)の言はるる事、信條も亦次の語を以て同説を主張せり、曰く「禮典を正當に使用して以て得たる恩寵は禮典の内にある力によるに非ず」と(第十七章)之を反してルuteran派の説によれば禮典は單に恩寵の徴、印、又は機會にあらず、其器械的原因、其有效的方法ありとす、蓋しルuteran派の言葉の内に眞實の力ありとすし而して言葉は禮典の重なる要素とすあり、是故にガールヘードのカペリン派を攻撃して禮典其物に歸するの力甚だ少ありと云へり、是に依て視ればルuteran派の説は天主敎の説即ち禮典は之を行ふに由りて(Ex opere operato)働くとの教理に接近するが如し、然れどもルuteran派は天主敎の此教理を棄つること他の新敎者に異ならず、左れを細に察するときにはペテリミンの解説せる天主敎の教理とルuteran派との差違は單に左の如くなる可し、即ち前者は信仰なければ禮典の恩寵を受くるの妨げとなる故に信仰なかる可らずと云ひ、後者は信仰の恩寵を受くるに必要欲く可らざる器械なるが故に信仰なかる可らずと云ふに過ぎず、ペテリミンは勿論此問題に

意向説に對する新敎者普通の感情

洗禮の結果に關する天主敎の説

關する天主敎の教説を最も少く代表したる者なり、又ルuteran派の所論信仰のペテリミン或は他の天主敎者の定義する所の信仰よりは一層深遠ある意味ありしあり、吾人は勿論此等の事實に注意せざる可らずと雖も夫れにしても尙此兩派の言辭相接近するや疑ふ可らず、又禮典執行者の意向を要するや否やの問題に關しては新敎者は全く天主敎の説を却けり

第二、洗禮

昔に煩瑣學派の重なる人々が定義したるが如き洗禮有效説若くは洗禮の必要等の教は依然として天主敎會内に存せり、ペテリミンの説く所によれば洗禮は罪科を拭ひ腐敗を愈し又は洗禮執行以前にありし不充分なる信仰を變へて充分なる信仰となす者あり、又未だ授洗せざる試中の者は機會あらば授洗せんと目的あれば救はる可し、此目的は是非なかる可らず、「授洗せざる人は救はれず又少くも授洗を望まざる人は無知なるにもせよ或は無能なるが爲にもせよ決して救はれず」(De Sacramentis, Lib. I, Cap. 4)

授洗せざる小兒の運命に關する説

ルイテル派の洗禮論と天主敎の説との比較

29) 是に依て見れば授洗せずして死せし小兒は勿論救はるべきの機會なしとせざる可らず、是を以て「スティーミンは斷然斯かる結論をなせり、曰く「教會は常に斯く信仰せり苟も授洗せずして死せし小兒は亡ぶ可し」と、氏は又其爵の理由を記して曰く「小兒の授洗せざるは小兒の過にあらざる雖ども其亡ぶるは小兒の過ちなきよならず蓋し小兒は原罪を有すればなり」(De Bapismo, Cap. 4.) ニコール、ボスエー等も亦同一の語を以て授洗せざる小兒の救を得ざるを云へり、トレント問答書も亦明に同結論を合むが如し、是を以て見れば天主敎の定説を略知るべきなり、即ち人類の大部は神の壇斷なる定命に依て救の可能性を奪はれたりとあすの恰も極端なる預定論者云ふ處の定命説と異なることなし

ルイテル派は洗禮の必要及び有效を重するの點に於て其だ天主敎に似たる所あり、左れど其異なる點も亦あきにあらずルイテル派によれば基督信徒の小兒は授洗せずとも神の非常の恩恵に依て救はるべきことを得べし、勿論アウガスボルク信條及びコンコルドの誓書は「アナバプテスト派の説

ルイテル派の小兒の洗禮論

即ち小兒の授洗を可らず小兒は洗禮なくとも救はるべしとの説を攻撃せしこと明なり、然れども小兒は洗禮なくとも救はるべしとの點を攻撃するに當ては稍々制限を置かざる可らず、ルイテル派を代表する神學者等は異教徒の小兒の運命に關しては言ふを猶豫する所なきにあらずと雖ども基督敎徒の小兒に關しては洗禮なくとも必ずしも救を奪はるゝにあらずと唱ふるなり、之と同時に彼等は父母が小兒をして授洗せしむるの義務あるを強論したり、又天主敎者と同く必要の場合にては俗人も洗禮を施すの權あるを云へり

洗禮の効

禮典の有效に關する一般の説と符合してルイテル派は教へて曰く洗禮は靈の恩恵を來たすに有效なる方法ありと、勿論或る場合に於ては受洗者は未だ受洗せざる前に既に信仰によりて靈の賜物を受くることあるべしと雖ども如何ある場合にても苟も正當に之を受くる時は恩寵の方法にして且の前に受けたる恩賜あらば之を確むる者なりとす、故に信仰を以て之を受くる者には凡て罪の赦、養子とせらるゝこと、及び内心の改善等

小兒洗禮の有効

の事を確むる者なり、左れど最後の内心の改善は未だ直に充分なりとはす可らず日を追ふて益々完全の域に赴く者なりとす

ルーテル派の説によれば稚兒も亦或人と同く洗禮によつて靈の恩寵を受くべし此結論は之を取る者よ多少の困難を與へざるに非ず、蓋しルーテル派は一般に強く信仰の靈の恩寵を受くるに必要なりと唱ふれば小兒は如何にして信仰を働かすことを得んやの難問に答へざる可らず、ルーテルは之よ答へて小兒は信仰を有す何となきば信仰の實際の賜物なればありと云ひしが終に其説を變じて小兒に洗禮の有効となるは單に神が斯く制定したるに依ると唱へ、小兒が果して信仰を有するや否やの點は之を學者の議論に一任せり、ルーテル派の學者等は斷言して曰く洗禮の際には小兒にも眞實の信仰ありと、其例を擧ぐればクインステッドは曰く「洗禮により又洗禮に於て聖靈なる神は小兒の内に眞實活ける信仰を起し玉ふなり」と(De Baptismo, Sect. II. quest. 8)、ガーヘッドは曰く「吾人は云はんとす聖靈は洗禮の際に其力と思ふによりて信仰を起し玉ふ此信仰は働

改革派の洗禮必要論

かざる信仰にわらず又は單なる習慣にわらず我等の知る可らざる或る働きたりて基督を敬るに至り而して新生と救贖とに與かるべし」と(Confess. Cath., P. 116.)、以上を引ききたる語に依れば信仰は洗禮の以前に在るに非ずして寧ろ洗禮に由て來る者なりと思惟したるを知るべし、而して是は實に當時の學者の一般の思想なりき、トルナー氏は小兒洗禮の問題を叙するに當て云けるは「十七世紀のルーテル派の神學は洗禮の節に信仰ある可らずとの論據を棄て「バプタニスト」派に反して信仰は新生を起す同く洗禮の結果なりと思惟せり」(System of Christ. Doct., § 139.)

改革教會にてはルーテル派に比すれば一般に洗禮の必要を重せざるなり、蓋し改革派は危急の場合に於ても俗人の洗禮を行ふの宜しからず寧ろ斯かる場合には禮典を廢すべきと唱ふるを見るも之を知るべきあり、カルビン云けるは「若し表徴たる禮典を廢するも其之を廢したるは無頓着若くは輕蔑若くは怠慢より廢したるに非ずんば不可あることあり、又神より之を行ふの權を授かりたる人の外は之を受けずとなすは却て神の制定せ

る禮典を尊敬する所以あり、若し教會より之を受くることを得ざるあらば他人の手より之を受けたりとて何の恩恵をも受くることなし、吾人は單に信仰によつて神の善より斯かる恩恵を受け得るなり」(Inst., IV, 15)、「ピヨツプ、ホール曰く「洗禮を輕蔑するは罪なりとは疑ふべし然れども小兒が止むを得ずして洗禮を受くるを得ざりし者と尙地獄に赴くべしとは如何なる殘酷ぞや」(Works, Vol. VI, P. 248.)

禮典全體に關してツヰングリの如き思想を有する者は洗禮は直接に恩恵を通與する者なりと強唱せず、却て洗禮は信仰を増すと云ふよりは是迄存せし信仰を證すと云べしと説けり、然れども適々改革派中にも是よりは強き意見を抱きし者なきにあらず、實に信仰箇條の或る者に於て之を見るを得スヨツチ信條に曰く「吾人は確信す吾人の洗禮に由て基督に接木せられたり、是に由て基督の正義に與り罪の救しを得るあり」と、三十九箇條には洗禮を以て新生の表徴、教會に入るの器械、赦罪の約束を印する方法、又は祈りの法よりて信仰を堅ふし恩寵を増すの方便なりと云

洗禮の結果
お付ての説

せり、フレンチ信條に云へるあり、「洗禮は我儕に養子とせらるゝ證として與へられたる者なり、是に由て我儕は基督の身に接木せられ其血に依て洗はれ其聖靈に依て潔めらるべし」と、ワルナンセスの信條にも殆ど同様の語を以て論せり、曰く「吾人は信す基督は洗禮の典を制定したる我儕の養子とせらるゝ證とささん爲なりと、又信す我儕は之に由て耶蘇基督の血により罪を洗はき神聖なる生活に至るを得べし」と、以上の記述ハ勿論改革派の普通説と符合する者あり、普通説とは何ぞや曰く禮典は其自身の徳によりては恩寵を來たす者にあらずとなす是なり、吾人は又注意せざる可らずツリクの信條或はウエストミンスターの信條の如き重なる者に於ては洗禮に依て來る恩寵は其禮典施行の際に來る者にあらず其後の時に來る(或は全く與へられざることあり蓋し其時は受洗者は撰まれたる者の中にあらざるあり、ツリクの信條は斯く論せり)者なりと記載せるを、又吾人は注意せざる可らず洗禮の際に受くるとある靈の恩恵は全く禮典と連絡あるにあらず禮典を受けざる際にも之を受け得る者ありとは

改革派の小
兒洗禮論と
ルーテル派
の異なる點

改革教會の教理の一なるを以て受洗せざる者も亦受洗せざる者も同じとす。小兒の洗禮に關しては改革派の説は左の二點に於てルーテル派の説と異なれり、(一)ルーテル派は小兒の洗禮を必要の事とあしたれども改革派は寧ろ之を小兒の權利又は特權と思惟せり、ルーテルは教へて曰く信徒の兒は恩寵の契約に與らん爲には受洗せざる可らずと、改革派は云く信徒の子は契約の表徴として受洗するの理あり、何となれば彼等は既に約束の内におり既に基督の支那なればなりと、カルビン曰く信徒の兒は是迄教會以外の者が神の子とあらん爲に受洗する者にあらず、之に反して此嚴格なる表徴に由て教會に入會せしめり、何とされば彼等は既に約束に依て基督の躰に屬したる者なればなり』(Hist. IV. 16)、ハイデルベルク問答書にも亦同様の記述あり、(二)改革派は小兒は受洗の際に實際の信仰を働かすとの説を拒めり、左れと彼等は多くは聖靈の働は小兒の心靈中に在て此に依て精核の信仰を生じ此信仰は將來實際の基礎とあると認めたり、又洗禮より來る適當の恩寵の受洗の後に與へらるゝとの原理は殊に小兒

ヘンリー、
ドットウエ
ルの奇説

洗禮の效の
續く時間

の場合に適用せられしなり、左れと此點に於ては全躰悉く一致するに非ず大監督アムステルダムは將に死せんとする小兒にして撰まれたる者は洗禮の際に更生するも其他の者は生長の後實際信仰する迄は實際の更生なしと云ふにあり、ハムモンド、テロットソン及び其他の人々は洗禮の際の更生は内心の變化にあらずとの説を抱くが如し、然れども之に反して小兒は一般に洗禮の際に更生すとの意味を以て説く處の者も亦なきに非ず、#トリアスは又説をなして撰まれたる小兒は通例洗禮の前に更生すと云へり、ヘンリー、ドットウエルは又奇説を吐けり曰く靈魂は自然の狀態にては死すべき者なり故に受洗せずして死せる小兒は死後存在せざるべし、又成人と雖ども監督に依て定められたる者より受洗せざる者は全様あるべし只彼等は時としては罰せられんが爲に存在することあるべしと云ふなり、ルーテル派及び改革派は共に洗禮の效は最終まで存すと云へり、又は爾か云ふは其實力は生存中繼續するに適當と云へり、天主教者は洗禮

後罪を犯して洗禮の效を失ひたるるときは他の禮典殊に痛悔の禮典によつて之を補ふを得べしと唱ふれどもルイナル派及び改革派は之を反し内心の悔改によつて洗禮の恩寵の下に再び走り返り斯くして洗禮の效は絶へず繼續する者なりと説くあり、ケムニツ曰く悔改とは洗禮より來る恩寵の約束に立ち歸るに外ならず』(Examen. Pars II.)、カルビン曰く「吾儕墮落せし時は洗禮の事を思出し之を以て我が心を鎧ふべし之に依て常に罪の赦の確證を得るなり』(Inst. VI. 15)、『フレンテ信條に云へるあり「吾人は云はん」とす假令洗禮を受くるは只一度ありと雖ども之に依て來る處の利益は全生涯に跨り死の後にまで及ぶ斯くて耶穌基督は最後に至るまで我等の稱義成聖の源あるを證す』(Art. XXXV)

ツシニアン派の洗禮論

ツシニアン派は洗禮に關して論ずる所甚だ少しツシニアンは洗禮は必ず受くべき者なりと説かず、又他宗教より基督教に轉じて新たに基督教の信仰を取らんとする者に取て洗禮は適當なる禮式ありとも云はず、左れどもツシニアン派全軀は此點に於ては氏の極端説に従はず、ラコビアン

クイツカー派の説

問答書の改正譯に云へるあり曰く「基督の教會にて常に守り來りし外部の儀式即ち聖禮典とは洗禮と聖餐となり』(II. 3)、『又小兒の洗禮に關しては此問答書中に甚だ之を輕蔑するの語をみせり、然れども又之を以て慈愛によつて行ふを得べき者とみせり、又洗禮の適當なる禮式の方法ありと云へりルイナル派並に改革派の普通に信せし處は之に反して浸すことは必ずしも此禮典の本性にわらずと云ふにあり

バプテスマ派の記述

クイツカー派は基督教の治世に到ては只純然たる靈の洗禮あるのみ水の洗禮は最早教會内に存するに及ばずと唱ふ、千六百八十八年の「バプテスマ」派の信條中に左の如き語あり、曰く「眞實神に對して悔改し我等の主耶穌基督を信仰し又之に従ふ處の者は此禮典を受くるに足る」と、又曰く「水中に浸すことは此禮典に缺く可らざる處あり」と、然れども「バプテスマ」派中にもメノナイト派の如きは必ずしも浸禮のみを主張せざるなり

メノナイト派

第三、晚餐禮

第四期 教會及び禮典

改革時期に
は晩餐の間
題盛に行は
る

宗教改革時期に當ては此問題程争論の點とありし者恐くはなかるべし、
法王黨にては化躰説を拒むときは牢獄は口を開て待ち苦と死とは忽ち來
りしかり、英國のヘンリー八世の如き法王に反對の王の治世に當ても尙
此教理を却くるは最大罪惡にして禁刑に處せられべき者なりき、新教者
も亦晩餐禮に關して互に争論を醸し爲に古今未曾有の厭ふ可き神學上の
文學を生きたり

トレント議
會に於て定
めし晩餐説

トレントの議會にては其權威を以て昔しの煩瑣學派の晩餐の教義を大略
受け納れしのみならず其詳細の點に至るまで悉く之を批准したり、即晩餐
のパンと葡萄酒とは祝福の後直に主基督の眞の血肉と變之其靈魂其神性と
變化すと云ひ、又祝福の言葉に依て基督の躰パンの中に存し其血は酒の
中に存し而して又相伴法コンソメーションによつて兩者互に兩者の中に存するに至ると云
ひ、全躰の基督は實に各種の一部中にも存すと云ひ、パンと葡萄酒の實
質は肉と血の實質に變化すと云ひ、眞神にあすべき禮拜は聖禮典にも爲
す可しと云ひ、教會の始より兩種を用ひ來りし風習ありしと雖も教會は

ペライミン
の企圖

一種のみを用ゆるの理由ありと云ひ、マス即ち眞正な生者並に死者の爲
の挽回の犠牲は十字架に懸りし犠牲と同一なり只其方法異なるのみと云
ひ又僧侶のみ陪することも正當なりと云ふが如きは純然たる煩瑣學派神
學の思想ありき

若し能く意を留めて天主教の化躰説の定教を觀察するときは全く道理に
基くに非ずして教會の權力に依て定めたる者なるを知るべきあり、故に
此定教に對して理由を附し説明を加ふるも敢て利益あることなし是を以
てペライミンの如きは緻密なる説明と辯護とを爲したれども左程信用せ
られざりき、次に擧ぐる者は氏の記述中より引照せし者なり、曰く「吾人
は尤も眞實に云はん」とす禮典の中に「躰と肉と血と存し而して其肉は躰
にして體にあらず」(De Sac. Eucharist., Lib. I. Cap. 2) 曰く「基督は晩餐に於て
躰の存在法を取らず靈の存在法を取り玉へり、何とあれば全き基督は何
れの分部にも居り玉へばあり」(Ibid.) 曰く「吾人の正當に云はん」とす基督の
躰は晩餐に於てあり、存じ、保たれ、見出され、取られ、又受けらるる

第四期 教會及び禮典

眞實現存れ
方法に關す
る説

し又葡萄酒を俗人に與へざるは權利の剝奪なりと非難するなり
 ルーナルは其晩餐の説を基督の肉跡の偏在説と連結したり、神の右の座
 とは各處にあるなり故に基督は神の右に昇りしと云ふも敢て其此世に現
 在するを妨げざるなり、其人性より云ふも彼は各處に偏在するあり故に
 故に晩餐に現在すること勿論なり、左れと基督の各處に偏在すること
 其特に神の定に依て晩餐禮に現在することとは敢て撞着せざるあり基督
 の跡は一種特別の有様にて晩餐禮に存す、即ち場處上の存在にあらず普
 通の跡は他の跡との關係によつて限らるるも基督の跡は然らず又は神の
 如く一の制限なく各處に充滿するにもあらず一箇の靈が一箇の場處に存
 するが如く晩餐禮に現存し王ふあり、實に基督の跡は第二の意味にて各
 處に存す而して第三の意味にて晩餐に現存す(ゴストリン氏の語)
 ルーナル派の信條は一般に上の如き區別をさすまでに至らず、左れとコ
 ンゴドの誓書には普通の肉跡存在法と基督の肉跡の晩餐に存在する法
 とを區別したり、而して此思想と基督の肉跡を眞實に受くるとの教理を

神聖天の
の思はるる
の思はるる

全週拜會

改革派中晩
餐に關する
三様の説

ツキングリ
の晩餐に用
ゆる言葉の
説明
並に晩餐禮
全体に關す
る説

連結するに當て寧ろ矛盾の言をさし肉跡は眞實よ口に由て受くるも靈の
 方法天の方法にて受くると云へり、其語に曰く吾人は信じ教へ亦表白す
 基督の血肉のパンと酒と共に受けらる單に靈の意味にて信仰お由て受く
 るのみならず又口に由ても受く然れども肉跡の方法に由るにあらず靈の
 方法天の方法に由て受くるありと
 改革派中には晩餐に關して三様の説あり(一)ツキングリの説(二)カルピンの
 説(三)中間の説即ちカピピン説を制限せる説是なり
 ツキングリはルーナルに反して晩餐の際の主の言葉は形容的の意味に解
 せざる可らずと主張す、氏は連辭を以て形容の性質を顯はさんとして曰
 「是れ我が跡なり」とは單に「是れ我が跡を表す」との意に外ならずと、エ
 ランバマスは其實に於て「ツキングリと一致すと雖も跡ある語に形
 容的の性質ありと唱へたり、又ツキングリによれば元素の基督の血と跡
 とに關係あるのみ其表號として關係あるあり、信徒は晩餐の禮に於て基
 督の徒弟たるを表白し又其忠義心を表し而して愛及び親交の徴を受くる

なり、信徒は實に心靈的に基督の躰を食ふ者と云ふを得べし、然れども心靈的に基督の躰を喰ふとは全心全意を以て基督に由て來る神の慈悲良善に依信するを云ふに外ならず」(Expositio Chri. Fidei)、アーミニアン派もツニニアン派も亦皆此説を稱賛せりリムボルクは甚だ強くツニニアン派の説のカルピンの説に勝るを云へり

カルピンの説並に其流の範圍

カルピンはルーラル派とスキツランド神學者との間にあり、晩餐に關する争論の既に生じたる後に出たる學者若れば幾分か此兩黨派を中和せんとするの傾向を呈せしなり氏はルーラル派と同く強く晩餐禮に基督の現實存在し玉ふの語をなし、又之と同時にスヰツランド神學者等と一致して基督の躰の尙天に存し實際は決して此世界にわらずと唱ふるあり、氏の持説を略言せば實に左の如し榮光を受けたる基督の人性は靈上の徳及び力の源なり、此力は聖靈の助に由て信じて晩餐を受くる處の者に與へらる故に徳或は力の點に云ふときは基督の躰は晩餐に現存すと云ふ可し、又基督の躰を喰ふとは全く靈上の事にして信仰によつて喰ふこと

あり故に信せざる者之に關係なし口にて喰ふなどは論外の事なり、以上はカルピンの立場あるが次に引照せる氏の言を見るときは充分之を顯はすに足る曰く「基督の肉は豊饒無盡の泉源の如し即ち神性より流れ出づる生命を受け之を吾人に與ふるあり……今一見するときには基督の肉と我儕との間には場處上の距離甚しければ之を我儕の食物とするは信じ難きが如しと雖ども吾人は聖靈の神秘なる力は吾人の官能に超越するを思はざる可らず是を以て吾人の測量を以て彼が廣大を測るは如何に愚ある哉、吾人は寧ろ吾人の信仰を以て理性の了解せざる所を受納れ聖靈の力は場處上遠隔せる者をも合結するを信せざる可らず……晩餐の禮典に於て基督の血肉は眞實にパンと酒とに依て代表せらるるあり、而して其趣意は第一吾人は凡て基督と一躰に結合せん爲あり、第二基督の實質を受ければ其力に由て凡ての祝福を受けん爲あり……躰は躰たらざる可らず又靈は靈たらざる可らず……若しパンに附着するの外は基督の肉敢て晩餐に存せしと思ふ者は謬なり、何となれば是れ我儕と基督とを結び

ツ井ングリ
どカルピン
との中間に
位する説

付くる聖靈の働を借て問はざる者なればなり、是れ基督の我情に降るに非ずんば現存せずと思惟する者なり、是れ基督我情を擧ぐるとも尙我情の其目前に在らずと思惟する者あり(Inst. III. 17)。

ツ井ングリ及びカルピンの兩説の中和説と吾人の名けし者はカルピン派に比すれば一層温和にして且つ神秘的の分子少し、又カルピン派の如く基督の榮光赫と禮典の恩寵とを直接に連結せざるなり改革派中の信條中に「イデルバルク問答書」フレンチ信條「ベルナック信條及びスコツヂ信條等は全くカルピン説に陥らず、三十九箇條は明にカルピン説に近からず寧ろツキシツツの説に近し、左れと英國教會の初代に當ては一般にカルピン説を受け納れたることはフーカールの如き著名なる神學者の言を見て知るべきなり、フーカールの言の實にカルピンの言と伯仲す又クフムス、ゼウエル等の語も亦カルピン風に傾く者多し、然れども第二ヘルムスツツの信條ウエズトミンスター信條等は稍々中和説に傾くが如し而して改革派の大傾向は實に此等の信條に依て代表せらるるが如し。

痛悔禮に關
するトレン
ト議會の告
文

第四期 痛悔禮

痛悔の禮に關してもトレント議會は長々しく之を論じたり而して、其論は大略煩瑣學派の説と一致す夫れ痛悔禮は洗禮を受けて後墮落せし者の救はれんとするの是非必要にして恰も破船後板に依て浮ぶを得るが如し、痛悔者は悔改と白狀と償還とを爲さざる可らず、償還は永遠の刑の赦されたる後も尙存する所の一時の刑を除く者なり、赦さる可き罪は白狀するを可とすれども死す可き罪は悉く白狀せざる可らず、監者或は祭司のみは只罪を抹し得べし故に祭司が我爾を赦すとの語を禮典に於て用ゆるは單に白狀する者の罪の赦されたるを宣告するのみならず自ら之を赦すの權あるを示す者あり、償還を爲すには自ら喜で神の罰を受くるか若くは之を耐忍して待つか又は祭司の裁量に由て罰を受くか必ず其一に居らざる可らず、若し最良の痛悔は新らしき生活を爲すに在りと云ふ者あらば咒はるべし、以上の議會の告文ありと此最後の一言は實に議會が改革者殊にルーナルを罰せんと目的を以て呈出したる者なりとす。

懺悔に關するルイタル派の説

新教者中には決して天主教の所謂懺悔の禮典を認識する者なしルイタルは白狀若くは抹罪等の語をせしむることありしと雖も天主教の立場を去るゝと甚だ遠し、蓋しルイタルは僧侶に白狀するは適當の事なりとしたれども敢て之を必要なりと云はず、又白狀を必ずしも當ても必ずしも罪の表を精細に造るに及ばず只殊に良心を苦むる處の罪のみを陳べば足れり、又僧侶も之に向て勸告すべしと唱へたり又私に告されたる抹罪の宣告は公然福音に於て宣告せられたる者と異なることなしと唱へたれども又赦罪の約束を各個人に適用するは甚だ利益ありとなせり、ルイタル派は終局抹罪を以て禮典となすの不可あるを認めたれどもルイタルの與へたると同様の地位を此禮式に與へたること疑なし、

改革教會は一般に私の白狀を不可とせしむるも特別に條例の要求するも非ざる以上は單に神の前私に白狀するか又は會衆の前にて神に白狀するを可となせり、第二ヘルベチック信條に曰く「吾人は信す此公明正大なる白狀即ち神の前に爲すか若くは會堂に於て公然爲すか孰れにしても一般

此點に關する改革派の信條並に學者の説

の白狀にて足れり何ぞ他に祭司の耳に呬て而して罪を赦さるゝの必要あらんや斯くの如きは聖書中に其實例なく又「誠命あし」と(十四章)ラメンチ信條は耳語の白狀をサレンの惡巧の中に數へたり、カルセンは之を洗滌の事と名けたり、ブリンガー其説教に於て云へることあり「吾人は只神にのみ吾人の罪を白狀すべし是にて足れり、何とされば神は吾人の心を洞見し玉へば尤も正しく吾人の白狀を聽き玉ふべければなり」と、英國神學者中には私の白狀及び抹罪を認可したる者あれども彼等も亦敢て之を必要となさず人々の撰擇に任せたり、ラテマー曰く「若し禮拜の場所にて受くべき一般の赦罪を以て満足すること能はざれば私に僧侶の下に往くの特許なきにあらざると、ラッカーは私の抹罪を以て只神の爲し玉ふ處を宣言するに他あらずとなせり、又私の白狀に關しては英國教會は之を強迫せず文禁制せずと云へり、監督ヨセフ、ホール云けるは「吾人は決して白狀の正當にして利益あり且つ稱揚すべき者たるを否まず、然れども人の靈魂を以て無理に之を爲さしむるは大に不可なり」と、改革教會一般の

立場より云ふときは開閉の鑰を司るとは福音の使命を負ふるの意か若くは教會が戒規を行ふの權を有するの意ならざる可らず

第五、結婚禮

結婚禮に關するトレント議會の決議並に新教の反對の決議

結婚に關してトレント議會の決議せし處の尤も著しき者は次の如し、夫れ既に結婚せし者にして居を分て住することは種々の原因より爲すを得べし、然れども如何ある原因も(姦淫の場合に於ても猶)結婚の紐を切るに足らず、又聖職にある僧侶等は一度獨身を宣言するときは決して有效なる結婚を行ふことを得ず又凡て獨身にて生息するは結婚するに勝ると、此等の諸點は正確に斷定せられずとするも之を拒む者に呪を與へたるも依て見れば少くも之を批難せしや明かり
新教者は甘じて天主教の呪を受け結婚者も獨身者も同等の尊榮ありとし又僧侶にも結婚するの權を與へり、信條中にも亦此等の諸點を公然唱ふるものあるなり、又新教者は一般に教へて云ふ姦淫は單に居を分つ原因として足るのみならず充分離縁するの原因となるに足る故に無罪の

方は再び結婚するも妨あることなきしと

（Faint, mostly illegible text in the right margin area, possibly bleed-through or a second column of text.)

第六章 終末學

第三、千福年 此時期の終に當て...

千福年説に對する新教大部の感情

英國及び歐洲大陸の諸大家諸教派の諸説

新教者の煉

此時期の大教派は大概千福年の教理を棄てたり、「アナバプテス」派の如きは尙之を承認す...

第四期 終末學

獄説に關する立場
中間の世の存在を認識したる度

死の眠りの

顯せしより十年の後にありき、彼等は多きは中間の状態に付て論ずる所
あらず只世界の終りにおる一般の復生を論ずるに當て往々中間の状態を
説き及ぼすの必要ありとのみ、扱て基督に於て死する者は直に神に至り
基督に至り又天の幸福に入るなり悪人は即ち陰府に降るとい彼等の信ずる
所あるが如し、ウモストシスター信條は人の死後直に受くる所の變化を
記して左の如く云へり「義人の靈魂は死するや直に完全なる聖潔を獲て最
高の天に入れらる、其處に彼は輝き渡る榮光の中に神の面を見而して其
身體は全く贖はるを待つ之に反して悪人の靈魂は陰府に投せられ暗黒の
内に呻吟して而して末日審判の大日を待つなり」(Chap. XXXII) 然れど
も學者中には中間の状態あるを充分認識する者あり、例へばリムボルグ
は曰く義人の靈魂は幸福の状態にありと雖も天の完全なる幸福におらず
又は直接に神を見るにもあらず悪人も亦終局の審判を受くるの前には地
獄の火に依て其適當なる苦痛を受くる者と云ふを得ずと
「アナーベズテスト」派の或る者は死と復生との間にある靈魂は眠るとの教理

説を代表する者

持論の
説を代表する者

煉獄説に關してギリシヤ教會並に天主教會の

差

を取る者あり、ソシニアン派中には此説一般に行はるクレルが哥林多後
書五章の始に註解するを見るも復生の日迄死者の無感覺なるを信せしが
如し、其言に曰く死者は時の経過するを知らず故に復生したる時は恰も
昨日死せしが如き感ありと、ソリックチンギアスも亦同説を取るとコクセ
「道徳よりするも聖經より見るも死者は死する間は決して活ける能はず
故に一物をも知ること能はず司る能はず又神に求むる事も能はざるなり、
(II. 1.) ホッペスも亦死者無覺説を取れり

煉獄の教理に關してはギリシヤ教會は天主教に比すれば稍不定なり煉獄
の位置に付ても確固たる持説なく又清めの器械として實の火を説くこと
も欲せざるの全く天主教に異なる所あり、然れども煉獄なる者あは此處
に居る時間の地上の教會員の祈禱及び犠牲等に依て短くせらるべしと云
ふに於てはギリシヤ教會は敢て天主教と異なる所あることなし、天主教
の煉獄説を代表する者はペラーミンを以て尤も有名なり、氏が聖書

が此教理の
證として引
照せたる聖
書の句

改革時代に
も新發達な
し中間の世に
在る躰の説

無限刑罰説
に反する者
少し

上の證據として引用したる者は第三「マカヒース」書十三章馬太傳五章二十
二、二十五、二十六、路加傳十二章五十八、五十九、十六章九、二十三
章四十二、使徒行傳三章二十四（ポルゲト譯）前哥林多書三章十五、十五
章二十九、腓立比書二章十等なり、氏又云ふ煉獄は地下にあるが如し又
其火の性質は明確に教會の定むる處たらずと雖も實の火なりとの思想
は一般普通に行はるゝ所なりと云ふ、
第三、復活及び結局の賞罰
此時期に於て復活の問題に關しては注意を惹くに足るべき説あることな
し、一般に行はれたる説は矢張文字的の意味にて復活の教理を取るにあ
り、カントドナリスは死と復活との間に於て靈魂は或る一種の躰を有すと
説け、^{セルス}ベンリ、モアトは此躰は普通の者には氣躰にして非常に尊き者
には天躰なりと説けり、^{アンニオン}派の惡者の消滅説を教へたりしかども恢復説
無限刑罰の教理は一般普通にして之を却ぐる者甚だ少し、^{アウグスチヌス}
グ信條中に「アノプテラスト」派を攻撃せしを見れば該派中には恢復説を取る

消滅説の代
表者

未來刑罰の
性質に關す
る天主教の説

者あるが如し、又「シリラム、ペターソン」は其千福年説に附著せしむるに此
説を以てせり、^{アンニオン}派の惡者の消滅説を教へたりしかども恢復説
を代表する者あらざりき、^{キソフアス}曰く「神と基督の誠命に従順あら
ざりし者は最後の審判の爲に復生するや直に刑罰に宣定せられ惡魔と其
使の爲に備へられたる火に投入せらるべしとは教會一般の説あり」と（^{No. 10}
in Raavian Catechism.）^{ホッペス}は火の苦みは暫時にして遂には消滅する
の説を取れり、^{ホッペス}氏は之と同時に一の奇説を吐けり即ち烟に投せらるべき
犠牲は常にあるやも知る可らず蓋し復活の後惡の傳播なしと斷言す可ら
ざればなりと云へり、
^{ペラリオン}、及び^{ペタピアス}の記述に依て見るときは天主教の神學者等
は刑罰の火を以て現實の火とせざるが如し又^{ペラリオン}に依れば授洗せ
ざる稚兒の刑罰は單に苦痛なく只神を見る能はざるに在りと云ふにあ
らず多少の飢乏を感ずれば悲哀を感ずるとも亦あるべしとなす、^{ペタピア}
^スの説も亦不運なる無罪の稚兒の寛赦せざると^{ペラリオン}に異ならず新

キリアム、
シャロツク
の無限刑
罪説の辨護

新教の説

新教の説

教神學者の内ふも地獄刑罪の火は現實の火なりと思惟する所の者なきに
 非ずジョン、バンヤンの如き、即ち然りとす、又ターレタン、及びリム
 ポルク等の現實の火ありとするの不可を見ずと強唱せり、ホルラツは次
 の言をなせり「軀體は現實……然れども特殊の……火に依て苦めらるべし」
 と、又之に反してマツコピウスは現實の火の説を駁せり、カルヒンも亦
 曰く「罰せらるべき人の刑罰の嚴酷なる言語に盡し難し是を以て之を有形
 物に譬へて暗黒と云ひ悲哀切齒と云ひ或は消へざる火盡きざる蟲と云へ
 るなり」(Inst., II. 25) 氏は尙一層明白なる言を以て馬太傳廿五章四十
 一節の註解に於て未來刑罰の火は譬喩的の意味にて取るべしと云へり、
 斯教神學者は多くは此問題に關せず左れどもキツチコートの次の言の如き
 説に傾く者なき非ず、曰く「地獄の薪は人間の良心の罪なり」(Serm. III.)
 キリアム、シャロツクは永遠刑罰説を辨護して曰く吾人は暫時の間の罪
 は幾何時間の刑罰に該當するやを問ふ可らず、寧ろ罪人は幾何時間の刑
 罰に該當するやを問ふべきあり、而して之に答ふるは至て易し即ち人は

罪人ある間は罰せらるべし彼は不滅の罪人にして決して死せず其惡人た
 ることも亦止まざれば永遠苦まざるを得ず」(Divine Providence) 善人の實
 に關してはアウガスタンの思想を有する者尙甚だ多し

教理歴史 第五期 自千七百二十年至千八百八十五年

總論

近代湖原批評の事業

第五期は争論及び講和の時期と名くるを得べし、此時期が此の特性を有するに至りしは敢て偶然に非ず蓋し近代は其旭光を放つや已に其手に未だ成らざるの事業を委ねられたり、事業とは何ぞや湖源批評の事業是なれば、初代の基督教は勿論其信仰に道理を附するの準備あらざる可らざりしが該博探源の批評を試むるの位置にあらざりければ直ちに權力に依て教理上のことを決定するの風生じ、遂に自由考究を暗喩たらしめたり、中世時期に於ては精銳なる推論ありしと雖も多くは皆遺傳神學の範圍内に覬覦し、敢て根源的歴史の聖書批評を試むるものあかりき、宗教改革時期は半ば批評の事業より着手したれども忽ちにして教理の固定人心を満足せしめたり、左れば是と同時に改革の主義は各個人の判断と自由思想とを重なるにあれば人心をして狹隘なる範圍内に制限せらるゝを好まざらじめたり、故に根源批評の事業は已に宗教改革の主義に従て必要とさ

其多分らし
き結果

りたれども未だ全く遂げられず、是に於て此事業を嗣でキリスト教理を
其各點毎に驗査せん爲に哲學及び科學は大に起て神學思想に其活ける勢
力を及ぼしたり、而して半ば聖書及び從來の信仰箇條を抗敵し半ば之を
扶助したり、是に於て乎其結果として批評及び辨證、攻撃及び防禦、争
論及び講和の時期到着したり、
而して此時期の結果に關しては苟も熱心にして且つ開化せる基督教徒に
取ては却て幸福なりと云ふを得べし、只其信仰機械的に安する者は是に
依て大損亡を蒙るべし、然れども目を遠大に放ち小丘陵の爲に大山を見
失はざる人々に、却て聖書の大真理は決して攻破し得べきに非ずとの確
信を強ふするに至るなり、

第一章 此時期中教理發達の要素

第一節 哲學

哲學思想の
豊盛

抑も十八世紀及び十九世紀は哲學思想の尤も發達せる時代にして史上未
だ曾て此時期程に哲學の成功せし時代あらざるなり、若し夫れ此時代の
思想を取り其深奥其複雑を以て之を前代の思想に比する時は其差違實に
照々として明かるを見る、斯くの如くされば其の神學に及ぼせる結果も
亦甚だ多く且つ切要ある者あるや知るべきなり、蓋し宇宙の最大深奥の
問題を討究すること爾く甚しきに至ては必らずや教理的思想界に新原素
を投入し或は之を變改する乎或は之を固定する乎或は兩つを併せ之を爲
す乎兎に角大影響を及ぼすべきなり、故に哲學が當時神學上に勢力を占
めたるは疑なき事實なれども其勢力の結果を精細に彙別せんとするに此
復雜混沌たる哲學運動の中に在て、甚だ難きことなれば吾人は先づ初め
に諸哲學を一見し然る後其神學に及ぼせる勢力を彙別せんと欲す、此目
的めれば吾人は諸哲學を評論するに當て唯其精神を了解し其神學上に關

第五期 教理發達の要素

する事のみ陳述し又尤も著名切要なる哲學の系統のみ評論せんと欲する
あり、吾人は先づライブニツ、ラルフヒアン哲學を以て始むべし

ライブニツ

ライブニツのロツク
の感覺教
に反對する
方法

ゴットフリード、井ルヘルム、ライブニツ(千六百四十六年—千七百十六年)
氏は日耳曼哲學の開祖にして日耳曼の推想の一大特有なる唯心論を偏向
せり、故に其の思想は至る處悉く心意は本源の確徴なりとの確信に基
ざるは無し、氏は之を以て起首の點となしたれど勿論ロツクの唯物的感
覺教に類似せる説には反對したり、即ち「心意中には未だ曾て以前に五感
中にあらざりし者あることなし」との確言を排斥し、少くも之を變改して
「但し心意其物は其限りにあらず」と附加したるが如し、其唱ふ處に依れば
心意は決して墨蹟無き白紙の如き者に非ず、積極的の組織を有し又思想
の法則の確定せる者あり、此法則は即ち吾人の認信の確實あること亦吾
人の判断の必然なることを定むるの基礎として是れ決して五感より來る
者にあらず、五感ハ吾人に示すに唯だ物の或る特殊の場合に於ての状況
を以てすと雖ども其普通の場合或は必然の場合に於ける状況を以てせよ

ライブニツの
思想を以て
満足せず

ライブニツの
原子論

るあり、心意の本来の組織は感覺の經驗よりも前に必然の心理を展開し
來る者に非ずと雖ども尙其眞理の眞の泉源たることを明なり、ライブニツ
は本源の眞理乃ち公理の中より殊に「充分の理由」の原理を重じたるが如し、
此意は蓋し左の如し、凡て如何なる現象と雖ども其存在の裏面には語を
更迭て云へば如何なる判断を爲すに當ても其判断の確實ある事の裏には
必らず其斯くあつて他にあらざる充分の理由ありと
ライブニツは又デカルトの哲學を以て満足せず、殊にスピノザが之を開
發して遂に廣じたる結果に至ては氏の大に思ひ處なりき、夫れ猶太の推
想家スピノザの提出せる万物を包含する本體論及び機械的必然論は各個
主義の爲めに處を供すること少く意匠論の爲には一の許す處なかりき、
左れどライブニツは各個主義と意匠論との原理を認識せんと欲し此目的
よりして其哲學の一大特質たる原子論(Doctrine of monads)を唱ふるに至れり、
其説に曰く極微分子は單純なる本體にして部分なく形状なく外延なく又
分のべき性なし、是れ實に宇宙の眞原子にして勢力なく感覺なき物質の

一點にあらす、形而上の一點乃ち勢力、生命、智覺力あり而して諸元子相合して存在物を形成するものなれば宇宙間には生命無き者一としてあるなし、アカリが物質に附したるが如き全消極と云ふべき者一もあることなし、是を以て存在物上種々の階級あり、階級に依て種々の差違ある所以は之を組成する元素の異なるが爲めに非ずして同元素の發達に異なる階級あるが爲なりとす、元子たるや其本質皆同一あり、左れども其發達の上に於て云ふときは或る物は他の物よりも發達せり、即ち靈魂と稱する元子の如きは明瞭なる智覺力を有し併せて記憶力をも有すと雖も漸く下で動物の生命を通り無機物の世界に至れば元子の混沌として夢なき睡眠にゐるが如く幻影に依て自覺を失ひたるが如き狀況あるあり、左れども此等の元子間には敢て大渠の互に遮絶する者なければ最下等より昇て最上等に至る事難きに非ず、只其進行の有様吾人の知覺の外は在り云ふのみ、是れ實に聯續の原理にして現今の進化論の主唱する處を前告したる者の如し、又此の元子の系統と空間との關係は如何と云ふに

ラ氏の預定和合の説

空間の全く相關的ありとの事實に依て知るを得、夫れ空間の共存の順序を示す者として恰も時間は繼續の順序を示すが如し、被造物を離れては時間も空間も只神の觀念中のと存する者とす、元子と元子相互の關係は如何と尋ねるにライプニツの教ふる處に依れば元子は全く獨立單行の者にして只神の内に觀念上の關係を保つのみ、又元子間には相互作用なる各箇獨立に中より展開する者とす、然らば彼等の相接觸するは何を以て解釋し其智覺運動の相通するは何を以て説明するやと問ふに機會説の唱ふるが如く奇跡の絶へず行はると云ふに非らず、最初の奇跡乃ち神——無上の元子——が預定して宇宙の順序とあせしに依てなりと解説す、此預定の和合に依りて身軀即ち元子の總合は其中心たる元子靈魂と相通し又万元子は悉く無限の智慧の意匠を爲さん爲めに能く作動するありとす、夫れ斯くの如き前提を定むるに當ては隨て必至論に陥るを免れず、是を以て凡ての事件は——人間の執意も其内に含む——皆此預定和合に依て定まる者とするに至れり、人間の選擇は

其自由との關係

ハ氏觀念説
と經驗教と
を結付く

萬有に關す
る思想

氏は其唯心論を以て英國哲學の原野に新原素を投入したりと雖も尙經驗に依頼して先天的の推理に依頼す可らずと主張するを見れば未だ英國哲學の經驗的の傾向を脱せし者に非らず、彼はロックの唱へたる心意の直接に感ずる者又適當に有するものは觀念ありとの説を採用し、云て曰く此觀念と相對する物質の存在するありとぞる如きは全く無用にして且つ證據なきことあり、何故無用なりやと云ふに蓋し誰人と雖も物質が心意に及ぼす作働を知る能はざれば觀念に對通する物質ありとするとも何をも説明したるに非ざればなり、又何故に證據なきやと云ふに是れ覺るべからざればなり、凡て物躰に屬する光色熱冷外延形狀等の如きは心意を離れて存する者とは思ふことさへ能はざるなり、又曰く「凡ての天躰地物宇宙間の森羅万象一として心意なくして實存するものにあらず、又彼等の存在は知覺すべきものなれば苟も吾が實に知覺し即ち我が心意中に存する乎或は又他の被造者の心意中に存するに非ずんば彼等は決して存在するものに非ずと云ふべく、或は只或る永遠不滅の靈の心意中のの

ヒューム
懷疑説

み存すると云ふべきものなり彼等は抽象的又完全に知るべからざるものなれば又靈より離れて存在するものと思ふ能はざるなり」(Principle of Human Knowledge, §6) 又曰く「此論は敢て吾人を以て妄念の犠牲となすものに非ずと、此唯心説も敢て實躰を無にするに非ず、只宇宙も宇宙の法則も皆實躰ありとす只實躰は物質に非ずして靈なり、宇宙とは觀念の複合にして觀念とは神が被造者の心意になせる印象なりと、宇宙の法則とは此印象を生ずるに當て神を導きたる定理なりとぞ、彼又記して曰く「宇宙に一大心意あり毎時我に印象を與ふ此印象の形狀順序の複雑なるを以て見るときは其創造者は吾人の知る程に賢明有力善美なるものに外ならず」(Dialogue between Hylos and Phileas, II) 又曰く「己れの特種の説を以て決して懷疑論の助となさず却つて懷疑論は其柱石を物質説に置くものなりと稱せり」(Dialogues, II) (千七百十一年—千七百七十六年)

第五期 教理發達の要素

懷疑説を合
有する四點

只印象を微かに寫し出だしたるものに過ぎずとあし、而して感覺、感情、情慾等も其始めは心意中に顯はるるものなれば之を印象なる語中に含むものとあしたり、又如何なる哲學上の語も明に印象に關するものに非ずば全く基礎なきものとせざるべからずとあせり、

ヒウムの懷疑論は其要を摘記すれば左の如し、(一)彼は外界の存在を疑へり、即ち曰く心意中にあるものは只知覺のみあり、吾人は知覺中の相互の關係を見るを得べきも決して知覺と物體との關係を思ふ能はず、故に知覺の或る形狀存在すればとて之に依て推して物體の存在を斷定するは能はざることにして又吾人の理性の満足せざることなり、(Treatise of Human Nature)、物質の本體ある觀念あるは如何んど云ふにヒウムは之を否んで斯くの如き觀念あるべからず是れ無意味の語なりと云へり、(二)彼は心意の實在を疑へり、即ち曰く「吾人が心意と稱するものは是れ種々の知覺が相集り或る關係に依りて合致するものに過ぎず而して人は之を以て全く單一のものとあすり誤謬あり」本能説は物質に於て不都合なりしが如く

ヒウムの
宗教に關す
る思想は全
く破壊的奇
るや否や

心意に於ても亦不都合なり「靈魂の本體に關する問題は全く知るべからず」と(三)彼は因果説の確實を攻撃せり、結果は全く吾人の知識以外あり吾人は或る事件の起るに當ては其効果を知ると能はず、吾人の知るところは只一は他の後にあり或は相接近してありとの一事のみ吾人が原因結果の關係を定めんとする傾向あるは全く聯關の思想によるものにして教をある事件の他の事件と相連絡して生ずるを見るよりして其間に關係なきを思ふ能はざる様に至るものあり、(四)奇跡の事實を證するの不當なるを主張せり、其理由とする所は宇宙の法則を脱去するの不當なることは人間の證據を虛妄なりとする不當よりも一層大なれば後の不當を以て先きの不當を抹殺する能はずと

以上の諸點より考察するときにはヒウムが宗教に關して取る所の状態は實に破壊的あるが如かりと雖も全く左にあらす、其奇跡を攻撃するに當ては尙キリスト教の奇跡には餘地を供するものゝ如し曰くキリストの教は初より奇跡と伴ふものにして只夫のみならず今日に於ては苟も理性を具

ふる人には少くも一の奇跡なくしては之を信仰する能はざるものなり、單に道理のみにては吾人をして其確實を確信せしむるに足らざるなり、夫れ信仰に依て感激せられて之を信するに至れる人は皆己れの一身に常に奇跡の行はるゝを覺ゆべし、其奇跡とは何ぞや即ち其理解力の原理を轉倒し習慣と經驗とに尤も反對なるものを信仰せんと決意する是れ即ち奇跡なりと、此言を見るとときは其の句調敢て極端なる固執家の言語と異ならざるが如しと云へども是れ眞摯の言に非ず辨解は攻撃と共に害悪あるものあり、ヒュムスの此言も亦暗に攻撃排難の目的を含むが如し、左ねども又他の言を見るときはヒュムスが正直に宗教思想を允諾せるを見る、左の言の如きは是にして宇宙の創造者の良智あるを唱へしものなりとす、曰く「宇宙全躰の組織を見るに實に良智ある創造者を示すが如し、苟も合理的の討究者にして眞率の思考を費やるときい何人も必ず有神宗教の原理を信せざる能はず、……夫れ目的意匠は万物を通貫して明かに顯はる故に此見るべき宇宙組織の起原を考究するに當ては吾人良智ある原因則ち

スコッチ哲
學者ヒュム
スの懷疑説
に反抗す

大體の
論議
の
中心
は
此
の
點
に
在
る

創造者を確信せずして止む能はざるあり」と (The natural History of Religion) ヒュムスの懷疑論に刺激せられ之に抵抗して起れる者はスコッチ學派にして其教訓は始め常識哲學の名を以て稱せらる、トマス・ロード(千七百十年) 千七百九十六年)は此學派の開祖にして直覺的必然的の信仰を重じ因果の理、身位全一の理、外界實存の理の如きは皆直覺的必然的の真理にして論證すること能はずと雖ども又論證を要する者にあらずとし、是等は自ら明にして苟も健全の理解力を備ふる人には必らず允諾せざる可からざる真理ありと稱せり、デウガルト、ステワート(千七百五十三年) 千八百廿八年)も亦大概ロードの主義を受け納るゝ者の如し、サー、キリアム、ハミルトン(千七百八十八年) 千八百五十六年)は此哲學に變改を爲し又附加せし處ありと雖ども尙ほ此學派中に數ふるを適當とす、彼れ此學派の特質を論じて曰く「スコッチ派の哲學は破壊的冥想の系統には悉く反對するを以て其特有とす……殊に懷疑論乃ち智識を以て確實ならずとせる説に反し、唯心論乃ち物質界の存在を否む者に反し、運命論乃ち道德

界を否拒する者に反するなり」と、ハミルトンが運命論に反すると云ひしが如く此學派は一般に人間の自由を重んずるを以て名あり、リード、スコット、ハミルトン共に人間の決断の自由、撰擇の自由を主張せり、ハミルトンは決断力撰擇力の如き能力は全く説明すべからざるものときしたれども其實在に至ては少しも疑はざりき、夫れスコッチ學派が有神的の信仰及び基督教の信仰を防護したることに至ては甚だ明白なる事實にして敢て記するを要せざる事とす

大英國及び佛國に於ける感覺教の代表者

大英國に於て以上の如き哲學の發達を爲し來りしかども之に沿ふて二三の思想家は唯物説に傾向するの運を呈せり、ハートレーの如きは其一にして氏の心理の事實を解釋し去らんとして心腔震動の理及び思想連感の法を呈出したり、左れども氏は尙ほ人間の全く物質のみあるを主張するに至らず、而してヨセフプリストリーに至ては公然其説を主張し人間の靈性を疑ひたり、左れども氏は尙神の靈性を否むに至らざりしがドクトル、ダーキンは人の靈性と神の靈性と兩ながら之を否定せり、フランスに

感覺教の反對者

クレーザンの折衷説

カント

カントの懐疑説より受けたる刺戟

自ら「純粹道理の批判」に任せし事業

於てはコンテラック及びセテハのボンチー等はハートレーの唯物説を取り、又ブリーストリ等の極端唯物説はデテロット、ラ、メットリ、ハロン、デ、ホルハック及びカハニス等の取る處とある、左れども此傾向に反對してスコッチ學派の説を取りリード、ステワートの教を播布せし者あり、ローヤル、コルワード、ジョフロイ等はあり、クレーザンも亦た其折衷主義を以てスコッチ派の哲學を取り以て日耳曼哲學より導き來れる要素と之を和合せしめんと務めたり

イムマヌエル、カント(千七百二十四年—千八百〇四年)

氏は殊にヒウムの因果説を否拒したるに依て激する所となり、人間の心意を究竟より探究せんとの念を生じ以て智識には如何なる條件要素の要すべき者なるやを定め、吾人の現在の状態に於て如何の點に迄智識を擴むるを得べきやを確知せんと企圖せり、氏の探究の結果ハ即ち其著書「純粹道理の批判」に顯はれたり、此書の外には「實踐道理の批判」「斷定の批判」等ありと雖ども「純全道理の批判」を以て尤も重なる者とす、左れども之

等の著書は皆悉く氏の系統を充分示すに足る者にして後に至る迄其勢力
赫々として著しく近世智力世界に於て哲學の思考は大概カントの勢力を
蒙らざる者無き程なりとす

カントが
經驗並に獨
斷教を置き
たる制限

カントが智識の機械即ち心意を精察するよりして其結果遂に經驗教に制
限を置き同時に獨斷教にも反戻したり、則ち智識の元素は悉く經驗より
來ると云ふ説を排し又眞理の系統は單に心意の賦性に依て成るとの論を
退けたり、其經驗教に反する論は如何と云ふに氏は智識なる者は只感能
即ち吾人の五感に生じたる者のみを以て説明し得可らざるの事實を大に
主張したり、其説に曰く感能の整成せざる者は是れ混沌錯雜にして未だ
智識となる可らず而して感能を整成する者に非れば必らず心意中に整成
の方法無かる可からず、則ち先天的の形狀亦かる可らず空間の如きは是
れ斯くの如き心意中の形狀なりと云ふべし、「空間は外部の經驗より來れ
る概念に非ず、……苟も空間の現表心中にあらざれば外部の現象生ずると
得ざる者なり」、時間に於けるも亦斯くの如し「時間も亦經驗より生じ來れ

る實驗的の概念に非ず、蓋し時間の現表先天的に心中にあるに非ずんば
共在も繼續も共に吾人の知覺に入る能はざるなり」(Transcendental Aesthetics)。
然らば則ち時間と空間とは先天的にして直覺の二形狀と云ふべし、此兩
者は共に主觀的理想的にして又現象を經驗する基礎たるあり、左れを是
を以て物の存在の基礎と云ふは全く憑證以外に往く者なり、只經驗の條
件にして是あくんば吾人は一も現象を經驗する能はざる者と云ふを得べ
きのみ、此外尙先天的の概念直覺の形狀あり、之を範疇と名くカント其
數十二を擧ぐ單一、衆多、因果、等の如し、夫れ心意中に表現し來る物
象が直に相聯絡して吾人の經驗となるには必らず以上の如き思想の形狀
に依らざるを得ず夫れ斯くの如くにしてカントは極端の經驗教に反して
先天物の要素を認識するの餘地を供したり
左れをカントは經驗を全く離脱する所の獨斷教にも亦全く背戻したり、
夫れ心意は整成力を有すること明なりと雖も其正確なる結果は遠する
には先づ整成すべき物をも有せざるべからず、是れ則ち外部より來る者

純全理性の
範圍

にして吾人之に依て眞實の智識に進むことは恰かも鳥の羽翼が空氣の抵抗に遇ふて始めて其翺翔を擅にするが如し勿論理性ある者の外部より來る處の物躰を離れて自身の概念を織成するを得べしと雖ども斯くして織成したる織物は實確の印を捺する能はざる者なり

扱て人間の心意中に表現し來る物躰は只一種のみに限る、是れ則ち現象と名くる者あり、若し夫れ其現象の裏面にある實躰の如きは之をありとするも直接に知る可らざる者なり、只直接に知る可らざるのみならず、純全理性の範圍内ふ於ては之を推理することだも能はざる者とす、爰に純全理性の範圍と云ふは思想及び其形狀の範圍を云ふ者にして行爲及び其法則の範圍に對して云ふ者とす、此純全理性の範圍内に於ては心意は單に想像的臆說的の外に超ゆること能はず、例へば靈魂の眞實永遠は現存する如き神の必然完全の存在者として存在するが如き事は決して廢すべからざる者とす、左れども斯くの如く冥想的に理性を用ゆることは今擧げたる靈魂の現存神の存在等の眞理に關しても全く無用に非ず、蓋し

心意中の總念が客觀的に確實なるを證する能はずとするときは其確實あらざるを反證することは尙能らざる者なれば此總念たるや夫れ自身に於て已に確實正當にして瑕瑾なき理想なりと云ふべし、又若し此理想に對する物躰の存在を是に依らずして他の根源より斷定すべしとせば此理想は其物躰を如何に思考すべきを教ゆる者ありと云ふべし、カントは其確信する處に従て此斷言を陳述して曰く「我曾て非常の才識ある人が人間意志の自由未來世の希望或は神の存在等を論證し去るを聞く時に常に其書を讀まんとことを希望するあり、蓋し是に依て我が此等の問題に關する意見を益することあるべしと思惟すればなり、左れど我未だ此等の書を讀まざるに當ても已に確實に知ることあり、則ち彼人が此等の教説の云をも反證せざりしとの事はなり、是れ敢て我が自から此等の教説に關じて動す可らざる證據を有すと思惟するが故に非ず、唯超絶的批評の力に依り吾人の純全理性の全班を知るを得理性は此思想の範圍内に於ては説正的の命題を提出するに不充分あるが如く一層説否的の命題を供するに

實驗理性の
範圍

力なきを確信するが爲なり」(Method of Transcendentalism, Muller's translation) の
以上の如く不可識的の断定を免るゝ爲にはカントの説に依れば吾人は倫
理の範圍即ち實驗理性の領内行爲と其法則との範圍に進入せざるべから
ず、今若し吾人の道徳性を洞見するときは吾人は直ちに一の大なる義務
の法則あるを見る今之に形式を附すれば左の如し「汝の意志の確言常に万
世萬國に普通なる立法の原理と符合するが如く行ふべし」此法則は決し
て經驗より來らず全く先天的のものにして尤普通の人心にも尤も冥想的
の理性にも均く存するものあり、只上に記したるが如き形式を以て悉
顯はれ出づるに非ず、此道徳法に依て吾人は尤も大切なる眞理を固定
るを得(一)吾人の自由を固定す、道徳法は辨明を要せずして明に自由の
あり得べきを證するのみならず此法則を認識するものには必ず自由の實存
するを證明す、(二)吾人の不滅を證明す道徳法は吾人に示すに完全なる標
準を以て之を達するものは最大幸福を得べきものなり、左れを吾人此
世に於ては此標準に達するものなく只限なき進歩の内よ達すべき責任あり

カントの教
と基督教の
關係

るを感ずるのみ故に此責任を感ずるものは又永遠の生命を推定せざるべ
からず、(三)神の存在を確證す、夫れ應報の道徳法の標準に近接するもの如
何に依て定むべし、而して通順を許さざる理性は幸福の多少は應報の如
何に比例すべきを要求するなり、此要求を満足するは只良智及び意志の
依りて統治する無上存在者のみなり、
以上を擧げたる實驗理性の三公準は知識の物體ありと云ふは只實際上必
然なりとの意に外ならず、此等は皆信仰の性質なり、左れを信仰は同時
に道理あり、道理は即ち是れ證據を供ふる信仰あるのみと、
カントの哲學の宗教に關係する處如何を尋ねるに其全跡より云ふときは
有神論に助けを與ふる者とす、即ち推想的理性に於ては有神論の大理を
反證する能はずとす、實驗的理性に於ては有神を必要となすと論ずれば
あり、キリスト教の天啓説に對しては其有神論に對する關係の如くな
らず、聖氏は天啓のあり得べきを認め又再生の必要を確信したりと雖も
聖書を重んずるは重に道徳の點のみ制限せられ、奇跡を輕し歴史上の

元素を放棄し、只實驗理性に符合して之を解釋をべく、只徳を建る方法として取るべしと云へり、又キリストを以て道徳上理想の人物となし、リストを信ずるとは則ち此理想を貴重し之を撰擇するを示すものとしたり、又新に生るゝこと或は潔き品格を作るの事に神の助あるを否まざりしと雖も其恩恵に依頼するよりも各自銘々の勤勞を重じたるなり、氏の思想系統中に神を近く持ち來ることなく、只遠く未來賞罰の方便として思考したり、故に福音書中に照り輝く神の親交同情の光りの如きはカントの哲學に反射すること少なし、只此大哲學者が宗教界になしたる大効は道徳法の概念を圍繞するに華麗雄大を以てしたるとありとす、
 五、カントの哲學より發程しカントの範疇を單一に歸結せしめんと欲し又カントが現象の裏面に存する物の實躰中には主觀と客觀との二元あるの意を含有するが如く見へしが、氏は此二元説を倒さんと欲し、動作を以て起首の點となし又存在の基礎とせり、最初の動作は是れ凡ての發達

フヒクテ

カントの哲學を補充せんとす

外界の印象を受くるの理を説明する方法

の生ずる源にして則ち本我に依て以て自身を提出するの動作なり、第二の動作は如何にと云ふも則ち本我の非我を提出する動作なり、此第三の動作は取りも直さず外界印象を説明するものとす、夫れ印象の生ずるは外部はりの觸撃に非ず畢竟本我が其自身の上小制限を置く動作にして此動作は則ち想像力の媒介に依て來るものとす、而して其外界より來るが如く見ゆるものは是れ本我の自ら制限するの動作意識に來らざるは依る、斯くの如くして非我は其實本我より生ずるにも拘はらず意識中には此兩者互に相制限する處の要素の如く顯はるゝあり、又本我の制限を置くは即ち此の目的を達する方法なり、此目的は發達あり、左れども本我の究局の目的は凡ての制限より離れて獨立するにあり本我は常に此目的は接近す、雖も未だ會て充分之に達したることなし、
 以上の思想を充分に了解せんと欲せば先づフヒクテが所謂本我とは何を云ふやを定めざるべからず、氏は本我とい其目的絶對とならんとするにあらずと雖も充分是を達したることなく、又非我の制限を受けて發達する

初期の哲學と晩年の哲學との異なる點

ものとせるを見れば是れ明に經驗的本我乃ち吾人の所謂有限の人性を云ふものなるべし、然れども氏の所謂起首の點たる本我とは果して何を指して云ふや是れ絶對的本我あるや又經驗的本我は其實同一にして只自ら制限するの形狀を取るに過ぎざるものとなすや、從て又凡神的に流れ凡て有限の人性は只絶對の發達せる形狀に過ぎざらざるや、氏の論は始めより然るが如し、左れども其初年の哲學に於ては此點を論ずるに力を用ゑること晩年の哲學の如くならず、晩年に於ては其理論の基礎は之を變化せざりしと雖ども其形貌は之を更へたるが如し、乃ち初めは本我(經驗的の本我を云ふ)を重んじて世界を其次位に置きたりしが後又至ては各個の本我を絶對の本我の次に位せしめたり、而して絶對の本我を以て實質第一の者となし各個の本我は只其顯はれたる形狀に過ぎずとせり、フヒクテは殊に其晩年の著書に於て宗教を重んずるの精神を顯はせり氏は次の語を以て強く宗教に無頓着なる者を譴責したり、曰く「凡て無宗教なる者の物の皮相を見、漠たる現象中に擒にせらるるより來るものにして

基督教に關して氏の哲學とカントの哲學との差違

カントの基督論

精神の勢力無きを證し又必らず智力も品性も共に弱きを示す者なり、之に反して宗教は現象の上に立ち物の本體を考察する者なれば必らず精神の勢力を尤も幸福に用ゆるを證し又最大深奥の識別力と之に伴はて品性の剛強を證する者あり」(Die Anweisung Zum seligen Leben.) フヒクテは又當時長く獨逸國に行はれたる合理論に斷然反對を試みたり、其説に依れば合理論は万事を常識の平面より下し又狹隘なる智力中より抑する者にして則ち眞理を滅壞する者ありと、氏は亦カントが主張せる道德の無味なるに反對し敬神の興味を主張せり、氏は殊にヨハネの教を重んじ其の福音書を以て尤も純正に眞實にキリスト教理を記載せる者となし、而してヨハネの精神に從て宗教を愛なりと定義せり、則ち神明の愛永遠の愛にして私慾的世俗的の愛に反する者ありと云へり、キリストに關してフヒクテの教ゆゑ處は左の如し、キリストは實に眞理の啓示者として全く例外の地位を占む、故に万世の人の彼を悟り得る者は皆神の生け給ひたる首子たるを認め其榮光の前に跪かすべからずと、又靈魂不滅の教理はカント

第五期 教理發達の要素

氏の基督教に對する状態

基督教の歴史
基督教の神學
基督教の哲學
基督教の倫理

の教訓に於けるが如くフヒクテの教訓中にも主要の教理ありとす。左れどフヒクテの教訓中に基督教神學を反對する者なきに非ず少くも基督教の尤も普通の教理乃ち希臘教も羅馬教も新教も共に信する教理に反對したり、是れ其神論なりとす。フヒクテはキリスト教の意味に於ける有神説を取らず、勿論神の存在を主張し亦之を信するの必要を強く論じたりと雖ども氏は神を定義して單に宇宙の道德的順序ありと云へり、其晩年の書に於て稍其定義を變更したりと雖ども決して神に有心性を歸したることなし其 (Bestimmung des menschen.) 中に云へるあり曰く「有心性と云ふ觀念中には必らず制限を含有せざるべからず余は爾に向て此二つを歸するに當て他の一を却けること能はず余は余が有限の性質を以て能はざることを爲さんと務めず、余は寧ろ爾の性質を其の儘に解せんと欲せざるなり」と又宇宙の創造の教理に付てはフヒクテの全哲學の傾向が已に示せるが如く強く反對説を取れり、又キリストに關する説は稍や普通の教理に接近せる者ありと雖ども其隔絶する處も亦た大なり、蓋し氏がキ

リストに歸するに例外の地位を以てせるは只だ其歴史上の地位例外きりとの意なり、則ちキリストは前代の人未だ曾て了解せざりし眞理を確認し後代の人には假令ひ之を發見するを得るも得ざるも此眞理を明白の事實としてキリストより受るあり此眞理とは則ち人間が其眞實神と一なりとの眞理なり、キリストは殊に明かに此眞理を知覺したり、然しキリストの神と一なりとは其意味吾人信仰者も亦神と一にあり得べき其性質の者なり、又贖罪は神と人との一致に向て道を備ふる者なりとの説は明かにして疑問の外に在りと云へり又或る場所に於ては神より離ることとは只だ是れ妄想に過ぎざれば贖罪の必要も亦なしと云へることあり、即ち曰く「人は決して自ら神より離ること能はず自から離れたりと思ふ内は是れ無にして無なれば又罪を犯す能はざるなり、夫れ罪惡の妄念人心に感觸するは只是れ人をして眞神に至るの途を備へしむるあり」(Die Grundzüge des gegenwärtigen Zeitalters.) 年八百五十九

シェリング

の哲學發達の
の數段

フヒクテを
去るの點

氏が絶對並

カールライプの一身に於て見るを得たり
フレイドリヒ・キルヘルム・フョセフ・シェリング(千七百七十五年—千八百五十四年)

氏は其哲學發達の進路中數々思想の變更ありしかば氏の教訓を適當に可解せんと欲せば氏の生涯中の時を種別せざるべからず氏の哲學思想には少くも三段の時機あるを見る、其内の三段は氏の壯年の時に在り、其第一段の時機に於ては晩年の思想と稍や類する處あり、重よフヒクテの説と一致せり、第二段に於てハ所謂シェリング自身の哲學と云ふべき者を發達したり、則ち氏はフヒクテの主觀的觀念論にて本我を唯一の實體と爲すの説に反し非我も亦同様に實體なるを主張せり、換言すれば万有を以て心意と全等の地位に置けり、其教ゆる處によれば此兩者の區別は其性質にあらすして寧ろ其度にあり心意は万有と全一物なりと雖ども只だ一層高尙の力を有するなり、故に万有は見るべき精心と云ふべく、又精心は見るべからざる万有ありと云ふを得べきなり、畢竟一元論は眞正の

み之を知る
に關する方法
に關する説
五論會の

晩年の思想

新の放し
丑の哲學

學說なり、萬物は只唯一の實體則ち道理の表現にして絶對自ら顯はるに當て取る處の形狀なりとす、故に其起源に溯るときは万物悉く一に歸す、絶對の内には最早万物の差別なし、心意も万有も、理想も實體も、主觀も客觀も皆同一なり、是を以て哲學の職たるや此無差別の同一に溯り、又此同一が實際の宇宙に分れて顯はるに至る行路を追跡するにあり而して此職を完ふする者は非常の天才を要す、夫れ技藝の才なければ技術家となる能はざるが如く哲學的天才を有する者のみ能く絶對を知るを得るありと云へり、而してシェリングは其哲學思想の第三段に於ては有心的神の觀念を以て凡神的絶對の思想に更ゆるの必要を感じ又人間を万有の上に位せしむるの必要をも感じたりと雖ども之と同時に玄奧説に傾むけ、此時に當て氏の思考ハ「ヤエブ、ヒエム」の如き玄奧説の例の如く接神術の妄想を以て混せられ之を以て哲學の性質中に入るべきを唱へたる程ありき、氏の思想發達の階段中其中間に介する時機を代表する系統即ち客觀的凡神論或は同一哲學は(或は如何なる名目なるにもせよ)其勢

氏の哲學は詩の如し

力上より云ふときは最も著しき者とす。マエリングは其哲學を稱揚するに當て富有なる想像力と熱心なる感情とを以てせり。故に氏の系統はただ詩に接近する所あり、直に詩學の小説派と一致するを得、又ゴエテの如き万有の祭司長に取ては氏の系統は饒かある倉庫なりしなり、而して氏の系統は此點に於て宗教的の助けをさすに適當したりと云ふべし、其反覆主張せる所の眞理は凡て世界の詩の思想中に見るを得る眞理にして即ち万有は密接に精心と連結する者となさざる可らずとの眞理之なり、又神の含有説（エムケンス）を主張し而して神と其經綸の間を遠く離隔する説に反對したり、然れどもシエリングの提出せる同一哲學なる者はキリスト教の思想とは全く異なる者となさざる可らず、實に其本源とする説はキリスト教の論據より離れ去る者ありとす、其神の教理の如きは全く凡神的の推想に陥る者なり、マエリングの系統は万物唯一の教理あり此唯一は或時は神又或時は世界として概念せらるゝが故に神を眞實に禮拜するに至るを得ず、遂に詩人的に万有を熱仰するに

正統教會の思想と反對の點

至る是實に異教禮拜の基礎なり(Hagenbach)其神子成肉の説に至てはマエリングの如く普通のキリスト教理に戻る、蓋し氏はキリストに歸するに神と人との一あるを説明するに於て非凡の地位を占むるを以てしたるに雖もキリストは此一致に於て殊に人間に超絶せるを否めり、曰く「神の成肉とは即ち神が永遠より成肉せしを云ふあり而して人間あるキリストの顯はれたるは即ち其歸結せる者にして同時に又其始めなりと云ふべし、蓋しキリストの成肉に由て其弟子等は凡てキリストを以て其首となす處の一棘の肢となつて一致すること出て來るなり(Vorlesungen über die Methode des akademischen Studiums) マエリングは其晩年の教訓に於て稍々此問題に關する説を變じキリストを以て單にキリスト教の教師或は開祖たるのみならず亦之を完全したるものとなし、苟も新約書を一見する者は直ちに彼を以て尋常一般の世人に超絶すること遙かあるを認めずんばならずと云へり、又キリスト成肉以前の歴史に關してはキリストハ父の内にある神の力にして創造の業終るや第一に一の身位を備へたる神とされりと云

氏の俗合理
派に對する
感情

ヘゲル

哲學の適當
ある目的
之に達し之
を解説する
方法

ヘーゲル氏は合理論を却け又彼の所謂「イルミニズム」に反對したるは始めよりフヒクテと同じく、ヘゲル氏は哲學者として、千七百七十年—千八百三十一年（ヘゲルは暫くシェリングと一致したる説を有せしかども後自ら獨立したる系統を發達したり、氏も亦たシェリングと同じく絶對則ち神を以て哲學の最も論定すべき點とせし此問題の概念に於ては阿氏左程に相違する所あるを見ず、彼等は共に存在の根源の智識に溯て而して又存在が發達開闢して機關となり宇宙を組織するに至るの途を追跡するを以て哲學の職となせり、斯くしてカントが絶對を推定すべからずと云へるに反對し全く之を知り得べしと論せり、ヘゲル曰く「哲學は眞理を知るを以て其目的とせず而して神は絶對の眞理なれば哲學の目的は取りも直さず神を知るにあり、蓋し神と其解説とに比すれば如何なる者といへども吾人の考究を煩はすに足る者あるなし」(Philosophie der Religion, Theil III.)又神は人の知るを避け玉ふ者、非ず却て自身を啓示するは其眞性なりとして曰く神

は己の有様を凡て啓示し又賦與す」(Logik, Coh, VIII, translation by Wallace)又神が此を爲すは靈の實在者として必ず爲さざるべからざるが故に之を爲すは論えて曰く「靈にして啓示せざる者は靈に非ず」(Phil. der Relig.)夫れ靈とは虚空無別の單一に非ず反對の元素の合一あり、故に靈の内には行路あり開闢あり又發達あり自らを啓示するあり此等の諸働作は悉く靈の内に含有せらるるが故に神を以て靈とする定義中には必ず神の自現の働作を含む、又神の此自現は人間能力の働作内にもある者にして其働作内にある者は是れ人間に與ふる啓示と云ふべし、故に人間の限りあるを訴ふるは不正なり、蓋し神を知るは所謂制限内にある人間の理性に非ず、[實に人間の内にある神の靈なり之を理學的の語を以て云ふときは神の自覺にして即ち神が人の知るに依り自らを知る者なり] (Vorlesungen über Die Beweise Yant Daseyn Gottes.)ヘゲルがシェリングに反對せし處は左の二點とす、(第一)シェリングが餘り輕卒に起首の點を假定したること、(第二)シェリングは其起首の點より漸々展開し來る階段を説明するに於て誤れること

なり、ヘゲルの説にするも起首の點は矢張純粹絶對の者ありと雖ども之を確定するに當ては先づ第一に此事を證せざるべからず、即ち心意は其特種現象を離れて再び退歩する時に於ては其終局の目的ある普通混沌の思想に歸らずんば止まず、語を更へて云へば絶對の有様に歸る迄は止まる者に非ずとの事を示さざるべからず、此の探究を終へて後初めて哲學は其系統をさすを得、即ち換言すれば万物の全組織は心意界にもせよ或は自然界にもせよ皆之れ始めは混沌たる有様に實存せる絶對より開明し來れる者なるを示すを得べし、此職を悉さん爲ふは哲學者は必ずしも神秘なる直覺の理に依るを要せず只忍耐して推理すべし、若し是れ思想は其完全正當の行路を取て進まば之れ則ち宇宙の依て以て組織せられたる行路を反射する者なり、實に宇宙は展開せる思想に過ぎず物と思想とは元來同一あり、「万物は其本質に思想中にある者と同一也」(Logic)、思想者も亦畢竟思想を主觀的に見たる者に非ず、是故に眞理を充分に悟了せんと欲する者の最も要するものと思想の純粹を保ち私心私情の元素を

混せざるにあり、「吾人は思考する時に當て吾人の私の存在を去り、深く物の中に沈み思想をして充分物の行路のたどらしむべし、若し吾人己の存在を其内に挿むことあらば是れ思想を誤されるものなり」(Logic)ヘゲルの云ふ處に依れば吾人物の眞相を思考するに當ては須く吾人の思想中に元素の複數なるを了解せざるべからず、一元素のみを取て之を他より隔絶するは之れ抽象として眞實な非ず具體は只眞實あり而して具體は反對の合一あれば万有を反射する思想は必ず三合の繼續ならざるべからず即ち兩個の相反對せる概念を連絡し之を第三の概念に於て合體して一となすの行路を取て來るものありとす

それ絶對の思想に於ては理想と實體は同一あれば吾人は眞理の全系統を知らんと欲せば思想進化の順序を追跡すれば以て足れりとも、斯の如く絶對を呼で觀念となし之を解説するを以て三學科の職となす、この三學科は即ち相合して哲學を造る者なり、三學科とは思想の三大段階に相對する者として(第一)論法學、即ち觀念を其儘に考究する科學あり、(第二)

思想進化の
其起點並に
其階段

は万有の哲學、即ち觀念を其反考に於て考究する科學なり、(第三)は心意の哲學即ち觀念が万有中より自ら彷徨するを止め再び自身に歸る有様を考究する科學なり、

ヘゲルは論法學の内に起首の點を置けり、氏曰く「單純の實在は之れ初を爲す者なり」と、即ち未だ如何なる性質をも備へず又如何なる總念の爲にも干されざる實在は非ずんば起始たるを得ずとの意あり、單純の實在は依て以て區別すべき性質を有せざれば無實在と區別すること能はず、故に其間に差異を見ること能はざる以上は之と同一なりと云ふべきあり、然り而して之を他方より見るときは此兩者相異なるとも云ふを得べければ適當なる結論は第二の總念即ち轉化(being)にあり、此に至て始めて具躰の思想とある之と同様なる方法に依り思想の進化は兩反對と其總念とに依りて開展し來り漸次に明確なる結果に達す、而して思想世界は此に於て熟す、然り而して第二段に至ては思想外に表はれ万有となる、万有は又其三合乃ち性質、形狀、及び結構を通過し遂に人間の肉躰に至

ヘゲルの哲
學の基督
神學に對
する形式
的の對
峙

つて其歸結に達す、此點より後は觀念返還の運動にして是に依て環圓の全躰をなし思想は再び絶對に歸て其根源を認識するあり、

ヘゲルの哲學がキリスト教神學に關係する如何を眞實に知ること太だ難し、氏の陽に取る處の容貌は疑もなくキリスト教の友にして其公言する處は實にキリスト教の重なる教理を哲學的に發表し教會が用以來れる俗言或は多少摸表的の言語に更ふるに精確實着する語を以てするあり、又合理論に最も反對せる語を防護したり、又其神に就て云ふ處は通常の有神說と合する處もあり、又之に背く處もあり、雖ども神の有心性を拒みたることなし、氏曰く「キリスト教の神は單に知らるゝ神に非ず、又自ら知る神なり、神は單に吾人の心意中に書き出せる有心者ならず、寧ろ絶對的に現實の有心者あり」と、又スピノザの教説は即ち宇宙には唯一の本躰あるのみは神ありと云へるに對してヘゲルの云ふ處は左の如し、「本躰は絶對の觀念と同じからず假ひ觀念の進化に階段あるにもせよ本質は制限ある必然性の形狀を取れる觀念に過ぎず、勿論神も亦必然性あり或

第五期 教理發達の要素

は進んで神は絶対の物即ち事實ありと云ふを得べしと雖も尙彼の絶対の有心者なり、然り而して神は絶対の有心者なりとはスピノザ哲學に在ては未だ會て思はざりし事よして此點に於てハキリスト教に謂ふ所の神の概念を得る能はざりしと云ふべし」(Logik. Cap. VIII.)、故ハスピノザは其の説を全ふせんと欲せば其の本體の唯一ある東洋風の思想に加ふるに西洋風の各個的原理を以てせざるべからずとあせり一方に於てはヘーゲルの論ずる處は此の如しと雖も翻て其他方面を見るときはヘーゲルは有神論の説よりは寧ろ凡神論の説を主張し、神と被造物との間にある連鎖を悉く撤去せんとする傾向あり、氏曰く「各個の存在者ハ皆之れ觀念が或る一つの形状を取れる者あり、觀念とは則ち普通理性と云ひ又神と云ふ者なり」(Logik. Cap. IX.)又曰く「真理(成肉に依て明にせられたる真理は左の如し、「宇宙には唯一の理性、唯一の靈あり有限の靈は眞正の存在を保つものに非ず」(Phil. der Relig.))、斯くの如き語より推考し又氏が進化説の全體を察するときは凡ての有限物を以て絶対の行路中に顯はるゝ形状と

三位一躰の
教理に關し

かし此行路に依て絶対は完全なる自現に至ると爲すものゝ如し、三位一躰の教理に關してはヘーゲル曰く此教理は實に眞正の哲學の基礎なりと、氏は此の教理に反する者と呼んで只是れ(Die sinnlichen un Die Verstandes-Mensch.)なりと云へり氏の説に依れば靈なる神と云ふ概念中には必ず三位の區別を含有す、何となれば神は靈なりとは只其行路の全躰あるが故にのみ依る者にして而して行路の全躰には必ず三段の階級あるべきものなればなり、氏即ち曰く「靈とは神の歴史なり即ち神が自身を區分して之を客觀にし再び之を自身に返する行路なり……全躰を云ふときは神は靈なり唯父のみ神と云ふは未だ眞正非ず、父とは寧ろ初にして又終なり……神は限りなき行路あり乃ち活ける行路(Lebensverlauf)あり、三位とは即ち絶躰の自身に對して自身を區別し而して尙その處に同一を有するものなり」(Phil. der Relig.)以上の説を他の言語を以て云ふときは思想あるものハ自身を客觀にし、父は子に於て自身に對して客觀とあれり、而して聖靈即ち愛、即ち自身を他物の中に知る意識に於て神の主觀と客觀は

合夥して一つとなれりと云ふべし。キリストの身位には神性と人性とが合夥し居るとの説を概念するに於ては勿論ヘゲルの困難を感せざる所あり、却て有限と無限は相反し相拒むものに非ずとはヘゲルの取る所の主義なれば氏は喜んで之を受け納れ無限の内には有限を含蓄する故に之を拒む者は之れ無限を制限して有限となすものありと云へり、又「真正の無限は單に有限に超絶するのみならず常に其内には有限を吸収し居る者なり」とも云へり、而してヘゲルの此説は有限を一般に論じたるものなれば之に依て歴史上のキリストに特種の尊貴を歸することなかるべしと雖も氏は實際にキリストに尊貴を歸したること明かあり、乃ち曰くキリストに於て始めて有限が全く變形したるを見る、如何なる人も苟も眞正宗教の下に立つ者はキリストを以て單に人類の一教師、眞理の殉教者のととなす克はず、彼は自ら其神と一つなるを知り此意識の故を以て人の摸すべからざる威嚴を以て教へたり、彼は是に依て他人が務て得んとしたる者を確取したり、之れ彼の行に依

て知るべし、靈の人は之にて已に足れり彼は奇跡を要せざりしならん、假ひ自身に於て已に奇跡ある靈は自然力を支配するの力を有すること少しも怪しむに足らずと雖も現時に於て奇跡を信せざる者あるは自然力を過重して靈とは全く離れ居るとの迷信より來るものとす、又キリストの死に於て神は人間の有限性より來る最後の運命を取るが如く見ゆ、故にキリストの死は無限の愛の現れあり、又其死は神が自身を授與する限りなき行路の像にして其復活は神が再び自身に皈戻する行路の像なりと

ヘゲルは又聖書を深く尊敬するの語を發し新教國が聖書に明かなるが故に遙よ羅馬教の諸國の上に立つを論せり、氏曰く「新教諸國に於ては聖書を以て精神上的の奴隸制度を防ぐ護衛となす」と(Phil. der. Belg.)、然れどヘゲルは又他の所に於てはカントと同じく聖書の歴史的の元素を重せず只徳を樹つる様に之を解釋すべし、換言すれば哲學上の眞理を暗示するか或は摸表するものとして聖書を見るべしとなして曰く「真正」のキリスト教の信仰

眞實の關係

は哲學に依ての之を辨解するを得べきものにして歴史に依るものにあらず。さて全躰より云ふときはヘゲル哲學のキリスト教神學に關係する所は稍々朋友の親あるが如しと雖ども畢竟曖昧は過ぎず、其主義を見ても其結果を見ても餘程疑はしき朋友ありしを如し、去れど或人が想像したる如く若しヘゲルに貸すに餘年を以てし其説を完成せしめば其哲學の諸點をキリスト教の眞理と密着せしめしや知るべからず、只惜むらくは爰に至らずして止まりしかば自然と其の系統の發達にも種々反對の状態ありき、或人は之をキリスト教神學の重なる教理と符合せしめ又或人は之に反して神學を撲滅し去るの器械となしたり、即ち彼のヘゲル派の左翼と呼ばれたる人々あしてストラウス、ブルノー、バアー、フヒウパーツの如きは此の極端の結果に陥るものなり

そも／＼カントより始まりヘゲルに至て歸結したる彼の觀念主義の系統に沿ふて是に一の異なる哲學の發達其勢を逞ふせり、此哲學に於ては智力の元素割合に少し此哲學は即ちフリドリヒ、ハインリヒ、ヤコビ(千七百四

信仰哲學

キリスト教神學の眞理と密着せしめしや知るべからず、只惜むらくは爰に至らずして止まりしかば自然と其の系統の發達にも種々反對の状態ありき、或人は之をキリスト教神學の重なる教理と符合せしめ又或人は之に反して神學を撲滅し去るの器械となしたり、即ち彼のヘゲル派の左翼と呼ばれたる人々あしてストラウス、ブルノー、バアー、フヒウパーツの如きは此の極端の結果に陥るものなり

十三年(千八百十九年)の教訓にしてライエルマヘルも亦之に屬す、ヤコビの系統は數々信仰哲學と稱せらる、夫れスピノザの説の如き獨斷教に於て反對する敵は眞理を確取する論證の信すべきを有する者かかりしかばヤコビは信仰即ち直覺的に信するものを以て確實のものともせり、故に外界の實在の如きは吾人の感覺より別つべからざるものにして吾人の自發的に確信するものなれば是れ即ち外界の存在を尤も明かに吾人に證するものなりとす、神の存在を確信するに於ても是と異なることなし、万有は吾人の經驗み入て其存在を證するが如く神も亦然りとす、吾人は神に關する經驗を有す經驗とは即ち吾人が依て以て神の本躰を知り又其性徳を知る所以のものなり、ヤコビは凡神的概念を嫌忌すること甚しく神は良智あり、意志あり、又有心的にして人間の上にあり、又人間の中にあるを信せり、此點に於てはキリスト教神學と接近する處多し只キリスト教の歴史的な啓の系統ありとの點に於ては氏の拒む處たるが如し、フリドリヒ、アンスト、ダニエル、シライエルマヘル(千七百六十八年)——千八

ヤヘルがヤ
コビを補充
せし點

百三十四年)

氏は其哲學全躰より云ふときはカントの教訓を變改して其觀念的の元素と實躰的の元素を充分辨解せんと務めたり。氏の説に依れば空間時間及び原由力は單一宇宙の現象が知覺者の意識中に存する形状のみならず眞實外界に存して智識の條件とあるものなりとす。(Ueberweg) 氏が神及び神と世界との關係に付て有する説は稍々凡神教に傾けり。又其倫理に於ては個人主義を認識し而してカントが苟も道德的の存在者が保守せざる可らずと定めたる道德法を變改或は補訂したり。其宗教哲學は稍々ヤコビと類し時に之を増補したり。又ヤコビの如く宗教的意識を重んじ靈魂の深遠なる感情を貴びたり。又神に依頼するの感情を以て凡ての宗教の基礎となし、同時に又ヤコビが尊ぶに至らざりし所の歴史的の元素を重んじ宗教的の生活は教會に相會し相親とキリストを以て其親交の中心となし帶となし初めて達し得べきものなりと云へり。されどもシライエルは哲學者よりは寧ろ神學者として有名なれば其説の諸點は尙後に評論

シヨペン
ウエル及び
ハートマン
は哲學的厭
世教の代表
者あり

することあるべし

アーサー、シヨウペンハウエル(千七百八十八年—千八百六十年)、及びエ
デユアード、ボン、ハートマン(千八百四十二年)兩人の系統に關しては只一覽
を勞して去るべし。されども是れ彼等の精神とキリスト教思想と相接近
するの故を以て是非ず、彼等の系統は兩つながら無神的一元論及び厭世
的主義なり。シヨウペンハウエルの説に依れば唯一の本質本源の實躰は
意志なり、智力は只意志が己れの目的を達せん爲に創造せるものなり、
通例意志は意識なき勢力なりと雖も人間に於ては意識に達せり、意識を
備ふる意志の本源は常に不満不幸の状態なり、實際の世界は最大の悪な
り、人間慾望の適當なる目的は無に歸するに在り、只此のみ能く絶へざ
るの苦を免る途なりとす。ハートマンは其無意識の哲學に於てシヨウペ
ンハウエルの説を離れて智力を以て意志と同列に置き凡ての存在の根源
なる無意識に於ては兩者共に分つべからざる連絡を有す、左れば人間に
於ては此兩者分離し意志に反對すること起り而して意識生ず、而して意

第五期 教理發達の要素

識と意志との間に争あるは是れ實に人間の不幸の源なり、此不幸を脱する途は意識あるものは皆充分に教育を受けて悉く一致して全消滅を可とするに至らざれば得る能はずと爲す

ハーバート

ロツツエ

千八百八十二年(三氏の哲學なりとす、ハーバートはカントを仰て其哲學上の主公となし又ライプニツに類する説を取りフヒクテ、シェリングに反對して實験説を主張せり、(實験説とは煩瑣學派の時代に行はれたる者を云ふに非ず近代行はれたる意味にて云ふなり) 氏の云ふ處に依れば適當なる哲學の材料ハ經驗より來る、左れと經驗より來る者は矛盾すること有れば未だ以て理性を満足せしむる能はず、故に哲學の本職は此等の矛盾を符合せしめ是に依て懷疑説を更なるに確固たる堅信を以てするに在りとす、定教に關して云ふ處は左の如し宗教は重に信仰或ハ實驗理性に基く者なりと、又宇宙は意匠の現るゝは神の良智を証すと斷言す

ハーバート
が先哲に對
する關係

ロツツエが獨
斷的觀念論
並に物質論
關する批評

と雖もカントと全く適當な神明を知るは人間の能力以上にありと云へり」
ロツツエはハーバートに類似する説を取りハーバートよりも一層ライプニツの説に接近せり、氏はフヒクテ、シェリング及びヘゲル等の呈出せる觀念的獨斷的哲學の頂點を達したる時代同時に又物質説の傾向も著しく顯れたる時代に出でたれば氏の系統は以上の兩説に反したるものありとす、獨斷的觀念説に反してロツツエは實驗の方法を重んじ經驗の事實を忍耐して探究すべしと云ひ、フヒクテが呈出して多くの哲學者が従ひ來れる確信即ち哲學は先づ第一に單一の元理を定め夫より万物を推定せざるべからずと云へるを駁して大なる誤謬を生ずべしと云へり、又人若し宇宙の中心に至り其點より万物を完全に洞觀するを得ばフヒクテ等の確言も或は可なりと雖も如何なる人も之を爲す能はず、是を以てヘゲル派の内に互に其根源より異なる説を有する者あるを見ればヘゲル派の方法全く實施すべからざるを證するなり、故にヘゲル派の基礎とする所の思想なる實在同一説は維持すべからず、哲學は今少しく臆測を減じ眞摯ある

第五期 教理覆達の要素

推論を爲さば一層信據すべき結果を得べしと云ふあり
 以上の如くロッセは獨斷觀念説に反すると全時に物質説にも亦強く反對
 を試み一層熱心且つ巧にブチナー、モレスコット等の學説を駁撃した
 り、實に氏は觀念的哲學に反對したり然ども其之に反對したるは觀念説
 を駁したるよりは寧ろ其獨斷説を忌み又其偏頗なるを攻撃したる者と云
 ふべし、左れども物質説は單に是に止らず事實と適合せずと論じ又吾人
 意識の一致に反す若し意識の合一なくんば吾人の内部の狀況は全く吾人
 の觀察を容れざるべし、而して意識の合一は實に靈魂ある物質にあらざ
 る感覺以上の本跡あるを告ぐる者とす實に靈魂なるものは眞實の存在に
 して物質の性質は皆な此實在が互に有する關係に依て説明するを得べし
 と云へり

氏は哲學に
 有心的の
 面重きを占
 む

ロッセに依れば萬物は皆神に於て並に相連絡するものあり、神は即ち宇
 宙に必らず存せざるべからざる者なり、神の性質は實に有心性を含有す、
 神の無限は敢て其有心性を否拒することなく却て之を有して完全なるを

示すに足る、自覺力は神に於て完全あり、神は充分自身に顯はれて明か
 なり、人には往々自身に明かならざる所あるが如くあるも神には敢て自
 身を意識せん爲めに自身に對して非我を置くの必用あることなし、神の
 完全は自身を意識し得て餘りあり、斯くの如く有心的自覺的の神より初
 むるに於ては敢て一の困難あることなし、ロッセ又曰く「若し吾人有心的
 神の思想感情意志の源なる其内部の生命を呼で永遠にして始めきく會て
 沈靜したることなく又靜肅の者は會て起動したることなしと云ふども物
 質論者或は凡神論者が想像に依頼する程は依頼せざるありと(Mikrokosmus,
 Book IX. Cap. 4.)

ロッセの哲學を祖述し物質説に反し有心的神の説を主張し明晰精確なる
 語を以て論せし哲學は近代に至て教授ホルデン、ピー、ハウンの書ありと
 英國に於ても佛國に於ても彼感覺の哲學の線々降々今日に至る迄存
 せり、佛國に於てはアウガスト、コムトその代表者なり、氏の根本の論は
 左の如し、人間の思想あるものは如何ある所にも必らず三段の階級を經

コムトの實
 験論の基本
 の思想

氏の智識の
百科を含有
すとなせる
六科目

て來らざるべからず、一は神學時代即ち宇宙と宇宙との事件を超自然の
存在者に訴へて解釋する時、二は形而上學時代、即ち形而上の實體或は
抽象に依頼する時、三は實驗學時代にして物の結局の根源を求むるの無
益なるを覺り、只その繼續及び類似の關係を發見し之に依て各個のもの
を集め之を概括せんとするの時あり、斯の如くして先天的の元素を取り
去りたる實驗學は之れ實に哲學の完成と云ふべきあり、實驗學には六種
の科あり數學、天文學、物理學、化學、生物學、及び社會學なり、社會
學は人と社會に關して論ずるものなれども心理學を含蓄せず、蓋し心理
學は虛妄の學にして心意は己れの作用を觀察するの力を有すとの妄説に
基くものなれば之を除かざるべからず

氏の新宗教

コムの宗教は實に一種奇態のものあり、氏は神を廢し之に更ふるに集
合的の人類乃ち過去、現在、未來の人類を以てし之を禮拜すべしと云ひ、
動物と雖ども忠義ある犬の如きものは此の集合體の中に入るべしと云ひ、
亦この無上者を書き出すに當ては常に一人の小兒を抱ける三十才の婦人

近代英國
感覺の代表
者

彼等の一致
する點

の像を以てせり又私に禮拜すべきは死せる婦人か或は活る婦人と云ふ觀
念に向ふてすべきなりと云へり、又歴史上の宗教にては凡物教フツキキョウと最も貴
び地球を呼んで (Le Grand Feiche) と云へり、氏の企圖にては道德及び宗教
の監督、教育の全跡等は皆これ實驗學の僧侶に任すべきなり、彼等の上は
は又無上權を有する法王あり、パリヌに住居するあり、ジエ、エス、ミル氏
はコムの此の企圖を評して曰く「精神上、世俗上の壓制主義にして最も
完全なる組織を取りエクチャナス、ロヨラの組織を除くの外は人間の腦髓
より生じたるものゝ最も壓制の組織なり」(Autobiography) 教授ハックス
レト氏はコムの宗教を呼んで「キリスト教を取去りたるローマ教」と云ひ
しは最も適當なる評あり

英國近代の哲學に於て感覺教の代表者として有名なるはシェームス、ミル、
フョーン、ステュアルト、ミル、アレキサンダー、ペーン及びハーバート、スペン
サーなりとす、此等の著述家は其説各々異ありと雖も感覺教の特質とす
る左の諸點に於ては皆一定の説を有せり、(一)感覺は知識の材料を悉皆供

給するものあり、(二)吾人の所謂必然的直覺的の信仰なるものは觀念聯合の理に依て解説するを得べし、此等の著述家は殊に此點を主張すること太だしければ觀念聯合派の名稱あるに至る、(三)心意中には直接に本我を意識するの力なし、唯その特殊の感情或は動作を意識するのみ吾人は心意とは單に靈氣的、状態の連続なりと云ふより進んで云ふの權を有せざるものあり、(四)意志の働きは他の事件と同しく矢張原因結果の範圍内に於て來るものにして必至論は乃ち眞正の學說なり、以上列擧したる中の第三點よつきてジョン、スチュアート、ミル氏は其内に著しき逆説を含有するを許せる事を看過すべからずと云へり其の言に曰くもし吾人心意を以て感應の連鎖なりと云はば此の記述を全ふするために自身の過去未來に於て自覺する所の感應の連鎖ありと加へ記せざるべからず而して之れに依て吾人は左の兩說の間に撰擇せざるべからず乃ち心意或は本我は感應の連鎖より全く異なるものあるを信すべき乎將た亦た實跡なく單に感應の連鎖なるものは連鎖として自身を覺知する者なりとの逆説を取るべき

スペンサー
の進化説

乎との兩説いづれか撰まざるべからず」(Examination of Sir William Hamilton) ハーバート、スペンサーは其の感覺哲學を進化説と連結したるを以て殊に有名なりとす、氏は或る第一實在即ち現象の裏にある勢力の存在を認め、て之を必然の公準となし物質界心意界凡て宇宙間の万象は悉く之より進化し乃ち純一より厖雜に進歩したるものなり、吾人の有する必然的の信仰なるものも亦進化より生ず此等の信仰は單に吾人の自ら造れる觀念適合に依て生ずるのみならず吾人祖先より類積し遺傳し來れるもの亦多しとす、故に吾人が自由に信仰する者も必然的に信仰する者も皆これ神靈が漸次成形し絶えず遷傳して變化したる結果なりとす、スペンサー氏記して曰く、それ今日各自の有する空間の直覺は前世の人々が其經驗を組織聚斂し斯くして漸次に發達せる神經構造を遺傳したるものあり、之と同じく今日吾人の道徳上の直覺力なる者も本と先代の人々が功利の經驗を組織聚斂し而して神經の變化を生じたるより起れるものなり」(Letter to Mills, quoted in the Data of Ethics) 此の言に於て氏は神經を以て信仰の前項原

因となることが如く氏の哲學全體に於ては實に物質を以て心意の前項原因となす如し、これ眞に明白なる物質説なり、氏又云ふ物質説と精神説との間に起る争論は單に言語上の争論あり、蓋し吾人の現象の裏面に於る本體を以ては一も知る所なければありと、然れども若し之れを問ふに物質又は心意孰れを以て最初とあすやを以てせばスペンサー氏教訓の全體より云ふときは氏は心意を以て第二となし且つ物質に依屬するとあすが如し、氏云ふ吾人の心に感應の生ずるは運動、光熱等の如く存する處の物質力に依る此の力は吾人の發明する克はざる方法を以て遂に變じて意識力ともなる者とす、偕て又吾人は神の智慧を以て物質の性質法則前項となし或は原因とあすの理由必ずしもあければ物質力の實に第一の原因と爲して置かざるべからず、心意の物質と同位に非ず第二位を占むるものにして其の結果と云ふべきなりと、あふ之れ最も明瞭なる物質説に非ずや

感覺哲學の近代の容貌はそれ此くの如し宗教は此の中に立て困難の地位

ミルの宗教
に關する立
場

を占めたり、實に宗教は明確に知られたる眞理の上に立つに非ず不可識者に対する臆測及び希望の上に立つが如くなればあり、フヨン、ステュア
ルト、ミルが宗教に關して取る所の位置は多くは否拒的あれども其晩年の
著書を見れば宗教なる問題を考究し稍々説正の見を採れり其の「有神説
を論ず」ある書に於ては左の如く云へり「吾人現今の智慧を以て見るときは
万有中の適應符合の事實は宇宙を以て有智者の創造せるものなりとする
説を固ふるものなり」と、氏はまたキリストが歴史上實際存在せるを論
ず、この説はもし弟子等それ模範を見るに非ずんば決して新約書にある
が如き人物を書き出す克はずと云ふにあり、又云ふ宗教はキリストを以
て「人類の理想的代表者また嚮導者」となせるは誤まれる撰擇に非ずと、靈
魂不滅に關しては曰く「科學は不滅説に反する證據を有せず希望の事とし
て見るときは不滅説は正當にして又哲學上より辨護し得べきものあり」と、
又曰く「斯くの如き希望より生ずる善果は決して小事に非ず吾人の生活及
び性質を一層高尚にし吾人の凡ての感情を強健にせるものあり」と、然れ

ども氏は一方に於て左の如く云へる所あり、良智の思想を有するものは万有の創造者は同時に全能にして且つ善なりとの説を承認する能はず、故に二元説の如きは最も宗教心に適するものなりと、氏は超自然を一般に馴け之を以て臆測の事か或は希望の事となし斯の如き希望は單に人類の宗教を補欠として許すべきのみなりとせり、(氏がこゝに人類の宗教と云へるは人類の禮拜に非ず各自互に同情を以て自身を人類の幸福の爲に捧ぐるを云ふなり)

ハーバート、スペンサー氏に依れば宗教の目的は不可識の神乃ち現象界の裏面に在て全く探知するを得ざる力にありとす、又宗教界は無識の大野おして識界を境する者なりとす、宗教と科學の調和は此の宗教の範圍を認むるにあり、氏曰く「もし宗教と科學と和合するならば其基礎は必ず事實中の最も深遠廣大にして又最も正確なる事實即ち宇宙の吾人に示す方は全く探知せべからずとの事實にあるべし」と、過去に歴史に於ては宗教心は此の無識の地方を空虚に棄て置くことをせずして其心より種々の

スペンサー
の宗教に對
する地位

宗教の地位

想像を造出して之を掩ひたり、然れども確實なる概念を生ずる克はされば只其の想像を満足し又進歩に最も適したる説を附せり、此の如くして歴史上の宗教は其大切なる目的を力めたり、實にこの不可識者に確定せる性質を附歸せんと欲する念は曾て衰ふるとあるべしと思はれず、「終局の存在者に付て吾人の有する不定の感に形狀を附せんと求むるの念は限りなく存すべし、之れ實に吾人智力の基礎あり、吾人は常に之を思考するに當て必らず何か或る實在の形狀を附せざるべからず語を更へて云へば假ひ確實あらざるも兎も角吾人の思想に或る形を以て現はれざるべからず而して此の如くして形を造れる形狀は單に一の模表にして其事物には少しも類似する處なしとせば誤ることなるべし」(First Principles of a new system of Philosophy)

以上の如き論は宗教的感情に少なからざる試惑を與へたるや明なり、タンクラズの如きは最も然りしからん、心意は不可識より其の略圖を畫かざるを得ず、然れども直ちに之を塗抹するか或は其圖畫を以て實物を

基督教神學
に關して近
世哲學一般
の結果

代表するよ非すとせざる可らざる義務ありと云ふ、此の如くして宗教的
感情は幾何の時を忍ぶべきや之れ吾人の思考せざるべからざる疑問あり
とす

是迄已に哲學發達の大要を列舉し來りたれば今や則ち其全體が神學に及
ぼせる結果如何を究むべき時に至れり、されば哲學はキリスト教の有神論
に大なる材料を供したり唯うれ哲學發達の一部のきを察し其全體の勢ひ
無神哲學に進み又進むの運命を有そと想像する者は未だ其の全體を洞察
するの明なきものなり近世思想の傾向は決して無神論の溝渠を過ぎるこ
となく又過ぎんとする勢なきなり勿論實際上の宗教的生命在つて絶へず
無神論に陥るを防ぎしことは之を云はず單に哲學上より云ふも決して其
傾向なきなり、或る哲學者は有心的神の說に反對するあれば一方の哲學
者(彼等は實に其思想の強固壯大なる古へのプラトーン、アリストートルの有
神論的系統と殆んど肩を比するに足る)は之に反して有心的神あるに非ずん
ば宇宙の事實を正當に解釋すること克はざるを主張す、若し現今の系統

神學者並に

中に全く不可思議を唱ふるものありとすれば一方には之に反して哲學は
眞正に絶對を解釋するものなりと云ふ系統もあるあり、或は中間の位置
に立て神の概念は合理的の信仰ありと云ふ者あり、此點に於て哲學の生
きたる結果は即ち有心的神の存在を確定し吾人が之に就ての智識は全く
盡せる者に非ずと雖も信據するに足るものありとの斷言ありしと云ふ
べし、之れ實に正當神學と全く符合する者に非ずや又三位一體說及びキ
リスト論に關しての現時の哲學有神論に關するが如く明瞭には朋友の有
様に非ず然れども尙最も信據するに足る哲學は是等の教理を以てもし精
密に事實を表はすものに非ずとせば模表的に之を表はすものとするあり、
或は又道理の上にあることと道理に反することとの間に區別を設け天啓
は則ち道理の上に立つと云ふものあり、又キリストを以て道德上理想の
人物とせざるは奇も道德の調子を有する哲學の皆異口同音に唱ふる處な
りとす

又哲學中の有名なる者が其當時の神學と相親和せること明かり、

神學派は夫々哲學と特殊の關係を有す

の系統は十八世紀の中頃よりして日耳曼の宗教家以上著しき勢力を有したり、ボーム ガーアン 氏の如きは神學上の ラルフ 派と呼ばれたる者なり カルポフ、レーンベック レウシ、シュニーバート 等も亦その代表者なりとす、カント の哲學は直ちに其競争者起りたるため其勢力を専有する能はざりしと雖も合理論者にも超自然信仰者にも同じく勢力を有したること明に且今日に至る迄神學思想の要素として著名なるものなり、始めて カント の勢力を代表せし者は タイフトランク、アムモン、ヨネー、ダブリユ、シミツ、スタウドリ、プレツチナイダー 等より近代の代表者には アルプレクト、ツチエル ありとす、フヒクテ、シュエリ、グ、及び ヘゲル 殊に後の兩人は多くの門弟あつて其主を以て宗教の眞理を解釋するに正當なる世に未だ會てあらざりし程なりと信仰す、ヘゲル 派は一時全世界を壓制する勢力ありしも後其派分裂して従つて衰頽せる哲學中に數へらるゝに至れり、之より一層懷疑的學派の代表者は既に之を記載せり、一層正當派の中にては ハイネチツク を以て最も有名なる代表者とす、ヤコビ は又神學者等

神學の關係

の多く貴ぶ處となり殊に審美學派の尊貴を受けたり、シュライエルマヘル の勢力の著しきことは人皆知る處なり、且つ氏は已に記載せる如く哲學よきは寧ろ神學を以て著明なり、英國に於ては ロツク の系統十八世紀の間にて神學の朋友たり、今世紀に於ては コレリツチ 日耳曼 の諸學を一層貴重するの念を煽動したり、英吉利、スコットランド、及び アメリカ 等に於ては ヘゲル の哲學に歸するに神學上の價值高尚あるを以てする者太だ多し、又 ニユーイングランド の超絶論ある者は カント、ヤコビ、フヒクテ、シュライエルマヘル 及び シュエリ、グ 等の影響を蒙ること甚だ多し、左れども此等の哲學者等の勢力は寧ろ間接なり即ち オー、ビー、フロテレハム の云々るが如し、ニ夫 超絶哲學の傳播し來れる所以は重に セルマン 文學に由るものなり、ゴイテ、リヒター 及び ノバリ 等は カント、ヤコビ 或は フヒクテ に比すれば一層有名なる教師なりき、セルマン 語を讀む能はざる人には カトス、カトス、セルマン 哲學及び文學を取り之を有力なる英語を以て通譯したりとす

哲學の價值
に關する説

初め天主教會は永く中世主義を保有したりしが尙近世哲學の影響を蒙らざるを得ざりしかばカント以來は該教の人々ハームス、ゲンサー、ケレー、スタウテンメア、及びドレー等は多少哲學の流に逆ひしにも拘はらず其影響を受けざるものはなかりき、殊に初めの二人の如きは是が爲めに遂に宗教上の隨斥を免れざりき、
前數時期に於けると同じく今時期に於ても哲學が宗教界に於ける價值を判斷するは敢て一定せざりき、されども全躰より云ふときは稍中間に傾き極端に之を尊重せず又極端に之を擯斥せず今代の神學界は一般に之を前代に比すれば哲學と天啓の道理と信仰の各異ある職を有するにもせよ相符合する者なりとの信を有するが如し、エフ、エチ、ベツヂの記する所の如きは之を代表するに足る氏曰く「道理の原因は信仰の原因あり此兩者は互に相補欲す道理は信仰の供給する滋養及び刺衝を要し信仰は又道理の熟慮精考を要するものなり」(Reason in Religion) 等と云ふは、
第二節 教派、信條、及び著述家

新に起れる
教派

モレピアン
派の興起

其教理上の
特質

第一、新らじき教派。夫れ十八世紀の初以來新に起れる教派は其數甚だ多くして吾人今爰に悉く之を擧ぐることは能はざれば只其内尤も勢力ある又吾人の注意を惹くみ足る教派のみを陳述すべし、
モレピアン派。夫れルサチアのマンゼンドルフ侯の采邑に殖民したるモレピアン人は此教派の種なりしと雖ども又種々の根源より之に附着するものあり従て教理上に於ては同一の意見を有せざるものもあり只宗教的生命を重んぢて教理の上を置きキリストの罪を贖ふ能力を悟り之を経験するを以て尤も大切なりと思へり、
千七百四十九年にアウガスボルク信條を受け納れたりと雖ども是れ敢て其傳説上の意味に固着せしに非ず初よりしてモレピアン神學の中心とする所は十字架に釘せられたるキリストにありとす、是を以て數々批評を蒙りキリストの身位及び其十字架上に遂げ玉ひたる職とを過重するの弊ありとせられたることありき、
マンゼンドルフに次でモレピアン派の神學者又嚮導者として尤も有名な

るものはスパンゲンパークありとぞ。氏の學識才能は能く其教派中にあ
る疑點を改削する爲めに用ひられたり

モレピアン派は千七百四十九年サクソン政府より公然認可を受け英國に
起りし同派も亦其中英國教會の認可を得たり此派は初め宣教事業に熱心
して身を献するを以て有名なりき

「メソヂス
ト」派とモ
レピアン派
の初めの關
係

「メソヂスト」派。同派は其初めオクスフォードよあるときは眞率遺世的
儀禮的信心の形狀なりしかども一轉して恰もモレピアン派の枝の如くな
れり。同派の尤も有名ある教祖ジョン・ウエスレーの如き宗教上の經驗に
於て満足を得たるは(千七百三十八年)實にモレピアン派の薰陶による。又
氏が將來企圖せる福音傳播の大業は其大略同派の精神に感化せられたる
ものありとす。然れどもモレピアン派と直接に親しき交際を爲せしは僅
に三年を出でず。千七百四十年に至て「メソヂスト」派は未だ一箇の教派と
稱するに至らざりしと雖ども獨立の運動を始め其教理上實際上の特性を
大に發表したり。彼等の事業は一般に英國教會の嫌忌するところありし

英國教會

との關係

も尙彼等は自ら忠實に國教中にあるものと思惟し之を改革し洗滌せんと
務めたるなり。然れども種々の障害あり又彼等が天職と信したるものを
拒まるるを肯んせず漸々分離の色を顯したり而して第一の分離は千七百
七十九年カルビン主義との分裂ありホイットフィールドは此主義を取り
「メソヂスト」派に之を助く。ウエスレー派は米國合衆國に傳播し千
七百八十四年に獨立せる一教派となる。而して英國にあるものは千七百
九十五年の總會に於て或る條件の下に自ら聖禮典を行ふの權を與へられ
其後殆んど二十年始めて獨立の教派となる

神學はア
ーミアン派
なりと云ふ
意味

「メソヂスト」派の神學は全躰より云ふときはア
ーミアン派の代表者又弘
教者と稱するに足る。勿論カルビン主義の代表者も亦始めより之あり今
日に至るも尙(ウエールス地方に多し)之を主張するものありと雖もア
ーミアン主義の潮流は同派中に甚だ盛んふして「メソヂスト」派はア
ーミアン主義なる語は之を「メソヂスト」神學に代用すとせば大に其意味を變せざるべから

第五期 教理發達の要素

千七

す其意味は決して十七世紀の終りより十八世紀の初めに起れる英國教會に服従せざるアーミニアン主義にあらず、又は後年に至て和蘭に行はれたるアーミニアン主義にも非ず、或は又該派の第二代にもあらず實に其教祖アーミニアン其人にありとす、夫れ「メソヂスト」神學の精神目的は共にアーミニアスの一身に於て其代表者を發見すべしと云ふ其主意はカルビン主義の偏屈を去り同時に恩寵説を確取するにあり、又熱心なる福音的の信仰を有し神に依頼するの念深くして同時又人間の自由責任の説を主張す、細かに察するときは其内に一も新軌軸を發する者なしと雖も從來既に存し爾後又諸教派中にも見るを得べき神學なりと雖も「メソヂスト」派代表者の熱心は人々の確信を増し又キリスト信徒完全の説を改へたりと云ふべし、若し其教理の特性を擧げんとせば同派はペスギアン派の極端とカルビン派の極端を避け實際に働く所の神學にして之を擴張して廣く神學界に勢力を及ぼすにありとす、

「メソヂスト」派の歴史には其創設の時期ありしと雖も其後の歴史に於て

其神學者

其神學の
其神學の
其神學の

は又教理上改轉の時あるを見ず、勿論その内には激烈なる争論ありしと雖も未だ以て同派の神學の變遷を爲すに至らず此等争論の内にて最も著明なる者は千七百七十年の總會に於てカルビン主義との激論なりとす、此の争ふ於てカルビン主義を主張したる者はリチャード、ヒル、ゴトラン、ド、ヒル及びアウガスタス、トブラデー等にしてアーミニアン主義の主唱者にはカタルド、セルロン、トマス、オリバー及びジョン、フレッチャーあり而して吾戰争の後生きたる結果は多くの著述に顯はれたりと雖も大抵滅びて跡なく只フレッチャーの書は見るに足るべきものあり氏の著書「(Checks to Antinomianism)」中にはアーミニアン派の恩寵説を聖書上より又實際上より辨護し甚だ巧妙有力ある者あり、

「教會條例」には英國教會の三十九箇條を撮要して二十五箇條とあし之れに加ふるに教理上の添加を以て「米國のメソヂスト派にては之を以て教理の標準とあす、又問答書なる者あり幼年教訓の用に供す、然れども之れ敢て各個人の良心を束縛する者に非ず、英國のメソヂスト即ちウエス

其教會條例

レ、派に於ては同氏の説教及び新約聖書の註釋を以て憑據となすと雖も米國のメソヂストに於ては之を尊重するも以て必ずしも標準となさず、又神學系統中にはワットソン氏の組織神學を以てメソヂスト教訓の大略を記述したるものとなせしかども近來「メソヂスト」文學の隆盛に赴く有様にしてダブリユ、ヒー、ポーブ、エム、レーモンド等の書世に公にせられ、其他にも亦將に著はれんとするもの多し又一問題を論せるものにては「デー、ホイドン」の「自由意志」の論は最も廣く行はる

自由意志「メソヂスト」派あるものあり千七百八十年「ベンツヤミン、ランデル」の首唱の下に起れるものにして其神學上の信仰「メソヂスト」派と全く同様なりと云ふ
「メソヂスト」派。エム、マ、ス、エ、ル、ス、ウ、エ、デ、ン、ボ、ル、ク氏は千六百八十年「ストックホルム」に生れ六十歳に至る迄博物の學に身を投じたり、其後自ら新らしき天啓を興ふる爲に非されば少くも天啓を解釋せん爲に神の招きを蒙りたりと自信し此に依て隠れたる奧義を明かにしキリスト教

新エルサレム教會
其開祖の地位

の新時期を創設せんとし又此職を全ふするの準備として自ら他界を洞見し天使と談話し而して聖徒となれるを信じたり此方法に依て聖書の奧義は全く彼に明に靈界の智識は凡て悟り得たりと稱す又有形界を以て皆是れ靈界の形像を寫したるものとす

「スウェーデンボルグ」の系統は科學と玄奧説とを混合せるものにして自然人民の間に行はるることも亦多からず「新教會」の遂に其數甚尠にして終れざるを見るに又「スウェーデンボルグ」が其教會に對する關係を知らんと欲せば「ジエト、ス、リ、ド」の記事も若くものあり、曰く「新教會は之を外部の組織より見るときは聖書の文字中に確定せる精神上の意味ありとし此高尚なる意味の告ぐる處の教理を信仰する人の團躰にして而して「エム、マ、ス、エ、ル、ス、ウ、エ、デ、ン、ボ、ル、ク」を以て其教理の解釋者とす者あり」と
「ユニテリアン」派。英國に於て「ユニテリアン」派が始めて宗教上の一教派として立つを得るに至りしは十八世紀のことなりとす、同世紀の初めに當

新エルサレム教會の地位

十八世紀及び十九世紀の英國の

新英國惟一
派の發生

てアリアン派の形を取れる非三位派は其終に於ては單にキリストの人性説を取り尙進んで古へのソマニアン派の唱へたる如くキリストに神の名を附して之を禮拜するの説を取り、此時に當ては「ユニテリアン」派は物質説及び必至論に傾て精神上には注意せざりき、ウヨセフ、プリストリ、オオピラス、リンドセー、及びトマス、ベル、ヤム等其代表者あり其後に至て英國「ユニテリアン」派を代表する者はウエームス、マーチノーとす、氏は近代の代表者の如くプリストリーの時に比すれば一層精神的觀念的哲學を取れり、

此時期中新英國に於ける「ユニテリアン」派の發達は尤も著るしきものあり此發達の明は顯はれたるは僅かに今世紀のことなりしかども遠く二百年の前はりして其兆候ありしなり初めニユー、イングラントの組合諸教會に於て其教會の交りに入る條件を緩漫にせり即ち洗禮を受けたる人にして高貴の生活をなし正當の信仰を有する者は假令更生の徴なくとも其兒女をして授洗せしめ之をして聖餐の席に陪するの外教會の凡ての特權に

其生長の諸
段

預からしむるを得となし斯くして所謂彼の「半途の契約」あるものを認可したるは實は千六百六十二年の總會にあり爾來教會の大部此例外に赴き單に道德的の習慣あるの人々に向て教會の門戸を開くに至れり、此弊を矯正したるは彼の十八世紀の大復興にして此時又教理上の熱心も大に復興し講壇の議論は重に恩寵の説或は應報の説を以て充ちたる有様なれば此復興に熱心ならざる人々は自ら其宗教及び神學の性質と同情を表すること能はず己れの僻説に合するものを外國の文學より輸入するに至れりとす

斯くの如くして將來の分裂を預言するもの已に彼の時に生まれり、「自由主義の第一着の運動はカルビン主義を排してアーミニアン主義を用ゆるにあり、其第二着はカルビン主義を全く放棄し從て又三位説及び贖罪説に服すること漸く滅し道理を重んずること益々甚しく而して最後には自由派變じて「ユニテリアン」派となり自ら別に一派を爲すに至れり、左れば彼等尙眞實に聖書を遵奉し道理及び天啓の二語を以て同等の者となせり、

米國第一の
惟一派の教

而して實に彼等に取りて聖書の價格ある所以は其意味茫漠として定まらず自由之を思考するの餘地あるを以てありとし、斯くして知る處のものよりも知らざる處の意味を貴重したり(Wm. O. Gannett, Life of Ezra S. Gannett.)英國に於けるが如くニュー・イングランドに於ても三位説より離れしものは先づ第一にアリアン主義に陥れり、然れども直ちに其多數はアリアン主義を廢したるが如し、「千八百十五年の破裂の時に當て四十歳を経たるものは多くはアリアン主義を抱て死せり而して當時四十歳以下のものにして疑を生せざるものは少あり」(Wm. O. Gannett.)

ニュー・イングランドに於て公然「ユニテリアン」派を以て稱せし教會は第一にボストン府の「キングス・チャペル」なりとす此教會は初め監督教會ありしが千八百八十七年「フリーマン」氏の接手禮を受くるに先ち已に新約書を改削して三位一体の教理を殆ど抹去したり、此時に當て「ユニテリアン」派は其形未だ成らざりしと雖もボストンの組合諸教會の多數は之に左袒し又東マサチューセツト州に於ても非常の進歩をなし、而してバルシャムの

グ
チャンニン

超絶學派

論出づるや人々始めて「ユニテリアン」派の勢力強きを驚き遂に千八百十五年「ユニテリアン」派の組合教會より脱出するの端緒とされり

アメリカ、「ユニテリアン」派の第一着の運動に於て尤も有名なる代表者はウキリアム、エルラー、チャンニングありとす、氏が新約書を以て超自然宗教の論託とせし又人間性質の高尙あること又其完全に達し得べきことを信仰するの精神は歴然として此運動中に顯はれたり、又此時期中に同説を有せる人々はイー、エス、ガンテット、ヘンリー、ウキアース(父子二人)及びアンドレ、ラートン等あり

アメリカ、「ユニテリアン」派の第二時期は即ち超絶學派の發生なりとす、此派の性質に關しては云へるあり「是れ自由主義運動の感情的玄奥的詩的に顯れたるものなり」(J. H. Allen, Our Liberal Movement in Theology) 實に此主義にては直覺的を重んじ内部の靈の感覺は是れ宗教の真理なりと云ふ、ブルフワルド、エマルソン、エイ、ビー、オルゴット及びジョアデ、リブレイ等は

パーカー

超絶學派の有名なる代表者なりとす、セオドル、パーカー氏に至て同派の主義稍偶像破壊の過激性質を負ふるに至れり、「氏の系統は感情に基く定斷説なり」(Allen)、氏は其思想急進にして其言語は尤も極端なり是を以て數々教派外の人のみならず同時代の「ユニテリアン」派神學者も亦數々之を批難したり、氏の説に依ればキリスト教は完全絶對の宗教に非ず只だ人間が絶對の宗教に達する行路に於て進化し出したる宗教の中にて最良のものなりとす

パーカー派の起れる後「ユニテリアン」派は一方に於て極端の合理論に傾き他方に於て古風の福音主義神學を去て別に其主義を取るもの起れり、福音主義の著述家に於て有名なるハエチ、ダブリー、ペルロース及びエフ、エチヘツクなど殊にヘツク氏は思想鋭敏緻密の著述家なり又ジョーエームス、フラーマン、ドラトク氏の如きは近代「ユニテリアン」著述家中に有名なり

宇宙神教派

近來新に一教派を組織し其三位説は「ユニテリアン」派に近く其他の教義に於て全く相異なるものあり、宇宙神教派の如き之に屬すイー、エチ、カペン

三位説の起る

三位説の起る

三位説の起る

此教派の代表者にしてキリストを以て神と同性質ありて而して實に神自身が肉を取て顯はれたるものなりと信ず、然れども之に反してホゼア(10)の如き人並は其繼續者等はキリストを以て單に人性のみを有するものとなせり、ジョン、モルレーは此教派の起原(十八世紀の終)に當て有名なる者ありしが氏はサベリアン主義を取り又エルハナン、キンチエスターは三位論を取れり、而して又宇宙神教派なるものは初め全く「ユニテリアン」派と異なりし事實は其カルビン主義の原罪説並に贖罪説を奉ずるを以て知るべし、彼等は又會て「メソヂスト」「トプレスビテリアン」及び「マヂナス」諸派を混合して一となし聖書を以て唯一の標準となし以て人間の製造せる信仰箇條に反せんと務めたることあり、其内には三位説に反對せる教理を取りしと雖ども之と同時に彼等のサベリアン派にも非ず又人性派にも非ず、彼等の普通に信じたる信仰は耶穌基督は万物の成らざる前に父と同一存在に玉へりと云ふにあり、(David in Millard Rupp's Hist. of Relig. Denomi-nation)「カリスティアン」此教派の弟子等を云ふは三位説の教理よりは寧ろ

モルモン派
を論せざる
理由

舊き教會の
發達

ルーテル教
會近代の發
達

其名を嫌妄せり
吾人は爰に「プレスビテリアン」派「プロテスタント」派「エビスコパルアン」派「ダツ
チ」派「オームト」派「ビルマン」派「レフォーム」派及び「ルーテル派」の如き米國お
於て大切なる教派を論ずるを止むべし蓋し此等は新らしき教派と云ふよ
り「舊き教派」が新地方に遷轉したるものなりと云ふべければなり又「モル
モン」派なるものありと雖ども其物質說多神說或は多妻主義及び其他婦人
の位置に關する附說等は皆是れキリスト教會教理歴史に於て論ずるより
は寧ろ異教の歴史に於て論ずべきものあれば吾人は爰に之を評論せざる
べし

第二、舊き教派の發達。既に總論に於て諸教派發達の容納を大畧陳述し
たるが如く此時期中即ち批評と辨解、攻撃と防禦、爭論と講和の一時に
起りし時期中にあれば諸教派は能く之に適ふ性質を負ふて發達したり
ル[○]テ[○]ル[○]派。夫れ敬虔派の熱衷の精神は十八世紀の初めに非常の感化を
及ぼせしと雖どもルーテル派の生命に貫流せず又其神學思想にも混せず

純の
合理派の起
源及び進歩

却て敬虔派はルーテル派の爲に其勢力精神を失ひたる程にしてルーテル
派の冷淡及び外形的なるを防ぐに由さく遂に全派をして不信仰に陥らし
むるに至れり、加之英國よりは自然神教の餘流波及し來り、佛國の不信
は「フレイツキ」大王の保護を得て浸入し、「カルフ」の哲學は人心をして精細
ある議論を慕はしめ批評の熱心、前代の臆測獨斷主義に反動して起り而
して此等の要素相合して遂に「セルマン」合理論の準備をなせり
左れを「セルマン」合理論は「バード」、「エザルマン」等の極端家を除くの外は敢
て無宗教に奔り聖書を蔑如するが如き弊ありし者に非ず其目的はキリス
ト教を滅却せんとするに非ず寧ろ超自然に反し自然の道理を以て解釋せ
んとするにあり急進の合理論者は凡ての事皆唯理論の下に説き去らんと
務めたれども他のものは只キリスト教中にある超自然の元素を省略して
満足せるなり。

夫れルーテル教派の者にて合理論者に移れる初めは「フエー」、「デー」、「ミカイリ
ス」及び「フエー」、「エー」、「エルテスタ」兩人あり、左れども是れ敢て彼等の信仰正

統教理を離るゝこと大なるを以ての故に非ず只彼等が批評法の用を改め
て自由思想家の益を爲せしこと大なるを以てあり、故に適當にセルマン
合理論の開祖と云ふべき者のハツエー、エス、セムラー氏とす、氏は千七百五
十二年より全九十一年に至る迄ホールの教授を爲せし人なり十八世紀の
終に至てはルーテル派の神學者等は多くセムラー氏の論據に到達し或は
之を超過せし者あり、而して今世紀の初に於てハ已に合理論の學派甚だ
盛大に趣けり、バウラス、ヘンク、ロアー、エツケルマン、ヴェルセス、
ウエグ、ヤダー等の急進の合理論者にして之れに比すれば稍や温和の主
義を代表する者はナイメヤー及びプレツチナイダーなり、シー、エフ、ホン、
アムモン氏は以上兩種類を兼ねる人なり、又アイクホアリン氏は聖書中
の超性的の元素を滅却せんとするを見れば急進主義の如しと雖ども聖書
に關する他の諸説に於ては全く保守主義あり、
斯くの如く合理論の勢力稍や猖獗を逞ふするに至りしと雖ども今世紀の
初二十五年の頃よりして既に之に反對する運動發生したり、其要素とす

合理派に反
動の勢

りし者は種々ありしと雖ども觀念主義哲學を以て最とす此等の哲學は敢
てルーテル派の正統説と符合する者にあらざりしやも知るべからずと雖
ども普通の合理論と朋友にあらざりしことは明かあり、カントの哲學は
或る點に於ては合理論に合すと雖ども其反對する處も亦た甚だ多し、フ
ヒクテ、エリシグ、及びヘゲルの書中には明白に合理主義の牽強附會を
駁する處あり、加之セルマンの人心は獨立の諸戰爭に依て深く感激せし
處の者あり之が爲に其思想稍や該博に趣き又稍や福音主義に趣けり、然
り而して遂に神學界に一大騷を興へたる者はシャイエルマヘルの力なり
とす、氏は合理論が單に智力のみを以て満足せんと務むるに反し宗教を
以て感應に基する者と唱へ之を満足せしむる爲に贖主の一身に重きを置
かざる可らずと主張せり、實に氏の教理の系統を示したる (Der christliche
Glaube) なる書は千八百二十一年世に公みせられたる者にして近世神學の
一新時期を初めたる者ありとす、合理論は之に依て全國より拭ひ去らる
ることおかりしも其後國の一部に割據し且つ強敵の前後を覗ふあり遂に

其形狀を變じて自ら新らしき風を裝ふに至れりデビド、ストラウス及びエツ、ツ、ハアアの學說の如きは則ち合理論の舊形を棄て、新形を取りし者あり

正統派と稱すべしル
テル派學者の表

ルイター派神學者にして正當の信仰を固守する者は此時期の初めに當てはフランキス、ブツデアス、ローレンズ、ボン、モシヤイム、メンゲル、ボームガ
イタン、カープツウ、ワルク、ラインベック、カルボグ、ベツフ、あり其中頃にはモークス、ドーマー、ライン、サイラー、ストア、ナツプ、ラインハート、フラン
ク及びオイタンガー(氏は其正當信仰の元素を加ふるに稍や接神術の奇僻を以てせり)あり、其末葉及びではハーン、オルンヤウセン、ハバーニツク、
ルーク、アウガスト、チアングル、ニツチ、ミウラー、トールラック、ウルマン、ト
ウオスタン、ドルナー、ライプナー、マータンセン、ローセ、ベック、アウバーレ
ン、メーヤー、シミツド、サートリアス、ヘンクスタン、ボルグ、グイリツク、トマ
シオス、ホフマン、デリツヂ、ルーサー、カニス、ケール、オイラー、フヒリツ
ク、ハイ、ベルンハート、ワイス等あり、此等の人々は皆ルイター派の正統信仰

一致運動

を有すと雖ども勿論相互に異なる處なきに非らず例せばローセ、クイス等の系統とグイリツク、フヒリツク、ハイ等の系統と比較するに當て、其間に大差あるを見る、又此等の人々は悉く正統信仰に固着する者に非すと雖ども其精神及び信仰は共に皆福音主義にして普通の合理論に反對する者なり
ルイター派の外部的の事件に付ては其一致運動を以て尤も大切ありとす、
「千八百十七年宗教改革の三百年紀に於てプロシヤの王フレデリツク、ウヰリアム三世其國にあるルイター教會と改革教會とを合併し其政治及び禮拜を一にし之に福音教會の名を附せり、此例は忽ち國中の諸州の從ふ處となり、ナツサウ、ライン河畔、ハフリア、バーデン、ヘッセ、カッセル、ヘッ
セ、ダームスタット、サクセー、ワイマー、ヒルドルフ、クシヨウセン及びフイテ
ンボルグ皆之に從ふ、左れをハアリア本土アウトリア、サクソニー及び
ハノイカの王國は飽く迄も一致を拒めり」加之已に兩教派合併せし諸
州に於ても大反動を起して却て宗教心を強ふじたる處あり

米國に於けるルター派の教理上の有様

大陸改革教會神學上の隆替

福音主義の尤も有名なる代表者

合衆國のルター教會は其祖國の教會よりは一層神學上の變化を経たり、然ども未だ全く之を離るゝに至らず、今世紀の初半に於てハッダガスボルクの信條に固着する者至て少くルター派の特性に反する説を陳べて恬として顧みざる有様なりしが近來大に面目を一新し舊ルター派の立脚の地に堅立するの運動起れり先きの代表者はモックカーにして後の勇將ハクラウスなり

歐洲大陸の改革教會。此時期中に於て改革教會は之をルター教會に比すれば其成果稍や少きが如し、大陸諸國の同教會は大概同様の隆替を経験し一般に其初代の論據に固着する者少く從て合理論の進入を蒙りたり、和蘭に於てクイテン等の首唱せし處は此方向に進歩したるを示すに足る、左れば福音主義の代表者も亦た少き非ず、則ちスキツランド及びゼルマンに於てはエプワード、ウィザー、フックケンパーガー、ハンデンシャ、サック、ランゲ、ヘンゲンパークあり、佛蘭西に在てはエドモンド、デ、ブレセンスあり、又俗人に有名なるギジウあり和蘭に於てはハンオステ

合衆國の類似の諸派

英國自然神教の論争

ルマを以て尤も有名なる福音主義神學者ありとす

合衆國に於てはダッチ、リフォード教會とゼルマン、リフォード教會と相合し共に急進主義の進入を蒙ること其祖國より少く一般に初代の標準に従ふ、左れば或る點に於ては其固着心を減ずるが如き觀無きにあらず、ダッチ、リフォードにハースト、及びテラー、レギスの如き人あり、ゼルマン、リフォードにはジョン、ダブルノー、チピン及びフリップ、シャーマ氏あり

英國教會及びプロテスタント、エписコパル教會。十八世紀の初半に英國宗教歴史に有名なる者は「メソヂスト」大復興を除ては自然神教の争論なりとす、コリンズ、ウトルストン、チャップ、テンダ、モルガン、及びボリングブローク等の如き自然神教家の著書は大に人心を激昂し從て之を駁論する著書盛に行はれ辨論攻撃至らざる處なく之に加ふるに宗教上の復興あり而して自然宗教の遂に英國の地を立つを得ず十八世紀の中頃に至て此争論全く衰ふ近年に至ては十八世紀自然神教に反對して顯はせる著書迄も

福音主義代表者

之を輕蔑するの風行はる此等諸書は固より近世神學の光に照して見るときは缺點なきに非ざると雖も其當時の急を救ひキリスト教の信仰を保護したるに於ては敢て足らざる處なかりき、自然神教に抗して戦ひたる有名ある人々は(國教分離者をも含む)ナタナエル、テードナー、リチャード、ベントレー、エドワート、チャンドラー、サムエル、チャンドラー、トマス、マヤーロツク、ザカレー、ピアス、リチャードスマルブルク、井リアム、ロ、フエームス、フオスター、フヨン、コチーペアー、監督ハットラー、フヨン、チャップマン、井リアム、ワーバトン及びフヨン、レランド等あり

今世紀に至て尤も有名なる事件は「トククダリアン」即ち儀式派と廣教會との反對の運動ありとす、先きの派は千八百三十三年オクスフォードに於て起りイー、ビー、ブゼー、シエー、エチ、ニエーマン、エチ、フラウド等は首唱たり是本と反動より起れるものにして一方には國會の門戸を自由にして國教分離者或はローマ教者をして其議員たらしむるを憤り一方には教會内に起れる偏理急進の弊を嘆するより反動の勢を以て始めは教父の權力

「トククダリアン」派

廣教會運動

を重し使徒繼續説を主張し聖禮典の効驗を唱ふるより漸々進で遂に新教を惡むローマ教の儀式并ぶ教説を慕ふに至り多くの人々の去てローマ教に行け其内にはニエーマン、ハメオン、キルバート、フオスター、マニング、及びフエームス等の如き有名ある人々あり

廣教會は儀式派に反對せる極端にして高教會の本源の説を捨て使徒繼續の不必要を唱へ宗教的と世俗的の區界を狭くし道理を尊で傳説の上に置き而して其極遂に天啓宗教の永遠不變の證據を多少輕蔑するの弊に陥れり、廣教會にて有名ある人々ハコレリツチ、トマス、アーノルド、エズ、マ、モリス、チャールス、キングスレー、ベンジャミン、フヨウキット、ニ、ヒル、スタンレー及びマッシュウ、アーノルド等なりとす

合衆國に於て監督教會が始めて其組織を定めしは千七百八十九年にして千八百〇一年に至り英國教會の三十九箇條を少く變改して採用し初めは稍や低教會の傾向を現はせり、監督ホワイト氏は該教會組織の時代に於て其首唱者なりしが氏は高教會の性質及び標準を全く脱離したり其後年

合衆國監督教會の設立

スコットランドの長老派

教會分離の起原

に至て該教會の歴史は多少英國教會の運動を反射し來り「トラクタリアン」派の運動と廣教會の勢力と共に進入し來り近來ハ高教會の勢力稍や勝を制し爲めに使徒の特權を繼續せると云ふ監督教會内に「リフオームド、エビスコパル」教會なる者顯出するに至れり
 長老派。スコットランドの長老教會は當時保守主義の精神を以て著名なりしが十八世紀に至て自由思考の顯象生ヒグラスゴの教授シムソン尤も有名あり、又彼の所謂中立派なる者あり、ウヰリアム、ロバートソンを首とし定教的の熱心を去り神學上の信仰よりは寧ろ倫理上の教を説けり、左れと彼等は未だ教會の標準とするウエストミンスター信仰簡條を全く放棄したるに非ず夫れ當時の教會分離なる者は重もに其源教會政治に關する異見なりしがスコットランド教會にては此苦源より教權授與の難疑問流れ出でたり、而して千八百四十三年遂に分裂して自由教會なる者起るに至れり、此分裂に於て尤も勢力ありし首唱者又自由教會組織に於て尤も效ありし人は彼の有名あるトマス、チャルマー氏なり近年に及では國教

近代の學者

米國の長老派

新派及び舊派の區別

殊に大切な著書

英國の組合派

會も自由教會も共に神學上の勢力著しく吾人の注意するに足る著書又甚だ多し、ホリアム、カンニングハム、アレキサンダー、ヒル、ブライス、ジョン、タルロック及びヘンリ、カランダ、ウツドの如きは即ち有名なる著述家なり、合衆國に於ては長老派は概して定教説に固着するの風ありと雖ども又之に反して定教を離脱せる者ありて遂に著しき大破裂を生じたることあり、
 一は舊派と稱せられウエストミンスター神學のカルビン主義を遵奉し、
 一は新派と號して新英國神學のカルビン主義に傾向し、兩派遂に一千八百三十七年を以て分裂せり、其後一千八百七十一年に至て兩派の合併行はれたりと雖ども其神學二様の風は今尙依然として存す、舊派の説を充分顯はしたる者はチャールス、ホッヂキ氏の「組織神學」にして又近來出版せるヘンリー、ピル、スミス氏の「キリスト教神學の体系」なる者は著しく新派の説を代表する者と云ふべし、
 組合派。新英國は實に組合教會神學の道場なりと云ふべし英國にて此派は教理上の變改甚だ稀にして大概其初めの神學を固守せるが如し、而し

て其尤も有名なる代表者はブラッドゲレー、ワッツ、ロッドリッチナリ、
 彼等の信仰を認はしたる者にして尤も近代の者は一千八百卅三年の者な
 り是れ敢て標準たるにあらず單に彼等の信仰の要略に過ぎず、近來は稍
 や舊時の説を棄て新説を取る者多し殊に其終末學の問題に於て然りとす
 新英國に於けるカルビン主義の諸教派中に近來尤も著しき發達の運動を
 爲せしはヨヨナサン、エドワールドを以て始めとす氏の説の強固なるに關
 して種々の説あらん、左れと氏の人物の偉大ふして其氣概の精確なるに
 至ては明かなる事實なりとす、氏及び氏の繼續者舊時の神學に改良を
 爲したる點の二三を擧ぐれば左の如し曰く、徳を定義して仁心なりと云
 へること、自然の必然と道德上の必然とを區別したること、自由及び故
 意の兩語を以て全一なりとしたること、徳及び惡の實質は其原因とは全
 く獨立なりとしたること、又自由は外部の定に従て干渉せられざる者な
 りとしたること、贖罪に關しての負債説を棄てて政治説を取りアダムの
 罪の連累説を却け又新生の概念を純潔にしたること等是なり、斯くの如

新英國の組
 合派
 ヨヨナサン
 エドワ
 ド
 エドワ
 ド
 等が舊時の
 神學に改良
 したると云
 ふ點

新分離と稱
 する運動

エドワードの變改したるカルビン主義は新英國神學者名稱を受けた
 り、左れと此名稱は稍や廣漠にして其内には種々異なる學派を含蓄す或
 る者はカルビン主義の極端説に反するに己れの説を以てし他の者は殆ん
 どアーミニアン主義に近きたるあり、是等は尙や神學の問題を論ずると
 さに評論すべし、新英國神學者の中に有名なる人々はヨヨセフ、ペラミー、
 サムエル、ホップキンス、ヨヨナサン、エドワード、ストックブリッチのウ
 エスト、ジョンスマルレー、サムエル、スプリング、ナクナエル、エムモン
 ス、イー、デー、グラフヒン、テモテ、ドワイ、レオナード、ウィ、テロー
 ア、エノク、ボンド、及びイー、エー、パーク等あり
 新英國組合派の歴史に於て起れる大事變の一は既に記述したるが如く「ユ
 ニテリアン」派の起れることにして第二は則ち通例稱して新分離と云ふ運
 動なり、此運動は僅かに數年前表面に顯はれ出でたる者にして其主眼と
 する處は左の如し、舊時の推想神學は種々の點に於て牽強附會の説を臆
 定すれば、神學は尙一層キリストを中心となさざる可らずとし、近來の

千八百八十四年の信仰簡條

十八世紀浸禮派の運動

其現世紀の繁榮

聖書批評を允諾し又天啓の文字に固着するよりは寧ろ信徒の良心に重きを置かざるべからずと云ふ、分離の點の尤も著しき者は終末學の問題より分離者は全く回復説レストレーションセウリを取る者に非らずと雖も死と最後の審判との間に尙ほ試練の時ありとの説を代表するが如き觀あり、一千八百八十四年組合教會の總會に於て定めたる委員が呈出したる信仰簡條は新分離者の精神に適したる者にして正當福音主義の信仰を顯はしカルビン主義の特性を棄て殆んどアーミニアン主義に傾きたり、カルビン主義の特性は今尙ほ組合教會中に存する者ありと雖も敢て又必要の教理を爲すものなし、

浸禮派バプティスト、アリアン主義の進入の爲めに十八世紀英國にある普通即ち「アーミニアン、バプテスト」派の分離來れり、一千七百七十年に於て正統派は自ら相集て普通浸禮派なる教派を造り特別浸禮派即ちカルビン主義浸禮派はジョン・ギル、ジョン・ブライン等を首唱とし固くカルビンの辯理説を保守せり、十八世紀の終(ケリアム、カレール及びパーハール、ホルルの時代)に至

之を代表する信條及び學者

近代の天主教會内の自由主義運動の狭き範圍

て此教派の勢力稍や盛大に越き今世紀に至ては英國に於ても合衆國に於ても其人數勢力事業共に著しく進歩したり又一の教理上の標準に束縛せらるることあしと雖も其信仰は全く純一にして嚴格にカルビンの系統に附着せり、然ども彼等も現今神學海の一大波瀾なるカルビン主義に反對する運動に多少加はらざるにあらず又浸禮派の信仰を代表するに足るべき教理の記録中には一千七百四十二年のフィラデルフヒア信條(千六百八十八年英國の信條と全じ)及び一千八百三十三年ニュー・ハムプンシャイア信條あり又此時期中此教派中に有名なる著述家は前に擧げたる人々の外にアンドレ・フルラト、マナット、ハツケット、ケンドリック、プロードス、アルワ、ホペー、フエー、エル、タツグ、ペンドレト等あり

天主教會、ロマ教會内には此時期中も尙ほ神學界の異説多く存すと雖も前時期に於けるが如く互に相争ふ事を爲さず一般の傾向は議會及び法王の定めたる點を合同し明に定めざる點には種々の説を容るゝの自由を與へんとするが如し而して自由主義の運動數々顯はれたり、ジョセフ二

パチカン會議の法王無上權説の勝利

世の時起れる「アウストリアの文華」と呼ばれたる運動の如き是なり、然れども是等の運動は多くは反動の勢力の爲めに抑へられ其結果は適宜以てローマ主義の元素を以て「カソリック」主義を歴し法王無上權説を強ふるに過ぎざりき、千八百六十九年—七十一年のパチカン會議の如き其例なり、勿論パチカン會議は黨派の勝利を示し且つ其律令も非常の處置を以て漸く發布したること明なりと雖ども其律令一度發するや初め之に反對したる者も多くは之を承認するに至れり、又復古主義「カソリック」の運動なる者あり是れ實に反對の頂上に達したる者にして千八百七十三年一の組織を造りドリンガー、レーンケンReinckenの如き有名なる人々を其内に有すと雖ども其權力未だ甚だしく盛ならず此主義の運動は其名の如く教會の標準を遠く古代に取らんとするにあり是を以て初代六世紀間の教會が決定し實行せし所を以て教理及び教則の紀律なりとす、彼等は法王の無上權に關しては稍や緩漫の説を取ると雖ども其神學は實際「天主教」の信仰にして其無上權に對する説は此信仰を變化すべしとは預想する能はざるあり

信條様の記

有名なる學者

近代希臘教會の保守的傾向

パチカン會議の議決の外此時期中「天主教」教會の信仰を代表する記録は法王ニコライ九世が處女マリヤの無罪出生説を傳播する憑據として千八百五十四年に發布したる *Ineffabilis Deus* なる勅令及び千八百六十四年に發したる *Syllabus* (綱領と云ふ意) ありとす、「マラス」は當時の誤謬八十を指摘したる者とす、天主教會中に有名なる著述家は十八世紀に於てはネトセピアス、アマール、ミカエル、セラー及びマーチン、ガーバート、あり今世紀に於てはジョー、ペロソン、ジョー、エー、モーラー、エフ、エー、スタウデンメーア、エチ、クリ、セフ、ボン、ドレー、ダイリンガー、オインシガーあり、パチカン會議の以前に當て天主教の文學の光と云ふべき人はドリンガーなり、左れど氏の效は教理界に著しきよりは寧ろ歴史上に顯著なり、ケー、ジョー、フベール氏も亦歴史上に有名なる人あり、前二世紀間の希臘教會の歴史上に注意すべき事件甚だ少し長く此教派の特性たりし保守の精神は今尙其信仰と實行とを支配し居

して之を重宝たること明なり、されば彼等は此の如くして尙は其教會の標準と和合を保つを得ざりしあり又バツカン會議の決議にては恰もトレントの會議の如く確實の傳説は其結局の基礎キリストの口より來り或は聖靈の指示に依り使徒の口より來らざるべからず而して此の如くして漸々傳はり來りしものならざるべからず」と云へり(Chap, II)

ニューマンは其發達論に於て多くのロマ教神學者等が一致する能はざる説をさせり、氏の變化及び生長説に反してロマ教者の中よりはボスウェーの精神に従ひ教會は何時も同一の事を教ふるものにして其の教訓は將來發達の下敷を有するのみに非ずとする者あり、ドクトル、ワイスマンの記述の如き其の例なり、氏曰く「新らしき教理は一も教會に入り來ること亦し吾人の主張する教理は悉く使徒の時より存したるものなり」と、されどもニューマンの説は大ひにロマ教の辨解者に助けを與へ殊に教會の教訓は一世紀より變化を受けたることなしと云ふ極端説を持せざる人には最も適したり、又氏の説は處女マリアの無罪出生説及び法王の無誤の權

「トラクタ
リアン」派
は天主教の
傳説の説に
接近せり

力説の傳播以來は殊にロマ教者に取て有益かりしなり、新教の地内に於て起れる運動にして傳説に關する説稍々ロマ教に近寄れるものあり、英國儀式派の運動の如き之れなり左れども之れ敢て新教の運動と名づくべきものにあらず儀式派にては傳説を以て憑據ある聖書の解釋者とあすなり、ブゼーは其初めの書に於て曰く「吾人は各自一個の判断を取るべからず一統教會の判断乃ち正當師父及び昔時の監督等が證明したるものを以て判断せざるべからず」(Letter to the Bishop of Oxford.) 其后ニューマンに與ふる書に曰く「余は英國教會は教會内に神よりの權理を有し之を使用し聖靈の嚮導により使徒の傳説に従ひ聖書より眞理を引き出すを得べしと思ふ又余は是に於て吾人の間に一の差違あるを見ず」(Quod ubique, Quod semper, Quod ab omnibus.) とは吾等の神學者等が反覆論する處にして其内には傳説に關してトレント會議に於て決したるとも同様の教理を含有するものなり(Birenicion)

第二、靈化に關する諸説

第五期 教理發達の要素

聖書の靈化
に關する四
説

文字的靈化
説

ボノムガー
デン

ジョン、ギ
ル
エムモンズ

爰には只聖書の憑據を承認する者の説のみを擧ぐべし聖書を受け納れざるものゝ説は之を次に評論すべし
夫れ文字的靈化説は十七世紀に盛なりしが今時期に至ても尙其の代表者あり此説たるや聖書の一言一句皆靈化を蒙りたるものにして苟くも臆實家の誤謬の外は少しも誤りなきものとす、ルーツェル派中にも此の説を取るものありボノムガーデンの如きは即ち然りとて去れど氏の言には稍々之を脱せんとするの兆あるを見る、蓋し氏は聖書中に實際誤謬ありとなすは必要に非ずと雖もたとひ其年代上地理上或は歴史上の些事に誤謬ありとするも以て聖書の憑據を動すに足らずと主張すればあり、文字的靈化説を強く主張するものは十八世紀浸禮派の神學者ジョン、ギル氏あり、又新英國神學者中にはナタナエル、エムモンズ次の言を以てこの説を主張せり、曰く「聖書の如き書の毎章毎語は助けを受けざる筆お依て記さるべしとは思ふ能はず是を以て聖書記者の聖書を記載する間は聖靈常に其の思想言語を示したりと斷言するは尤も明らかなる理あり」と、氏は又聖書記者の

ハコーン
ワード

第二説

ホッヂ

ローレン
ス

文辭の互に異なるは記者の才能教育の如何を見て聖靈が之に適應する數を考したるに依る恰も親が其子に文字を書き取らしむる時に於けるが如きと云ふ也 (Systematic theology serm. VII.)、ハコーンワードの教訓の全く同説にあらざるれば稍々其の傾向を有するものとも、近來に至て此の説を代表する者はセザハの神學者エル、ゴッスセンを以て最も有力ありとす、氏は聖書に就て曰く聖書には一つの誤謬あることなし、其各部は同様に靈化を蒙り毎語必ず其のあるべき處に在て少しも動すべきなし、「聖書は神が前以て其記者の心を啓らき而して后之を用ひて記せしめたる書にあらざる、實に神が彼等を書き取らしめたる者にして乃ち眞に神の言葉なり、神の靈彼等に依て語り其語彼等の舌にありしものなり」と (Pneumatic translation, by D. D. Scott)、チャールズ、ホッヂ氏の説も亦殆んど之れと同じ氏は聖書の諸書は悉く同様に靈化せられ其の靈化は聖書の言語にも思想にも同じく及ぶべきものありと云ふなり

の信者又吾人の信仰及び義務の疑問を決するに於て此等の聖書に訴へて憑據となす……吾人は聖書より吾人の信仰を取るなり、「ユニテリアン」のキリスト教は乃ち斯約のキリスト教なり」と(Discourse at montreal)、「オーストリア」のデューニイ氏曰く「事柄は神の事にして教理は真正あり、歴史は憑據あることにして奇跡は實際なり……神の不思議なる啓通の徴歴然として聖書の上にある」と、左れども氏は他の處に於て神の啓通を以て聖書の形狀にありと云はまして全く實質にありと云ふが如し又天啓と天啓の記録とは異なりと論じて曰く「思想は万事を啓示する大心意(神)より來る然れども一度預言者或は使徒の心意に入るや人間の概念とある斯の如くして變化を受けたる心意の人間に超絶するなり、又靈通せられたる真理の人間の知覺感應想像力の問題とあり之を世に通知せんとするに當て乃ち人間の言語を採取するものなり而して其の知覺感應想像等は其通知に於て働き助けをあたすと他の書に於けると異なるなし」と(Works Vol. III)、近來「ユニテリアン」派一般の説は如何んと問ふに其説は以上に述べたる説に附着するものあり又極端なる合理論の特性を取るものありて其の兩間を彷徨するが如し「ヘンリー」氏は若し大胆なる批評のことなかりしあらば以上の諸人と同列に置くべきものあり、氏曰く「聖書の神の言たるは恰も良心が神の聲なるが如し然れども聖書の言葉は神の言葉に非ず恰も良心の決定は神の決定に非ざるが如し、神の靈化は人の良心を薰育せと雖ども之を以て決して誤らざる者とせざるが如く神の心意、意志、精神は聖書を生じたるも之を完全となすを得ず、左れども尙も聖書を通讀する者は其内は神の啓通、聖なる教訓、誤らざる嚮導、其の全部を貫流すること恰も一條の河流、蟻々として山谷起伏の國土を駢馳するが如し、聖書は其の外部の性質或は反對し或は矛盾するが如きものが雖ども尙ほ其内は神の律法と恩寵の公義と慈愛の跡を見得て明あり」と(Restatement of Christian Doctrine, serm VI) 氏は又靈化を以て單に天才に過ぎずと云ふ説を駁して曰く「靈化に關する普通説即ち大問を以て單に全能者の器械とせず説も尙や之を彼の所傳進歩説と稱せる者乃ち靈化を以て單に心意の自然力が二層高尙に純潔に進歩

第五期 教理發達の要素

第四説

したる者ありとする説に比すれば却て眞理に近し」(Ibid. serm. VII.)
 靈化に關する第四の説は之れを直覺的と云ふを得べし、此の説は其の起
 首シラフイエスマヘルの神學にあり其の特點とする處は靈化は聖書記者に
 外より通知せらるるものに非ず、其内部の宗教的意識を教育發達し神の
 眞理を悟了し之を教示するに足る者とせらるる是即ち靈化なりと斯くの
 如くして靈化を以て尋常一様の感動にして只靈上の眞理を悟了するの深
 さにありとし預言者或は使徒等は其宗教的生活の深遠圓滿なるにより聖
 靈の心を洞見するの明を得たるものなれば彼等の靈化は凡て眞正の信徒
 が受くる者と其度を異にするも其性質に於ては異なることなしと云ふ、
 ニツチ、トウホス、テン、エルワート、マートハイネツク、ロトセ及びモー
 レル等は多少此説に傾くトウホス、テンは曰く「靈化は信徒一般に與へらる
 る」^{エンライエンメント}「教化」と異なる處の其の種類に非ずして其階段にあり故よ之れを呼
 んで「一層高尚なる教化と稱すべし」と、マートハイネツクは曰く「靈化は自
 覺力^{コンシャスネス}を上げて最も純粹にして又最も明瞭なる神覺力^{ゴットコンシャスネス}となすに外なら

天啓と靈化の區別

亦又與する能はず」と(System der christlichen Dogmatik, Thil II.)
 是れ稍々ヘゲルの風ありと雖どもシラフイエスマヘルの弟子より來りし者
 亦必ず知るべからず、^{ヘゲル}ヘゲルは又魔術の如き者を神の業より區別し去ら
 んため天啓を以て道德的器械なる媒介を経て來るものならざるべからず
 とせり、^{ヘゲル}ヘゲル曰く「天啓の本質は神の超理的の力に依り人間の内にある神
 覺力を純潔し又之に力を與ふるにあり」と(Zur Dogmatik, 1863, pp. 60-64.)
 氏の此言は天啓の定義なりと雖ども此言に依て氏が靈化に關する思想を
 知るを得べし蓋し氏は靈化を以て天啓の主觀的の面とあじ天啓とは即ち
 靈化の歴史的行路を取りて外に發表せしもの之ありとすればなり、^{ヘゲル}ヘ
 ゲル曰く「靈化は敢て人心の實際の進路に新らむべき者を附加することあ
 り吾人の心意已に有せる者に全く異なる形跡を與ふる者に非ず寧ろ宗教
 的の意識を高尚にし神の洞見を深くし其の高度に達せしむるの、故に
 靈化は一個の心内の現象として人心の自然の理法と符合するものあり而
 して其意識の形狀は万人幾分か之を達し得べきものにして只其度異なる

の同題

に過ぎず』(Philosophy of Religion)此の直覺説たるや甚だ大切なるものあれば之を以て靈化説を全く解釋し去るべしと信せざるも尙其の解釋の一要素として之を貴ぶもの甚だ多し。其の靈化説を以て靈化説の範圍内に於てせよ、モレルが天啓と靈化とを區別せるは全く直覺的の範圍内に於てせよ、即ち天啓は其狭き意味に於て云ふときは知るべき事物の顯示にして靈化は寧ろ受くる人に關し其意識の力を高ふするものなりとせり、アトウキは天啓と靈化との關係に就きてモレルと同説を有し只少しく客觀的の元素を重すること氏に過ぎたり、氏の説に依れば靈化とは單に聖靈の勢効が及ぼせる主觀的の結果にして畢竟天啓の準備たるに過ぎずとなす、ラッも亦同説を有し靈化と天啓とは理論上に於て明に異なるも實際正に其永続關係するものなりとす、氏は又天啓とは神の子の顯現を中絶する歴史上の道路を取て來るものなりとの説を主張す、然るにラッは之に反し故ラッ等々の爲せる區別に従ひ天啓を以て超理的に眞理を人心に啓通することとし、靈化を以て超理的に人心を激して

全体の大傾向

筆を取らしめ之に由て誤りなく眞理を他に示す者あり故にたゞは舊約の歴史の書の記者の如き場合に於ては已に記すべき材料を有すれば只之を激まて記せしむる靈化の實必要ありとす、氏は又天啓とは神の子の顯現を以て陳述したる處を概括して之を見るときは學者間に於て聖書に關する説の夫に昔時と異なるに至りしを知るは足る、今その最も重なる變化を擧ぐるときは天啓の如し(一)頑固なる文字的靈化説は稍々衰へて、ラッ、モレル、アトウキ等は之を以て全く無據の説と確定し之を取る者實に少なからず、モレルが「靈化に關する舊説は殆ど地を掃て去り」の代表者モレルが「Dogmatic Theology」云ひは乃ち懷疑説を代表したるに非ず、モレルは實にモレルの國福音主義の感情を代表したるものあり、されば氏は又其言に附加して曰ふ斯く云へばとて敢て近代の人は聖書の靈化を無みすと云ふは非すと、(二)此發達と符合して近來の傾向は聖書の自然的の要素を貴び超自然的の元素は之を通ずる啓示せらるるものとあすにあり、氏乃ち記者の一身其境遇或は天啓の機關として具有する位置等を重玄古來未だ

曾て見ざる程の價值を之に附せり、(三)近來の傾向は又聖書の一部を取て之れに重きを置くこと亦く或は之を神託の蒐集として見ることも少く寧ろ其教訓の全躰を察し又其歴史的の性質を重じ天啓を以て進歩的教育的のものにして始めより全く完全の者に非ずイエス・キリストに至て始めて其目途に達し完全に達したるものありとするにあり、(四)聖書を以て神の憑據ありとせず理由に關して近代の傾向は古へと異なり聖書の道德の標準が人の道德の意識に及ばず勢力に重きを置き又信徒の心中に生ずる確信乃ちイエス・キリストに依れる救贖の道は聖書に示されたるが如くに神より出でたるものなりとの確信も重きを置きて聖書の神出を證するもあり、又奇跡及び預言の證據之を攻撃する者太だ多しと雖も尙ほ之を捨つるの傾向亦し只之を十八世紀に比すれば此兩者を見るを稍々下れり、今日に於ても尙ほ該博なる神學者等は奇跡の大切なるを主張するも之を以て單に聖書の神出を證する憑證とせず寧ろ之を以て天啓總躰の一部とせず神の倫理的行事其人間に對する關係、其自然を管理する力を啓示

するものありとの事實を重するに至れり、之を略言すれば聖書の神出を證するに當て近代の人ば之を前世紀の人に比すれば内部の勢力を奪びたりと云ふべし、是を以て紛々たる批評の中に在て敬信あるキリストの徒は聖書が其道德的宗教上の意に與ふる感化を見又其靈魂の要求を満足せしむるを見て以て其神より出でたる者と確信して動かざるなり之れ實に十六世紀及び十七世紀に於て通例重んじたる「聖靈の證」に新しく且つ勝れる意味を附するものに非ずや、昔時の誤謬は此意を機械的に取り外より人間に與へらるる證言と思ひしにあり勿論神の聖靈は證據を供ふるものなるも同時に又人間の靈の證言を懸すべからず是れ即ち清淨にして汚れなき人の理性、良心、感情の聲なり、神の靈は是等の内にあり又是等を通じて人に證す故に是等の存するは聖靈の現存を示すものなれば敬信の人は是等を見て神の仁惠ある事の兆と爲さずして止むを得ざるあり、
 第三、**神源の批評。**
 批評の形狀太だ多しと雖も一々之を記載するは唯繁雜を招き且つ益少な

溯源批評は
十八世紀の
英國自然神
教に現はる

ければ爰には單に吾人の注意するに足るべき重なる批評を略陳せしむ。十八世紀に於ける英國の自然神教。懷疑説のこの形状は自然宗教を以て其套語とす。故に自然神教者の云ふ處に依れば聖書にして若し自然宗教と符合するものあらば是れ敢て益なき者なり。若し符合せざる以上は有害且虚妄なりとす。彼等は其聖書に反する度に於ては各殊ある處あるも其之を輕蔑し嫌忌したるも於ては凡て同様なり。自然神教者も自然神教者の著書中よてはコリンスが預言を攻撃したるを以て最も大切なる書とす。ウーリヤストンが新約の奇跡を攻撃したるは非常の極端率強にして長く人の注意を引くに足らず。モルガンは舊約書を論ずるに當て大に不敬神の意を表はせり。ボリソングブローグも亦然り。デヤオ及びボリソングブローグは共に神の特殊の攝理あるを否き又新約書の多部は單にキリストの倫理上の教訓に附加したるに過ぎずとせり。テンダルは其著(基督教は創造の時より存す)に於て聖書中にある神の特別の天啓説は却て神の完全に矛盾する者なりと云へり。

獨逸合理派
の起原

十八世紀に於ける佛國の不信仰はテアアの代表する處なるが氏は其説を英國の自然神教に借り之れに非常の階級不信を附加した。テアアは其著(基督教は創造の時より存す)に於て有名なるが非ず其他當時の佛國懷疑者も亦然り。ドナルナイ自身は合理論の部類に入るべきや否やを知らざれども氏が千七百七十二年出版したる靈化の説は從來の舊説を脱却せんとするの傾向を促したること疑ひなし。氏は靈化に度あるを唱へ亦聖書は神の言ありと云ふよりは、神の言を有すと云ふべしと云ふ。モムラは氏と同時代の人あるが尙ほ一歩進んで其の合理論者の如く聖書を論じたり氏は靈化を蒙むれる書の中より歴代誌略、エズラ、ヨハネ、マテオス、マルコ、ロマの雅歌、及び其他舊約の諸書、又新約より馬可福音書、腓利門の書及び黙示録等を除き去り、加之ならず氏は又適應説乃ち基督及び使徒等はその教を克く人民に了解せしめん爲に普通の言語を用ひ従て又普通の思想を標準として教へたることあり。

の 独逸合理論 唯理論に發達す

この説を取り、爲めに己れの重んぜたる書の價值をも減じ其教理上の憑據を無くするに至れり。レンシングは又そのラールと同じく其年代は日耳曼合理派の始に屬するも其信仰の點に於ては合理派に屬せしや否や決するに苦むむなり、ドナルト氏の云へる如くレンシングが正當キリスト教を離れたるの度如何を定むることは尙尙は困難なりとす、然れども氏は古のルイナル派の聖書説を離れ聖書を以て重んず倫理上及び文學上の者とて見たるが如し然れども之と同時に氏は敢て單純なる唯理論の中に齟齬する者に非ず其天啓を以て人類を漸く教育し來れるものと思惟したるが如きは大いに聖書學に益したる者なり。唯氏は其説を適當の範圍内に止めざるを以て誤まれりとす。

耳曼合理論、唯理論に發達す。パウロス、ローアー及びウヰグンヤイメ

一等の如き著述家は此部に屬す。彼等は先づ自然法を以て万事を解釋す。然しこの假定を置き夫よりして進んで新約書中の奇跡をも超理的の力に訴へず又記者の正直をも害せず自然法に従ふて解説せんことを、是に於て

の 小 説 論

論 審美的合理

パウロス天使が牧者に現はれたることをば單に氣象上の現象と爲し、悪魔につかれたるものゝ癒へたるは之れキリストの如き高き人物が病者の眞實の信仰を博したるより生じたる自然の結果なりとし、五千人を養ひたるは人民各々キリスト及び其使徒の例に激せられ其倉庫を空ふにたるに依るとし、ラザロが墓より甦りしはキリストの高聲に驚かされ其の痲痺より起てる者なりとし、又キリストの復活は眞の死より復活せるに非ず洞窟の冷氣香料の功能或は暴風地震に伴ひ來れる電氣の流通せるより遂に再び其の氣息を發せし者なりと解説するなり。左ればパウロスは尙は聖書中に一の眞成ある奇跡あるを承認せるが如し乃ち耶穌基督の一身は全く歴史の上に空前絶後のものなりとするなり。ウヰグンヤイメは全く奇跡を放棄し直接の超理的の天啓は神にはあるまじき事とし人間の宗教歴史中にある神の力は只擬理と云ふ範圍内に之を閉塞せり。

審美的合理派。先きに陳述したる唯理論乃ち俚俗的合理派と云ふべき學派に於ては聖書の宗教を輕蔑して殆んど之を無味淡白の者とせしが、

ウエット氏の卒ひたる審美的合理派に於ては大に感情を貴び聖書を文學上より批評せし之を以て宗教的の文學として見るあり、彼等は又聖書の超理的の元素を允諾せざることは敢て俚俗的合理派に劣らずと雖ども單に万事を自然の理に依て解釋せんと力めず小説、造話を假定して自由に解釋せんと試むるなり、彼等の主唱する處を見るに古代の人民に詩の能力乃ち想像力甚だ盛なりしかば種々の模表を以て教訓を表はすの傾向多かり、従ふて宗教の事も其儘に之を受くべからざる者多しとあす、左れば彼等は同時に此元素を以て甚だ大切なるものとす蓋し之に依て宗教の本源の存する處ある感情(形式を備へず又完全の形式を備ふる克はざる者)と表現し正心を以て之を受くる人の徳を進むるに足るものかればなり、
 マモス、アムソルドの書を見ると其切要なる點に於て此學派と一致する所あるを見る、
 ストラウスの小説説、
 ウエットはカント及びヤコビの哲學より推究せるフライスの哲學より發程しストラウスはヘゲルの哲學より出立し而し

ストラウスの小説説

で、ウエット上の批評の結果を變改擴張したり、ウエットは聖書中に小説の多くあるを唱へたれどもストラウスは進んで直に今日の福音書の歴史は小説なりと云へり、勿論奇跡を以て純粹の小説となし其他の記事にも小説的の元素多きを主張す、氏の所謂小説とは一箇人の故さらに構造したるものと云ふよりは寧ろ普通の信仰を偶然發表したる者との意を有す而して新約聖書小説に於ては舊約より養ひ來れる救主の希望を以て其の主眼となす、此の理想先きに弟子等の心中にあり而して彼等の想像力は直ちに此の理想に合する歴史を構造したりとあす又ストラウスは其始めの耶穌傳(千八百四十五年)に於て故さらに構造したる者の説を取ること少かりしが後(千八百六十四年)日耳曼人に告げたる書に於て以前の説を尙ほ抱有すと雖ども稍々福音記者が殊更に事實を彩色したりとの説を採れ、又氏の最後の著なる「The old faith in a new light」に於てはストラウスは不信仰の代表者として基督教の名を撲滅し不死の望なき死すべき者として只身位なき宇宙——祈禱を聴かず苦難を恤らざる宇宙を禮拜せしめんと

ハア一氏の發達説

するに至れり。ハア一はキリスト教の開祖を廢斥し異様の傾向相争ふて遂にキリスト教を生ずと必ずしも氏はキリスト教が新約聖書にあるが如き形状を取て發達するに至りしはキリストの一身に依らず寧ろペテロとパウロとの相反對せる黨派の觸撃に依ると必ず、ペテロの備例主義は基督教を純然たる猶太教となせしならん、又パウロの該博冥想的の性質は基督教を以て國民の境遇を超越する一の新らしき宗教哲學となせしからん、爰に兩主義相搏撃すれば之を和合するを要す、而して和合の作因をたなきにあらざり新約の諸書乃ち使徒行傳の如きペテロの書翰の如き或ハパウロの晩年の書翰の如きは兩主義を和合せんとしたる結果なり新約書の多くは *Fondenz Schriften* と呼ぶべし、此等は或はペテロ主義なるか或はパウロ主義なるか否らざれば兩者の差違を蔽はんと力むるものなり此等の書は使徒時代のものに非ずと雖も二世紀中の者あるが如し、クイテン及ピウエルハセセンの舊約批評。彼等が舊約の宗教を見るに當

クイテン及

ピウエルハセセンの舊約論

て超理的の元素を允諾せざることはパウロス及ピウエグシャイダーの合理論の如し彼等はイスラエルの始めの歴史を以て小説的にして信憑す可らずとなし預言者に至て始めて歴史上の基礎を發見すと稱し又彼のモーセの律法ある者はモーセの時代に成れる者甚だ僅少なりとなせり又五書の始めて(クイテンの言)編輯せられしは紀元前七百五十年にして第二はヨセアの時、第三はエストラの時にして是に至て大に附加したる所あり又預言者の先見は單に之れ敬信の預想に過ぎざれば確實の應驗なき場合甚だ多しとなす

溯源批評結局の成果如何

以上陳述したる所の本源よりの批評説は之を以て現今聖書學者の大傾向となすべからざるものなり勿論是等の諸説は舊説を變改するの要素として其用をかせしこと明らか也或る者は之れに由て却て益々舊説に固着せしものあらん、されども多くは聖書の靈化憑據等に關して從來の機械的學説を去らしめたり、然れども是等の極端説は正直ある歴史的の感覺にも反し又聖書の天啓に養はるる靈の意識中に數々現はれ來る證據にも矛

り、何とあれば存在は附性に非ざればなり、又存在は敢て其適用せらるる語の内包を増す者に非ざるなり、三角形の概念は三角形の存するを云ふも是に依て變化し改良さる可きに非ず、實験學的議論は憑證を以て主観より客観に至り理想より實想に至る者ありと、ロッセも亦カントと同く此議論は其論理の方式に於て不正ありと云へり、其言に曰く至上完全者の觀念は其附性として實存を含蓄す故に至上完全者は必然的なりと云ふは明白なる誤謬にしてカントの駁論を蒙れる後は之を辨護するも無益ありと (Mikrokosmos, IX, 4.) 左れをロッセは之と同時に完全者の觀念は其存在者の證を含有すと云ふ然ども其證は論理上の歸結に非ずして理想は實想なかる可らずとの感情にあり、「完全者の完全よりして其實存を論理上推定す可らず然れども推論の迂曲せる途を経ずして完全者の無存は出來得べからずと直接に感ずるなり」(Ibid)

神學者の多數の實験論に對する有様

現今神學界に於ては實験學的議論に一致する者少し殊に其從來の意味に於ては尙一致せざる所あり博士・ヘンド氏のアンセルムの議論の評論は

神學の論議

實に現今思想の大流に伴はざる者なり (Hist. of Doge Bk. III, chap.)、神學者等は大概ロッセと同様の決論を爲すが如し、即ち此議論は其方式に於て誤ると雖ども尙一大眞理を示す何ぞや曰く人の宗教意識内に存する神の觀念は自發的に其實存を確信せるの信仰と伴ふ者なりとの眞理是なり、スタウプマン・アリーの評論の如きは則ち實に此歸結に達せし者なり、又神の觀念は人心の自然に出で其本性中ニ賦與せらるるとの説を主張し同時にアンセルム、アカーットの如き形式的の論證を取らざる神學者等は矢張り此種類に數ふるを適當とす、蓋し斯くの如く唱ふる學者等は皆神の觀念とともに客観的實験を直接に感ずるを主張するものなればあり、カントは又實験學的議論と同く宇宙學的議論及意匠論をも合せて批評したり、宇宙學的議論乃ち有limits的偶然的の存在よりして無限的必然的の第一原因を推定する議論は憑據なき臆測なり、偶然原因の無究の連續は能はずと云ひ、或は必然的の第一原因なしとせば是れ偶然的原因の無究の連續を假定する者ありと云ひ、或は又第一原因をわりとするも是が完全なるを唱

カントは復た宇宙學的議論並に意匠論をも批評したり

此等の議論
尙減せず

ふるが如きは皆證據なき臆測なり。結局論乃ち意匠論は其證を得る處は單に世界を形成せし者は非常に廣大あるを示すのみにして世界物質の創造者を證する能はず。又無限者を示すに足らず何となれば吾人の見る處の世界は有限なれば只此に比例する原因を確定するに足るのみなればなり。

カントの以上の批評は神學界に非常の影響を及ぼしたるは疑ふ可らざるあり。殊に外界より神の存在の其據を求むること少く人の道徳的宗教的意識に訴ふることも多き神學者等には其影響の微明に見るを得べし。又左をカントが批評したる議論は悉く倒れたるは非ず神學者等の多數尙尙以上の諸議論に大なる價值を與へて正まざるなり。カント自身も亦敢て悉く之を放棄し去らざるなり。勿論其缺點は指摘して餘さずと雖も尙實際上の價值あることを拒まざるなり。殊に意匠論の如きは實際上の價值甚だ高しとなせり。氏曰く「此證據は常に尊敬を以て見ざる可らず是れ尤も舊く尤も明に且つ尤も能く人の理想と契合する者あり。是は吾人自身の

不可解の
學問の
神性論

カントの道
徳論の
神性論

觀察に依て發見する能はざりし目的に意匠を顯はす又吾人を導き万有以外に存する惟一の原理に至らしむるに依り吾人の萬有の智識を擴張せしむる者なり。此智識は再び反動して其の原因即ち超絶的の觀念に至らしむ斯くの如くして至上原因の信仰を増加して確固たる認識に至らしむ。

(Transcendental Dialectic). カントの説に依れば此議論の誤謬は何にあるやと問ふは全く確實を缺くの一處にあり。實にカントが此議論に付て承諾せし點より以上を望むべきに非ず。左れを假りに此議論は万有界の有心的原因を確定するのめにして其無限を證する能はずとするも近代宇宙の洪大無量なるを感ずる思想と連絡するに至らば其實際上の結果の實に完全無限の存在者の思想と異なることなし故に宇宙の創造者及び管理者の有心的位を信する者は又其無限なるを疑はざるなり。

カントは道徳論を唱へ之に重きを置きたること既に既に哲學の章に於て充分論述したり。此議論の性質は神學者の一般に認識する所たるは云ふを要せざるあり。

此問題發達の歴史を讀むに起る處の感情

カントの哲學に於ける不可識的説

此問題不就て評論を試むる者は必らず左の事を感せざるを得ざるべし、即ち初代の基督教が初めより認識し來りし證據の今日も尙人心に確信を與へ將來にも亦其根據を失ふことなかるべしとの事はあり、之に反して尤も巧妙なる議論を發見して以て自ら樂める思想界の冒險者等の議論は外面は詭巧あれども其成す所却て少く如何なる眞理を含蓄するにもせよ大なる改良を経ざれば到底惡論の勝を免れざるなり、又意匠論道德論或は人の意識の證の如き普通の證據は活ける神、自由自覺聖善の神を示す者にして單に不定の實跡或は萬物の裏面にありと云ふ實跡を示すのみならず、
 (第三)本質及び附性、
 神の本源の性質を適當に知るを得べきや否やの問題に關しては此時期中に二大反對の説箇々の心中にあり、中間の説神學者の大勢中に行はる、不可識的の極端の其起首の點をカントの哲學に淵源す、カント自身は極端なる不可識論者あるや否やの未だ容易に決すべからず、何とあれば氏

の發起點

シエリッグ及びヘゲルの哲學はカントに反對する極端説に傾く

カントの哲學

の哲學は一方は此方向に進むと雖も他方於ては神を道德者有必者と知るは精密なる意味に於て智識と云ふべからざるも尙道理ある憑證ある信仰と云ふを得べしとの結論に至ればあり、
 なる想像を去ることを遠し又純然たる無識を去ることを二層遠し、此點に於てはカントは彼のハイパー、スベンサーが宗教的の人は白墨を以て神の圖を畫き是れ單に想像より生ずる幻影に過ぎずとて忽ち之を拭ひ去るが如く云へるに異なること明かなり、
 如しと雖も尙氏の批評なる者は自然不可識説を誘導し來れり、他の極端説はシエリッグ及びヘゲルの哲學に於て其起首の點を見るべく又其歸結の點をも見るを得べし、
 識は哲學に欠くべからざる條件ありと唱へたり、
 ば兩氏の哲學より取る所多しとす

及びコンセルの不可識論

の勢力を蒙り半ば絶対の哲學（ヘゲル、ヘンリッング等の哲學を云ふ）が神を完全に見出すを得べしと云るに反動して稍々極端なる不可識論に傾かんとせり。爾氏其使用する言語を異にす雖も實に於ては同様の説を唱へたり即ち先づ第一に神を定義し其よりして其議論を進めたり。マンセル曰く「神を思考するに當てや必ず之を以て第一原因とし絶対者とし無限者として思考せざる可らず、第一原因とし萬物を生ぜ又自ら他物に依て生せられざる者を云ふ、絶対者とは自身に於て又自身に依て存在し他物と必然的の關係なき者を云ふ、無限者とは凡て可能的の制限を離れ是より大なる者を思考す可らず故に之に附加す可き屬性なく其存在の方は凡て永遠より有せざるなる者なり」(The limits of Religious Thoughts, Lecture II) 以上の如くマンセルは哲學的の神の思想を呈出し而して進で其内にある困難を數ふたり、其言に曰く絶対無限は絶対無限としては原因たる能はず何とされば原因とは只結果に關係して存すればなり然れども絶対者は凡ての關係の外に立て存する者あればなり、若し初めは絶対者として存し後原因

彼等が引きたる實際上の結論

因なき能と云は無限と云ふ思想と矛盾す何とされば無限は初より凡てあり得べき者を包含する者なればなり、又絶対者の原因となるは必然的ななされし者とすべからず何とされば是れ關係を含めばなり、又之を有意的なりとすべからず何となれば是れ意識を含み意識は則ち關係を含めばなり、是に依て之を見れば創造及び有心位なる觀念は絶対及び無限の觀念と兩立すべからざるを知るべし、

此説は懷疑説に陥るが如し然れどもマンセル曰く否是懷疑説に導くものに非ず謙遜と信仰を教ゆる者あり、吾人は神は自身に於て如何なる者あるやを推知するを務むべからず、只吾人の實行を導くに足るだけ神の觀念を得ば以て満足すべし、即ち神の本性は如何んぞ知るを要せず只神の如何に吾人をして神を想知せしめんと欲するやを知らば足れり、神の思想に困難あるは神に矛盾ある故に非ず吾人の能力の不完全なるに職由と「神を有心位者と思考するは吾人の義務なり而して神を無限者と思考するも亦吾人の義務あり、勿論吾人は此兩觀念を調和せしむるに難し何とぞか

神の性質の
單純

り、悟も吾人が天洋及び夫を見又見ざるが如し」と。以上は、
 以上の論據に沿ひて先時期に於て盛に行はれたる神の本質の單純説の極
 端を變化せんとするの傾向顯れたる近代の神學者は皆左の事を認めた
 り、曰く「シライネキルヤハ」の爲せし如く神の附性を以て單に吾人の主觀
 上の變化を顯はす名稱は過ぎずと云ふ。又神性の内部より之に應ずる區別な
 しと云ふは共に神に於ける適當なる智識を否拒すると同様なり。故に
 ドルナー、コロセ、カトニス及びホッダの如き學者等は明に舊時の定説
 を非難し神の單純を極端に思考するを不可とせり。其他多くの學者等は
 神の附性を論ずるに當て同様の説を取れり。彼等は神を物質的に構成せ
 られし者と思考す可らずと教ふる。同時に又神は虛無の同一に非ず、何
 となれば虛無の同一は靈と云ふ觀念を去る。と甚だ遠ければなりと教へ
 たり。思エテ、曰く「諸附性は神の内なる眞實の區別を顯はす者
 にして彼等の言は他の者と混同すべからず。彼等の凡ては神に於ける一
 觀念或は一事實の中より混同すべからず。只神を最上完全者とするの觀念は

神の性質の
單純

神の永遠の
附性

此限はあらず」(System of Theol. Dist. I. Chap. 2) の「System of Christian Doctrine」
 客觀的の區別あるのみならず其内部の本質に於て其區別の基礎を有す」と
 (Dogmatic, 346) である。以上は、神の永遠の附性を論ずるに關するものなり。
 神の箇々の附性に關しては此時期中に左程注意せざる。變化ある事を以
 神は其存在の方に於て時間の範圍以上にありとの説は一般に唱ふる所な
 り。リチャード、ランドンは神の永遠とは始なき終なき時と同様なりと
 説けり。然れども一般の美以教派の神學者は之に反してウキスレトの説
 ける。如く神の時間なきことを唱へたり。左れど此時期に於て舊説を全
 く棄てざるも大に之に變化を與へたり。多くの神學者等は事件の繼續は
 充分神の認識する處とあるの必要を感じたるが如し。彼等の議論に依れば
 事件は繼續に於て其現實を得故に若し神は此等を能く知る者とせば其繼
 續の事實を認識せざるべからず。繼續の事實とは一事件が順序に於て他の
 事件の前に在り、一事件は既に通過し去り他の事件は未だ然らずと云ふ如

き事實を指す是れ決して神の絶対の思想に矛盾する者に非ず是れ決して神の存在の方に制限を置く者に非ず、神は暫且の順序を創造するも創造せざるも其自由なり左れと之を創造したるは之を認識せざるべからず、
 「ルナード曰く」若し世界は存在する者ならば神の時間と空間とに關係すること亦論理上必ず生ぜざるべからず、若し時間と生長と同様非ずとすれば眞實に差違おらざるべからず、而して神に關して云も亦今過ぎ去りし者と現在の者及現在の者と將來の者との間に區別おらざるべからず、例へば神は既に悔改せし罪人の過去を現在の如く思ひ玉はす、同又未だ悔改せざる罪人の將來を現在の如く思ひ玉はざるが如し若し神は過去も將來も悉く之を現在と見玉と云ふは直に神は万事を其儘に見玉はすと云ふが如し、何となれば過去も將來も共に現今に非ざること明なればあり、
 「夫れ神の智識は則ち永遠より必然的可能的の眞事を包含する者にても何時も存する者おらざるべからず故に此智識には時間に關する智識及び世界の現時の有様は關する智識屬し居るなり」(System of Christian Doctrine.

神は人間の自由の行爲を前知する問題

預知と預定との關係

(27) 神の自由の行爲を前知する問題、神の自由の行爲を前知する問題は甚だ少し、
 「アダム、グラト」は一種特別の説をなせり曰く神は凡て將來の事を知り得べしと雖も然れども之を知るを欲せずと、左れ此説は氏の屬する宗派に於ても亦其他に於ても一般に棄てられたり、ローセ、及びエズ、デー、マック、グレイは再びシニアン派の説を主張し偶然的の者は其性不可識の者なり故に神の智識の範圍より之を取り除くとも敢て神の全智を損せずと云へり、
 「マートン」は又神は偶然的の事を適當に前知する能はずと云へり、
 「カルビン」派の神學者等は一般に神の預知には偶然的の事おし只神は將來の事を預定するに依て之を預知せし唱ふるあり、
 「フイモルマール」は其持説は必至論にあれば自然カルビン派と一致せり、
 是に反して非カルビン派の者は神の人の自由の行爲を預知するは預定に基本の説を否認したり、
 彼等の云ふ處に依れば預知の方法は深奥にして覺る可はずと雖も然れども聖書の基礎あり又實際上の必要あり、此兩者

中間の智識の問題

神の意志と道徳の關係

は共に預知と偶然とを兩者がら設定す故に神の預知の問題は關しては如何なる困難あるにもせよ之を以て人心の直覺と亦心又原因結果の紐鏈を離るる者となし又尤も遠隔せる者を尤も接近する者の如く直接に知るとなさざる可らず

中間の智識の問題は今代に於ては先代の如く討論の問題とあらず、ドナルド氏の證言に従へば近代の天主教の神學者等は普通に之を承認す此説を却くるはカルピン派の傳説と符合す、ホッヂは之を棄却せしが只、オスナルは例外あり、左れど氏は其理論よりは寧ろモシニ派の神學にて此に歸したる地位を贊せり、ドナルドは此説を取り、オスナルは又之を以て非預定論者の一般に信する信條の一部ありとなせり

道徳の標準と神の意志との關係如何の問題は近代に至るに従て減ずるが如し神の意志を以て最上の標準となす者も之と同時に神の意志は神の性質を表はす者なるを認むるなり、即ち ホッヂ氏の如きは左の言を爲せり曰く「基督教徒の普通に取る所の教理は左の如し、神の意志は凡て道徳

神の意志と道徳の關係

近代の神學思想中に三位說の占有する地位

的の受造者に取て彼等の義務の最後の基礎あり」と、又其後に附加して曰く「神の意志は其無限完全を發表せる者あり、故に道徳的義務の基礎は神の性質あり」と(Principles of Theology)、斯の記述は明に善惡の基礎は單に神の意志にありとの説に反對する人々の思想と一致するが如し

第二節 三位一體說

過ぐる二百年間に於ける自由思想の運動は甚だ盛なりしと雖も三位說の教理は爲に教會の信仰より除去去られ又其尊重を受けざるに至りしと云ふに非ざるなり、勿論從來の推想或は定義には反對せる者あり又其信任を弱くしたる者あり然ども神性に三の區別ありと云ふこと又は父子聖靈なる三顯現の基礎の如きは依然として教會の心中に存して動かざるあり、又ニカエ信經中に記述したる正統派の教理は尙甚だ廣く行はるる事明なり

三位說信仰の基礎に關しては或る學者は重に聖書の證據を引き來り或る學者は天啓の外に哲學思想に訴へて之を證せんとせり、後者はヘゲル派

中の稍々正統説に傾く人々の中に多く見る所なり、マーハインチタック曰く「基督教徒の神學者等も三一の神の外に神を有する能はず教會の教理は道理の教理にして真理なり故に如何なる科學的の智力を以て見るも尙真理たるを失はずと」(Dogmatics, 1848, P. 26, 128.) マウケンケアード曰く「三位一體の教理は單に摸表の無暗に結合したる者に非らず實に此教理は基督教信仰の中心のみならず基督教哲學の中心たる真理なりと」(Introduction to the Philosophy of Religion, 1880, P. 75.) ヘゲル派にあらざる學者中にも三位一體の教理を以て實に神に關する哲學的思想中に入る可き者とし確實正當なる神の概念乃ち神を有心的創造的の智慧及び意志と概念するには三一の教理缺く可らずとなす者多し、マーランセン曰く「三位一體なる本源の思想は神の有身位なる觀念と同一なり、故に三位一體を實体的に思考すること、是則ち神の身位的生命に必要な本源の形狀を思考することあり、又神の本質中に身位及び自覺力あるを思考するに必要な時を思考することなり」と、細言すれば身位及び自覺力とは共に自我を客觀にするの必要ありと、

哲學上此教理の必要論

哲學上此教理の必要論

る者なり、而して客觀たる自我と主觀たる自我とを結付くるの必要あり者あり、是則ち三位一體の進路たるに外あらずと云ふにあり (Dogmatics, SS.) ドルナー亦同論を唱へて曰く「絶對の神の自覺力とは只三一の方々に於てのみ思考し得べき者なり……神は其身位再顯の行爲を自覺す之に依て有身位と思考せざるべからず神は三つの本位に於て有身位なり」と (System of Christian doctrine, SS 316, 32.) 氏は又三一の説は神と世界との關係に於ける自然教的の思想及び凡神教的の思想を防ぐに尤も安然ありとす、エッウペンメーアも亦同様の記述を爲せり、氏は神と世界との關係を思考するに於て三一説の甚だ利益あるを唱へて曰く「神の外に世界ありとする説の只三一説を基礎としてのみ立つを得べし、何とされば自身世界とあることなく自身の外に創造を置き而して其上に高く立て之が大君となり嚮導者となり萬福の源とあり得るは單に三一の神として完全の世界を自身の爲に形造せりとして始めて得べきなり、神の愛は既に神性内部の三位に依て満足せらるると雖ども發して世界創造となれり、世界創造は

哲學上此教理の必要論

必然的に非ず全く自由より出づ」と(Dogmatics, 1844. Vol. III. P. 8.) 神の愛が三一の生命を要すとの説はステウヂンメアの他にサートリアス、ライオンナ、及びウエリアス、ミウラーの如き有名なる教理學者の共に唱ふる所あり。以上陳述したる所は三一の教理を尤も哲學的に解釋したる者にして盛行はれたる説なり、則ち之を概言すれば三一の進路は自我を客觀にし再之を自我と結合せしむるの進路にして第一は子の產生を示し第二は聖靈の發出を表すと云ふあり。子の永遠發生説なる正統派の教理より分離したる者は三位一體を以て神の存在の法を表する者ありと唱ふる學者中に多し、アダム、クラークは其代表者と云ふべし、ニユー、イングラントの神學者中にも永遠發生説を非難する者あり、サムエル、ホップキンスは自ら此説を取ると雖も氏の當時には多く之に反對し子ある語は教主成肉の後の状態に適用すべしと唱ふる者あるを示したり、其言に曰く此説は寧ろ現今に於て甚だ勢力を得つ

神子の永遠發生説の分離者

あるが如しと(System of Doctrines, Pt. II, Chap. 2.)、ニムモンズはホップキンスに反對して永遠發生説は永遠無意味の説ありと嘲笑せり、モーセス、スチニアートは三位一體ある語は明白なる矛盾ありとす、斯くの如き教理はニユー、イングラントには地を掃はんとすと云へり、其言に曰くニユー、イングラントの諸教師は殆ど皆此説を却けんと欲し少くも此説を以て大切なる教理とはあさず、吾儕の中に尤も有名なる神學者は過る四十年間公然此説を非難せりと、スチニアートは亦神の第二位と第一位との同等は矛盾なりとして之を却けたり氏曰く聖書中に此を唱ふるが如く見ゆるハ聖書の語は神の顯現を基とするの事實に依ると次の語は以て氏の持説を示すに足る曰く「父子聖靈とは救贖の業に於て神の吾人に顯現したる區別を稱する言語に過ぎず神性内部に其區別あるを示す者に非ず」と(Letters to Samuel Miller.)

近代の神學者中には第二第三位の神の次位説を重する者甚だ少し、カニスは此點に於てはアーミニアン派のエピスコピウス、カトセラエウス及

次位説を唱ふる三位論者

びリムボルグ等と同説を取り子及び聖靈は神の身位なれども父に依屬すれば必ず下位に居らざる可らずと唱へたり、氏はアウガステンの説に反し異説を敷へてユニテリアン派アリアン派、方法論等とあし最後に同列説をも入れたる。

シライエルの説は方法論の一種なり、氏は神の性質を關して不可識説を唱ふれば自然其三一説は攝理上の三一説となれり、氏の教は曰く神は自身に於ては父とあり救贖に於ては子となり教會に於て聖靈となる、基督の殊に萬人に勝るは其神覺力にあり吾人の神覺力は不明にして且の弱し基督の神覺力は明瞭確實にして且つ強し是れ實に基督の中に神の存在ある所以なり、「基督の神覺力の絶對的に強健あるを唱ふるは基督の内に神の居玉ふとを唱ふると同一なり、基督の罪惡なき人性は實に神の生命の適當に寄る所にして又其身位的形狀を得之を顯はすに尤も適せる機關なり」(Der Christliche Glaube S. 93. 66.)

スウエデン

ボルグの説

を信せず、其教は曰く神は肉に於て顯はれ玉ふ前には三位あらざり、自身に於ける神、肉と一致したる神、働作的の神、是れ實に三位説を生ずる惟一神の顯現なり、スウエデンボルグは又アタチヤン信經が如何にして其矛盾を免るべきやを説て曰く「若し彼等は父は神の本質を有し子は神の本質を有し聖靈も亦之を有す而れども三つの本質あるに非ず一にして分つべからざる本質なりと云はば此に依りて其奧義を説き去るを得べし、父は万物の依て生ずる神となし、子は神人の來れる神となし聖靈は發出せる神となす、而して三者一あり若し譬喩を以てせば父は人の靈魂の如く神人は其靈魂の跡の如く而して聖靈は兩者より發出する働作的の如し、然らば三本質の一にして分つべからざる本質たるの理を了解するを得べし」(True Christian religion)

セルマン合理派は其初めサベリアン派及びアリアン派の説を翼賛し正統派の三位説を却けたりしが後に至ては單に基督の人性説を主張するに至れり

獨逸合理論の發達

英國及び米
國の惟一派
が基督の性
質に關する
諸説

既に論述したることありしが如く英國及び米國のユニテリアン派は其源をアリアン説に發せしと雖も後進て單純なる人性説を取るに至れり、チャンニングの死するに先て米國ユニテリアン派の多數は既に此點に達せり、チャンニング自身は此説に至りしや否やは未だ決せざる問題ありと云、氏の著書中には明に此問題を斷言せず氏は曾て云へり「我は基督を以て人間以上と信す」(Works, Vol. IV, P. 150.) 然れども前後の文勢を觀察するに超人的の元素は基督の性質の元來人間に超越するにあるか或は單に非常の天才の結果なるや語を替へて云へば基督には適當に人間以上の性質あるや或は神の靈著しく注ぐに依て普通人と異なるに至りし者か氏は未だ其間に判決をなさざるが如し氏の友ガントットは氏が常に基督の前存を信宏たるを證せり、然れども其後の友輩は之を信せざるあり、アリアン派の説は今日に至ても尙之を取る者ありと雖も其數甚だ少し近代のユニテリアン派の急進家は基督を以て摸範的の人間とあし又教師となすをも拒む者ありと雖も又其中には此性質を基督に歸するのみな

らず三位一體を受けざる限りに基督の人性の神性と一致する者なるを信せんと務むる者あり、此種の人々は自然神教の持説を去ること遠く人性と神性との關係に付てはフヒクテ、ヘーゲル等の哲學と近接する所多し、エフ、エチ、スツヂの如きは其例あり氏は父子聖靈の教理は基督教の一大特色にして神に就て正當なる思想を有せんとするに缺くべからざる教理ありと云へり(Unitarian affirmations)、及ニカヤの總會を稱賛して曰くアタチアン説がアリアン派なる人間中に神の居るを否拒する教派に打勝ちたるは感謝に堪へざるなりと(Reason in Religion)、又曰く「皮相を見るの人心は當時教會及び世界を攪亂したる問題は實に無意味の弄辨に過ぎずとなす然れども神の人と一致せるは決して無意味の事に非ず實に大切なる眞理なり、之を宣言したるニカヤの總會は實に地上に曾て集會したる會議中にて尤も大切なる者あり實に人間思想の歴史中に新紀元を興へし者あり」(Ways of the Spirits, and to her Essays.) 此等は明に基督の中に神性と人性との一致あるは尤も大切なる事にして基督教を適當に思考するに

欲くべからざる者となすあり然ども是れ敢て正統派の教理に非ずしてフ
ビクテ、及びシェリング等が其初めの哲學に於て陳述したる基督の身位
に關する説たるに過ぎず。即ち神の降世とは人間宗教歴史中に絶えずあ
ることにして只基督には神人の一致尤も高尚ありとす然ども敢て人間と
異なるに非ず又人間以上あるにも非ず只模範的の人間にして神性を尤も
多く受けたれば是に依て神の子と稱すべきなり基督の超越は單に關係的
あり彼は實に同胞の中に立者あり人類は神の子あり則ち其實在或は力に
於て神の子あり是れ耶穌が自ら至上の例を示して吾人に與へたる真理あ
り (Unitarian affirmation) エーリース、フレイマン、クラークは又初代教會がアリナ
ン説を却けたるを稱揚せり、氏は又基督中には神性と人性と一致しある
を盛に唱へたり氏が正統派を駁する所は實に基督に神性を附するの足ら
ざる點にありとす、蓋し正統派は永遠發生説を唱ふれば子に與ふるに通
與せられたる神性則ち次位の神性を以てする者にして父の分つべからざ
る神性を以てするに非ざればなり (orthodox, its truths and errors appendix) 氏は

又基督を呼で神人となし神の靈と人の靈と完全に一致したる者なりと云
ふを猶豫せざるあり (Ibid. Chap. VIII) 然ども以上の如き語あるにも拘はら
ず人性説ハ未だ全く棄てられたるに非ず吾人は只爰に基督を尤も尊重し
たる者の言を擧げたるに過ぎず基督を擧げて人間以上とする者も其本質
に付て爾か云ふに非ず寧ろ其地位に關し或は其人性の完全に關して云ふ
なり、キリストの身位は人なり左れど其内に居玉ふ神と完全の一致を有
す (Ibid.) キリストは斯く神と一致するに依りて神を眞正に顯はし是に
依て吾人をして神が語り又行ひ玉ふが如く感せしむ、
ジョニームス、マート
ン氏も亦實に此と同説を取れり氏曰く「基督は獨り偉大にして且つ近くべ
からざる神聖を纏ひ直に良心の眼を開て聖淨なる神乃ち其内に寄り真理
と恩寵とを以て彼を満たしめたる父を知覺し之を知るあり、吾人ハ天に在
て統轄する者は地に在て尤も神性ある者より完全少しと信する能はず、
而して柔和にして而して威嚴ある耶穌よりも完全多き者を想像する能はず、
故に彼一たび地上に來て其恩惠を垂れてより以來基督教國の人心は

彼に似たる神を拜するに至れり」(Studies of Christianity.)
 チャーニンクは「聖靈を定義して道德的照明的説諭的勢力あり」と云へり
 (Works, Vol. III. P. 94.) ムッチェ曰く「聖靈は神の特殊の働作力にして直接間
 接に人間の宗教的道德的の教育を管理す是れ天性に於ける神と異なり、
 此特殊の法に於て働く神なり」と (Ways of the Spirit.) 氏は又ヘゲル派の語法
 に従ひ聖靈は常に發出し流出する所の神なりと云へり
 此の神は、
 神の働作力にして直接間
 接に人間の宗教的道德的の教育を管理す是れ天性に於ける神と異なり、
 此特殊の法に於て働く神なり」と (Ways of the Spirit.) 氏は又ヘゲル派の語法
 に従ひ聖靈は常に發出し流出する所の神なりと云へり

無より創造
 の説を變更
 せんとする
 傾向生ず

第三章 創造及び被造物の教理

第一節 世界の創造

夫れ有神論の思想を失ひたる所の哲學は勿論世界創造の思想を有すべき
 者にあらず是を以て物質論、物心同一論、凡神論等の哲學には創造の理
 より寧ろ發達の説を説くあり
 世界は無より造られたりとの正統教の信仰は有神論を取る所の人々に依
 ても數を反對せられたることあり、サー、井リアム、ハミルトンの如きは則
 ち此種の人なり、氏の唱ふる所に依れば存在物の總躰は或は滅ぶ或は増
 すと思惟する能はず、是故に創造とは神力の開展と思惟すべく又其反對
 なる消滅とは則ち神力が再び其末ぶ開展せざる本の状態に皈る者と云は
 ざる可らずとす、氏の言に曰く「創造とは既に前に力の内に存せし者を後
 に行動の内に存せしむるを云ふ、又之に反して消滅とは既に行動内に存
 せし者を後力の内に存せしむるを云ふ」(Lectures on Metaphysics.) ヲフ、
 氏は尙一層甚だしく正統教の流を離れたり、氏の言に曰く「吾人

は神自身は世界の以て造られたる所の實質なりと云ふべき乎、余は或る意味に於て之を許さざるを得ざるあり」と、氏は世界は無より造られたりと云ふよりは寧ろ靈より造られ神の開進の結果ありと云ふが如し、然れども之と同時に氏はスピノザ派を取らず又一般に凡神教を棄てたり、蓋し凡神教は神の有身位性を拒み又道徳的管理を拒むを以てなり、氏曰く「凡神教には物質の世界屬し有神論には靈の世界屬す」と (Ibid., Essay X.)、マルタンセンは正統教理を否拒するよりは寧ろ之を解釋せんと欲し云て曰く「神が以て世界を創造せりと云ふ無とは是れ神の意志中に在る可能性を稱する者にして是れ實に世界の萬實物の根源なり」と (Dogmatik, § 61.)、サムエル、バリスの説も亦殆ど之と同様ありと雖ども氏は意志の可能性と云はずして神の全満中に隠伏する永遠の力と稱せり、其言に曰く「創造といふ無より或る物を生じたるに非ず神が其無量無限の全満中に隠伏する永遠の力を働き出だせしに過ぎず、此力空間と時間の限界中に働き斯くして自ら形成し以て有限の實物となれり」と (The Philosophical Basis of Theism, 1883, P.

創造に於ける神の自由の問題

515) 夫れ隠伏力より開展して一箇形成の力に至ると云ふは實に是れ無より造られたりと云ふ語の中に含まるゝ意味を悉く含有するに足る又創造は神の自由の働にして其主上權を働かしたる者なりとの正統教の説に反對せし者數々之ありきライプニツは其著、Theodicy (神と世界の罪惡との關係を論ずるもの) に於て神は必ず世界を創造せざるべからず只此必然は形而上學的の必然にあらず道徳的の必然あり、即ち神は最上の目的を撰まざるを得ざればありと云へり、ローセは又神と云ふ思想は實に必ず創造と云ふ思想を含有せざるを得ずと唱へて曰く「神は必ず世界を造らざるを得ず、何となれば神は其本質愛なればあり」と、又曰く「創造とは始なく終なき進行と云はざるべからず只其造られたる世界と其内の萬物との始を有するのみと」 (Dogmatik, I, § § 37-39.)、ハッチ曰く「創造は神性の必然的の顯現と云はざる可らず」と、氏の必然の基礎ハヘゲルの思想と同一靈なる神の自現には必ず創造の進行ある可らずと云ふにあり、(Ways of the Spirit, Essays VII.)

創造と保存との間の區別の度

モーセの創造の記録する諸説

創造と保存との區別の廣狹は萬有の第二原因に歸せし範圍の如何に依れり、神學者中ふは創造は萬有に或る一種の實質的存在を與へしと主張する者多しと雖も之に反する説を取り萬有は只神の直接の作働を示すのみ故に獨立の種類ありし單に神の方が萬有の法則に従ひ神の計畫に従て働くあるのみと唱ふる者次第に多し、教授バオンは此説を主張して曰く「物質及び物質的の者は實質的存在を有せず單に現象的存在を有するのみ、蓋し此等の者は必ず或者に依屬せざるべからず、又凡ての主觀を缺くものなるが故に現象的存在より外存在を有する能はざるや明なり、然らば宇宙は次の要素を含有す(一)無限者、是は空間及び時間の形狀に於て働くなり、(二)或る法則に従て働く体系、此系統は思想中には外部の宇宙を顯はるゝなり(三)有限の靈、是は此系統に關係あり其直覺中には此体系智覺の形狀を取るあり」(Metaphysica, 1882, P. 466.)

學術的考究の歩次第に進むに及でモーセの創造説に反對の思想を有する者多く出來り十八世紀の終に及では其數甚だ多くなれり、次に擧ぐる處

(1) 哲學上の小説

(2) 一箇の寓言

(3) 一箇の歴史

は則ち反對の諸説なり、(一)モーセの創造説は哲學上の小説あり、此説を取る者はアイクホルン、ヘンケ、ガブレレル及びパウラスの如き合理論者なり、(二)モーセの創造説は一箇の寓言あり、此説はヘルツルの呈出せし處あり、(三)モーセの創造説は其事實一箇の歴史あり、此説は甚だ廣く行はる且つ其内に數説を含有せり或る人は該記録中には修飾の部分實歴史より多しと唱ふ、(四)ナツプは之を以て六箇の繪圖とあし云て曰く畫工の藝と同じく其基礎の實物なりと雖も其個々の點に及では必ずしも精細なる實物となすべからずと、アレキサンダー、キンチエル曰く是は敢て目途なき妄想に非ざるべきも又科學の示す所と妙に和合すと云ふとも尙其文辭組織は東洋風の詩なることを忘るべからずと、ニコーマン、スミス曰く是は記憶を助けん爲の目的を以て能く整記せし者なりと、タローア、ル井スハ之を

ボルグは凡ての天使は本と人なりと唱ふ
獨逸合理派の立場

之に反對の潮流

なりとす、氏の言に曰く「以前に人間たらざりし所の天使あることなし」と
[True Christian Religion, S. 121.]
獨逸合理派の盛なる頃に當ては天使殊に悪天使に關しては消極的の說甚
だ強盛なりき、新約書中に悪魔につかれたりきとあるは、適應の說に
依て解釋し去られたり、或人々は尙悪魔に身位ありと云ふは笑ふべきの
至りざりと説くなり、然れども獨逸神學社會にも之に反對なる潮流ある
ことば、ドルナー氏の次の言を見ても知るを得べし、曰く「ミンチ、トウエ
ステン、ローゼ、シュニアス、ミエレル、トラック、ランゲ、マルテシ
ン、並にトマッアス、ホフマン、カーニス、ピリツセ、ルサド、等は
皆單に罪惡は人性中に存すと云ふのとならず惡靈あつて人間を左右する
を公言せり、實はロマンクは此說を取る者の上に立つと稱する人々を諷
刺したるに至當と云ふス」[System of Christian Doctrine, S. 86.]
第三節 人間論
第二、人間の本源の性質及び状態。

アダムの本源の狀態に關して近代の神學者等の立場

之に關する天主敎の說

近代の神學は敢て科學上の獨斷說即ち原人等は下等の靈民にして禽獸と
同類ありきと云ふ說を承認せずと雖も、アダム完全の舊說を省略する者
なきにあらざり、左れと過ぐる數十年間此問題を論ずる者は皆溫和謙遜を
以て之を爲せしが如し、
本源の正義に關して天主教と新敎との間に先時期に於て鋭き反對ありし
が其反對は近代に至ても多くは存せり、左れを或る新敎者は、ペラギアン
說に傾かざる者と雖も尙改革者の說、正義聖潔は創造と共に與へら
れし者にして後附加せられたる特別の賜にあらざるとの說を持するは甚
だ不都合なるを唱へたる者あり、
然れども、曰く「始祖が神に對して有せし正眞の關係は決して完全の狀態に
である能はず又は單に天性のみに非ず是れ只一箇の起始にして將來發達し
て人間の特點を得るの可能性を含有するに過ぎず故にアウガスタンの敎
說は偏僻あり蓋し氏は無罪と聖潔とを同一視し又始祖には純潔なる意志
あり明晰なる智識ありとなせばなり是等は皆自由發達を遂げて始めて達